

夫だから自分に標準は無い。或は有つても標準を立て通すだけの強い猛烈な勇氣を缺いて居るか、何方かなのである。然しながらインデペンデントの側の方は、自分に一種の目安がある。アイデアル・センセーション、夫が個人的になつて居て、兎に角夫を言ひ現はし、夫を實行しなければ居ても立つても何うしても居られない。風變りではあるが、人からいくら非難されても、御前は風變りだと言はれても、どうしても斯うしなければ居られない。藪尻みは藪尻みで、何うしても横ばかり見て居る。是はインデペンデントの方の分子を餘計有つて居る人である。だからかう云ふ人と云ふものは寔に厄介なもので、世の中の人と歩調を共にすることは出来ない。おい君湯に行かう、僕は水を被る、君散歩に行かないか、俺は行かない座禪をする、君飯を食はんか、僕はパンを食ふ、さういふ様なインデペンデントな人になつては手が付けられない。到底一緒に住む事は困難である。然し人に困難を與へるから氣の毒な感じが無いかと云ふと、さうではない。唯そんな事は考へて居られないのでせう。それが本統のインデペンデントの人と云はなければならぬ。厄介ではあるけれども、イミテイトする人或は自己の標準を缺いて居て差し障りのない方が間違ひが無くて安全だと云ふ様な人に比べれば、自己の標準が有る丈でも此方の方が恕すべく貴ぶべし——と云つたらどんな奴が出て來るか分らぬが、事實貴ぶべき人もありませう。兎に角インデペンデントの人にはまあ恕すべきものがあると思ふです。

元來私はかう云ふ考へを有つて居ます。泥棒をして懲役にされた者、人殺をして絞首臺に臨んだもの、法律上罪になると云ふのは徳義上の罪であるから公に所刑せらるゝのであるけれども、其罪を犯した人間が、自分の心の徑路を有りの儘に現はすことが出來たならば、さうして其儘を人にインプレッスする事が出來たならば、總ての罪惡と云ふものはないと思ふ。總て成立しないと思ふ。夫をしか思はせるに一番宜いものは、有りの儘を有りの儘に書いた小説、良く出來た小説です。有りの儘を有りの儘に書き得る人が

あれば、其人は如何なる意味から見ても悪いと云ふことを行つたにせよ、有りの儘を有りの儘に隠しもせず漏らしもせず描き得たならば、其人は描いた功德に依つて正に成佛することが出来る。法律には觸れまじ懲役にはなりません。けれども其人の罪は、其人の描いた物で十分に清められるものだと思ふ。私は確かにさう信じて居る。けれども是は、世の中に法律とか何とか云ふものは要らない、懲役にすることも要らない、さう云ふ意味ではありませんよ。それは能く申しますと、如何に傍から見ても氣狂じみた不道德な事を書いて、不道德な風儀を犯しても、其經過を何にも隠さずに腹の中をすつかり其儘に描き得たならば、其人は其人の罪が十分に消える丈の立派な證明を書き得たものだと思つて居るから、さつき云つたやうな、インデペンデントの主義標準を曲げないと云ふことは恕すべきものがあると云つた様な意味に於て、立派に恕すべきであると思ふ事が出來ると、私は考へるのであります。

然し斯う云ふ風にインデペンデントの人と云ふものは、恕すべく或時は貴むべきものであるかも知れないけれども、其代りインデペンデントの精神と云ふものは非常に強烈でなければならぬ。のみならず其強烈な上に持つて來て、其背後には大變深い背景を脊負つた思想なり感情なりがなければならぬ。如何となれば、若し薄弱なる背景がある丈ならば、徒にインデペンデントを悪用して、唯世の中に弊害を與へるだけ、成功は迎へ出來ないからである。

此處に成功と云ふ意味に就いても説明を要する。又強い背景と云ふ事に就いても説明を要するが、強い背景と云ふものは何だと云ふと、夫は別なものではありません。例へば私なら私が世の中の仕來りに反したことを、斷言し、宣言し、さうして夫を實行する。其時に、若し夫が根柢の無い事を遣つて居るならば、如何に私自身には夫が必然の結果であり、私自身には必要であらうとも、人間として他の人の爲にならぬ。何等の影響を與へる事が出來ない。何等の影響を與へる事が出來なければ、私は文字に現はれたるイ



ンデペンデントであつて、其文字に現はれたるインデペンデントなことをして、最後に文字に現はれたるインデペンデントで死ななければならぬ。人には何等の影響を與へざるのみならず、其インデペンデントは人の感情を害し、法則と云ふものに一種の波動を起して、人に一種の不愉快を醸させるに過ぎないのであります。夫ではどんな風な深い背景を有つて居なければならぬかと云ふと、例へば非常に個人主義の様な佛蘭西革命でも、明治改革でも宜しう御座います。徳川家が將軍に成つた末で餘り勢ひは強くなかつたけれども、兎に角將軍と云ふものが政權を持つて居つて其上に天子様が居られると云ふ。是は一般の法則でないかと云ふ處から、習慣的に續いて來た幕府と云ふものを引つ繰り返したと云ふのは、其引つ繰り返ると云ふ時の人の胸中に同情があつて、其同情を惹き起すと云ふ事が出来なければ、あれは成功は出来ないのである。だから徒にインデペンデントと云ふことは不可ない。人間の自覺と云ふものは一步先へ先へと來るものである。一步遅れたら人より一步遅れて歩行かなければならぬ。人は相當の時期が來ればその通りになるべき運命を持つて居るのだから、一步先に啓發しなければならぬ。夫が強い深い背景と云へば云へる。夫がなければ成功は出来ぬ。

成功と云ふことに就いて歴史などの例を挙げたが、誤解されるといけないから茲に手近い例をもう一つ挙げて置きたい。學校騒動があつて其學校の校長さんが代る。此學校ではありませんよ。さうすると後に新しい校長さんが來ませう。さうしてその學校騒動を鎮めに掛る。其時は色々思案もやりませう計畫も要りませう。刷新も色々ありませう。さうして行く往けばあの人は成功したと云はれる。成功したと云ふと、其人の遣口が刷新でもなく、改革でもなく、整理でもなくとも、その結果が宜いと、唯その結果だけを見て、あの人は成功した、成程あの人は偉いと云ふことになる。ところが騒動が益大きくなる。さうすると今迄遣つた其人の一切の事が非難せられる。同じ事を同じやうに遣つても、結果に行つて好ければ成功だ

と云ふが、同じ事をして結果に行つて悪いと、直ぐにあの人の遣口は悪いと云ふ。その遣方の實際を見ないで、結果ばかりを見て云ふのである。その遣方の善し悪しなどは見ないで、唯結果ばかり見て批評をする。夫であの人は成功したとか失敗したとか云ふけれども、私の成功と云ふのはさう云ふ單純な意味ではない。假令その結果は失敗に終つても、その遣ることが善いことを行ひ、夫が同情に値ひし、敬服に値ひする觀念を起させれば、夫は成功である。さう云ふ意味の成功を私は成功と云ひたい。十字架の上に磔にされても成功である。かう云ふのは餘り宜い成功ではないかも知らぬが、成功には相違ない。是はテンポラルな意味で宗教的の意味ではない。乃木さんが死にましたらう。あの乃木さんの死と云ふものは至誠より出たものである。けれども一部には悪い結果が出た。夫を眞似して死ぬ奴が大變出た。乃木さんの死んだ精神などは分らんで、唯形式の死だけを眞似する人が多いと思ふ。さう云ふ奴が出たのは假に悪いとしても、乃木さんは決して不成功ではない。結果には多少悪いところがあつても、乃木さんの行爲の至誠であることと云ふことはあなた方を感動せしめる。夫が私には成功だと認められる。さう云ふ意味の成功である。だからインデペンデントになるのは宜いけれども、夫には深い背景を持つたインデペンデントとならなければ成功は出来ぬ。成功と云ふ意味はさう云ふ意味で云つて居る。

夫で人間と云ふものには二通りの色合があると云ふことは今申した通りですが、此イミテーションとインデペンデントですが、片方はユニティー——人の眞似をしたり、法則に囚はれたりする人である。片方は自由、獨立の徑路を通つて行く。是は人間のそのバイエターを形作つて居る。かう云ふ両面を持つて居るのではありますけれども、先づ今日までの改正とか改革とか刷新とか名のつくものは、さういふやうな意味で、知識なり感情なり經驗なりを豊富にされる土臺は、インデペンデントな人が出て來なければ出来ぬ事である。若し夫が出来なかつたならば、吾々は吾々の過去の歴史を顧みて如何に貧弱であるかと云ふ



ことを考へれば、其人は如何に吾々の経験を豊富にして呉れたかと云ふことが能く分るのであります。其意味でインデペンデントと云ふものは大變必要なものである。私はイミテーションを非難して居るのではないけれども、人間の持つて生れた高尚な良いものを、若し夫だけ取り去つたならば、心の發展は出来ない。心の發展は其インデペンデントと云ふ向上心なり、自由と云ふ感情から來るので、吾々もあなた方も此方面に修養する必要がある。さう云ふことをしないで生きては居られません。また自分の内心にさう云ふ要求の無いのに、唯その表面だけ突飛なことを遣る必要は無論ない。イミテーションで済まし得る人は夫で宜しい。インデペンデントで働きたい人はインデペンデントで遣つて行くが宜しい。インデペンデントの資格を持つて居つて、夫を抛つて置くのは惜しいから、夫を持つて居る人は夫を發達させて行くのが、自己の爲日本の爲社會の爲に幸福である。かう云ふのです。

繰り返して申しますが、イミテーションは決して悪いとは私は思つて居らない。どんなオリヂナルの人でも、人から切り離されて、自分から切り離して、自身で新しい道を行ける人は一人もありません。畫かきの人の繪などに就いて言つても、さう新しい繪ばかり描けるものではない。ゴーガンと云ふ人は佛蘭西の人ですが、野蠻人の妙な繪を描きます。佛蘭西に生れたけれども野蠻地に這入つて行つて、あれだけの繪を描いたのも、前に佛蘭西に居つた時に色々の繪を見て居るから、野蠻地に這入つてからあれだけの繪を描くことが出來たのである。幾らオリヂナルの人でも前に外の繪を見て居らなかつたならば、あれだけのヒントを得ることは出來なかつたと思ふ。ヒントを得ると云ふこととイミテイトすると云ふことは相違があるが、ヒントも一歩進めばイミテーションとなるのである。然しイミテーションは啓發するやうなものではないと私は考へて居る。

夫から、イミテーションは外壓的の法則であり、規則であると云ふ點から、唯打ち毀して宜いと云ふも

のではない。必要がなくなれば自然に毀れる。唯、利益、存在の意義の輕重によつて、夫が豫期したより十年前に自ら倒れるか、十年後に倒れるかである。又オリヂナルの方が早く自然に滅亡するか、イミテーションの方が先に滅亡するかであつて、大した違ひはない。片方だけを悪いとは決して言はない。兩方も各々存在するには存在すべき理由があつて存在して居るのである。殊に教育を受ける諸君の如きものに向つて規則を無くしたら逆も始末が付かない。又兵式體操なども出來ない。子供の内は親の云ふことばかり聞いて居つても、段々一人前になつて來るとインデペンデントと云ふものは自然に發達して來る。また發達しても然るべきやうな時期に到着するのであります。一概に唯インデペンデントであると云ふことを主張するのではないのであります。

けれども近來の傾向を見て、世の中の調子を見て、大體はインデペンデントに贊成である。今日の狀況を以て學校の規則を蔑視して自分勝手にしろと云ふのはありません。夫は別問題ですが、今の日本の現在の有様から見て、何方に重きを置くべきかと云ふと、インデペンデントと云ふ方に重きを置いて、其覺悟を以て吾々は進んで行くべきものではないかと思ふ。吾々日本人は人眞似をする國民として自ら許して居る。また事實さうなつて居る。昔は支那の眞似ばかりして居つたものが、今は西洋の眞似ばかりして居ると云ふ有様である。夫は何故かと云ふと、西洋の方は日本より少し先へ進んで居るから、一般に眞似をされて居るのである。丁度あなたの方のやうな若い人が、偉い人と思つて敬意を持つて居る人の前に出ると、自分も其人のやうになりたいと思ふ——かどうか知らんが、若しさう思ふと假定すれば、先輩が今迄踏んで來た徑路を自分も一通り遣らなければ茲處に達せられないやうな氣がする如く、日本が西洋の前に出ると茲處に達するにはあれだけの徑路を眞似て來なければならぬ、かう云ふ心が起るものではないかと思ふ。また事實さうである。然し考へるとさう眞似ばかりして居らないで、自分から本式のオリヂナル、



本式のインデペンデントになるべき時期はもう來ても宜しい。また來るべき筈である。

日露戦争と云ふものは甚だオリヂナルなものであります。インデペンデントなものであります。あれをもう少し遣つて居つたならば負けたかも知れない。宜い時に切り上げた。その代り澤山金は取れなかつた。けれども兎に角軍人がインデペンデントであると云ふことはあれで證據立てられてゐる。西洋に對して日本が藝術に於てもインデペンデントであると云ふ事ももう證據立てられて可い時である。日本は動もすれば恐露病に罹つたり、支那のやうな國までも恐れて居るけれども、私は輕蔑して居る。そんなに恐しいものではないと思つて居る。是はあなた方を獎勵する爲に斯う云ふことを言つて居るのである。夫からまた日本人は雜誌などに出る一寸した作物を見て、西洋のものと殆ど比較にならぬと云ふが、夫は嘘です。私の書いた小説なども雜誌に出ますが、夫を云ふのぢやない。間違へられては困る。夫以外のもので、文壇の偉い人の書いたものは大抵偉いのです。決して悪いものぢやありません。西洋のものに比べてちつとも驚くに足らぬ。唯豎に讀むと横に讀むだけの違ひである。横に讀むと大變巧いやうに見えると思ふのは誤解であります。自分で夫程のオリヂナリティーを持つて居ながら、自分のオリヂナリティーを知らずに、飽までもどうも西洋は偉い／＼と言はなくても、もう少しインデペンデントになつて、西洋をやつつけるまでには行かない迄も、少しはイミテーションをさうしないやうにしたい。藝術上ばかりではない。私は文藝に關係が深いから兎角文藝の方から例を引くが、其他に於ても決して追つ着かないものはない。金の問題では追つ着かないか知らぬが、頭の問題ではそんなものではないと思つて居る。あなた方も大學を御遣りになつて、さうして益インデペンデントに御遣りになつて、新しい方の、本當の新しい人にならなければ不可ない。蒸返しの新しいものではない。さう云ふものではない。

要するに何方の方が大切であらうかと云ふと、兩方が大切である、何方も大切である。人間には裏と表

がある。私は私を茲に現はして居ると同時に人間を現はして居る。夫が人間である。兩面を持つて居なければ私は人間とは云はれないと思ふ。唯何方が今重いかと云ふと、人と一緒になつて人の後に喰つ付いて行く人よりも、自分から何かしたい、かう云ふ方が今の日本の状況から言へば大切であらうと思ふのであります。

文展を見てもどうも其方の方が缺乏して居るやうに見えるので、特にさう云ふ點に重きを置いて、御表考の爲に申し上げたやうな次第であります。(連記による)



## 無 題

—大正三年一月十七日東京高等工業學校に於て—

四〇〇

私は此學校は初めてで——エー来るのは初めてだけれども、御依頼を受けたのは決して初めてではありません。二三年前、田中さんから頼まれたのです。その頃頼みに来て下さった方はもう御卒業なさつたでせう。それ以來十数回の御依頼を受けましたが、みんな御断りしました。断るのが面白いからではなく、已むを得ないからで、此已むを得ない事が度重なつて御氣の毒なので、その結果今日やつて来ました。言は、根くらべて根がつき出て来たやうなしまつてあります。だから面白い御話も出来兼ねます。今からとにかく一時間ばかり御話します。それ故、題なんかありません。

私は専門があなた方とは全然違つてゐます。こんな機會でなければ顔を合はすことはありませんが、是でも私は工業の部門に屬する専門家にならうとした事がありました。私は建築家にならうと思つたのです。何故つて云ふ様な問題ではない。けれども序だから話します。

まだ子供のとき、財産がなかつたので、一人で食はなければならぬと云ふ事は知つてゐました。忙がしくなく時間づくめでなくて飯が食へると云ふ事について非常に考へました。然し立派な技術を持つてさへるれば、變人でも頑固でも人が頼むだらうと思ひました。佐々木東洋と云ふ醫者があります。此醫者が大へんな變人で、患者をまるで玩具か人形の様に扱かふ、愛嬌のない人です。夫ではやらないかと云へば不思議な程はやつて、門前市をなす有様です。あんな無愛想な人があれ丈はやるのは矢張り技術があるからだと思ひました。夫だから建築家になつたら、私も門前市をなすだらうと思ひました。丁度夫は高等學校時分の事で、親友に米山保三郎と云ふ人があつて、此人は天折しましたが、此人が私に説諭しました。

セント・ボールズの様な家は我國にははやらない。下らない家を建てるより文學者になれと云ひました。當人が文學者になれと云つたのはよほどの自信があつたからでせう。私は夫で建築家になる事をふつたり思ひ止まりました。私の考は金をとつて、門前市をなして、頑固で、變人で、と云ふのでしたけれども、米山は私よりは大變えらい様な氣がした。二人くらべると私が如何にも小ほけな様に思はれたので、今迄の考を止めてしまつたのです。そして文學者になりました。その結果は——分りません。恐らく死ぬまで分らないでせう。夫で私とあなた方とは専門が違ふ事になつたのですが、此會は文藝の會で、ベルグソンなども出る様ですから、多少は共通してゐる處もある様にも思はれます。夫でまあ私も御話をするといふ様な譯であります。よく講演なんて云ふと西洋人の名前なんか出て来てき、にくい人もある様ですが、私の今日の御話には片假名の名前なんか一つもでてきません。

私がかつて或所で頼まれて講演した時、日本現代の開化と云ふ題で話しました。今日は題はない。分らなかつたから、こしらへませんでした。

その講演のとき開化の definition を定めました。開化とは人間の energy の發現の徑路で、この活力が二つの異つた方向に延びて行つて入り亂れて出来たので、その一つは活力節約の行動と云つて energy を節約せんとする吾人の努力、他の一つは活力を消耗せんとする趣向、即ち consumption of energy である。此二つが開化を構成する大なる factors で、これ以外には何も無い。故に此二つのものは開化の factors として sufficient and necessary である。

それで第一の活力を節約せんとする努力は種々の方向へ出るが、先づ距離をつめる、時間を節約する。手でやれば一時間かゝる事も、機械で三十分でやつてしまふ。或は手でやれば一時間かかつて一つ出来る所を、十も二十もつくる。さうして吾々の生活の便を計るのです。之があなた方の専門のものでありま

四〇一



す。他の factor 即ち consumption of energy の努力は積極的のもので、或種の人達からは国力等の立場より見做して消極的なものと誤解されて居る、文學、美術、音樂、演劇等は此方面に屬します。是等のものはなくてはすむものであります、しかもありたいものなのです。是等は、幾分か片方で切りつめて餘つた energy を此方の方に向ける、どちらかと云へば押しつぶすといふ方なのです。私等は此方面へ向つて行く。此方面から云へば時間距離なんて云ふ考はありません。飛行機——飛行機の様な早いものの必要もなく、堅牢なものも必要もなく、數でこなす必要もない。生涯にたつた一つだつていゝものを書けばいいのです。即ち私共とあなた方とはかく反對になつてゐるのです。——二つのものの性質を概括して云ふと、あなた方の方は規律で行き、私共の方は不規律で行く。その代り報酬は極悪い。金持になる人、なりたい人は、規律に服従せねばならない。あなた方の方は mechanical science の應用で、私共の方は mental なのだから割がい、様だが、實は大變に損をしてゐるのです。然しあなた方は自由が少いが、私共は自由と云ふものがなければ出来ない仕事であります。猶云ひかへれば、あなた方は仕事に服従して我と云ふものをなすべきなければ出来ないのです。各自個々勝手な方面へ行つたなら、仕事はできない。私共の方は我を發揮しなければ、何も出来ません。

そこで、あなた方の方でする仕事と云ふものを見ると、普遍的即ち universal の性質を持つてゐる。私共の方は universal でなくて personal の性質を持つてゐます。尙敷衍して云へば、あなた方はまづ公式を頭の中に入れて、その application が必要である。それは人間が考へたものに違ひないけれども、私が此ものがいやだと云つても御免蒙ることはできない。universal と云ふことは personality と云ふ個人としての人格ぢやなく、personality を eliminate し得る仕事なのです。此鐵道は誰が敷設したと云ふ事は素人にはあまり参考になりません。此講堂は誰が作つたつて問題にならない。あすこにぶらさが

つてるランプだか、電氣だか何だか知らないが、是には何の personality もない。即ち自然の法則を apply した丈なのであります。

然らば吾々の文藝は法則を全然無視して居るか云ふと、さうでもない。ベルグソンの哲學には一種の法則みないものがある。フランスではベルグソンを立場として、フランスの文藝が近頃出て來てゐる。然し吾々の方では sex の問題とか naturalism とか世間に知れ互つた法則等から出立するものは、その abstraction の輪廓を畫いてその中につめこんだのでは、生きて來ない。内から發生した事にならない。拵へものになる。即ち吾々の方面では、abstraction からは出立されないので。然らば文學者の作つたものから一つの法則を reduce することはできないかと云ふと、夫はできる。然し夫は作者が自然天然に書いたものを、他の人が見てそれに philosophical の解釋を與へたときに、その作物の中からつかみ出されるもので、初めから法則をつかまへて夫から肉をつけると云ふのではありません。吾々の方でも時には法則が必要です。何故に必要であるかと云へば、之がために作物の depth が出てくるからである。あなた方の法則は universal のものであるが、吾々の方では personal なものの奥に law があるのです。と云ふのは既に出來た作物を読む人々の頭の間をつなぐ共通のあるものがあつた時、そこに abstract の law が存在してゐるといふ證據になるのです。personal のものが、universal ではなくても、百人なり二百人なりの讀者を得たとき、その讀者の頭をつなぐ共通なものが、なくてはならぬ。これが即ち一つの law である。

文藝は law によつて govern されてはいけない。personal である。free である。然らばまるで無茶なものかと云ふと、決して左様ではないと云ふのであります。

斯様にあなた方の出發點と吾々文藝家の出發點とは違つて居る。



そのものの性質より云へば、吾々の方のものは *Personal* のもので、作物を見て作った人に思ひ及ぶ。電車の軌道は誰が敷いたかと考へる必要はないが、藝術家のものでは、誰が作ったと云ふことがちき問題になる。従つて製作品に對する情緒が是にうつつて行つて、作物に對する好悪の念が作家にうつつて行く。尙ひろがつて作家自身の好悪となり、結局道德的問題となる。それ故當然作物からのみ得られべき感情が作家に及ぼして、仕舞には *Justice* と云ふ事がなくなつて、最負と云ふものが出来る。藝人には此最負が特に甚だしい。相撲なんかそれです。私の友人に相撲のすきな人があるが、此人は勝つた方がすきだと申します。此人なんか正義の人で、公平で、決して最負ではない。最負になるとこんな事が出来ない。かく藝を離れて當人になつてくるのは角力か役者に多い。作物になると左程でもない様にも見える。

これ程までに藝術とか文藝とか云ふものは *Personal* である。 *Personal* であるから自己に重きを置く。自己がなくなつたら *Personal* でなくなるのはあたり前であるが、其自己がなくなれば藝術は駄目である。あなたがいらぬ程あつても、その人間は機械の一部分の様なものである。 *Mechanical* に働く、機械よりも巧妙に働く、腕が必要である。が、吾々の方は人間であると云ふ事が大切な事で、社會上より云ふときは御互に社會の一員であるけれ共、吾々の方は貴方がたに比べて人間と云ふ事が大事になる。

所がこゝに腕の人でもなく頭の人でもない一種の人がある。資本家と云ふものが夫である。この *Capitalist* になると、腕も人間も大切でなく、唯金が大切なのである。 *Capitalist* から金をとり上げればゼロである。何にも出来ない。同様にあなた方から腕をとり上げて駄目である。吾々は腕も金もとり上げられてもいゝが、人間をとり上げられてはそれこそ大變である。

あなた方の方では技術と自然との間に何等の矛盾もない。然し私共の方には矛盾がある。即ちごまかし

がきくのです。悲しくもないのに泣いたり、嬉しくもないのに笑つたり、腹も立たないのに怒つたり、こんな講壇の上などに立つてあなた方から偉く見られようとしてたりするので——是は或程度まで成功します。是は一種の *Art* である。 *Art* と人間の間に距離を生じて矛盾を生じやすい。あなた方にも人格がない *Art* を弄してゐる事がたくさんある。即ちねむいのに、睡くない様なふりをするなどは其一例です。かく *Art* は恐ろしい。吾々にとつては *Art* は二の次で、人格が第一なのです。孔子様でなければ人格がない、なんて云ふのぢやない。人格と云つたつてえらいと云ふ事でもなければ、偉くないと云ふ事でもない。個人思想なり觀念なりを中心として考へると云ふことである。

一口に云へば、文藝家の仕事の本體即ち *essence* は人間であつて、他のものは附屬品裝飾品である。此見地より世の中を見わたせば面白いものです。かう云ふのは私一人かも知れませんが、世の中は自己を中心としなければいけない。尤も私は親が生んだので、親はまたその親が生んだのですから、私は唯一人でほつりと木の股から生れた譯ではない。其處でかう云ふ問題が出て来る。人間は自分を通じて先祖を後世に傳へる方便として生きてゐるのか、又は自分其者を後世に傳へるために生きてゐるのか。是はどつちでもいゝ事ですけども、とり様では二様にとれる。親が死んだからその代理に生きてゐるともとれるし、左様でなくて己は自分が生きてゐるんで、親は此己を生むための方便だ、自分が消えたと氣の毒だから、子に傳へてやる、と云ふ事に考へても差支ない。此論法から云ふと、藝術家が昔の藝術を後世に傳へるために生きてゐると云ふのも、不見識ではあるが、矢つ張必要でせう。ことに舊芝居や御能なんかはい例です。繪畫にもそれがある。私は狩野元信のために生きてゐるので、決して私のためには生きてゐるのではないと看板をかける人もたくさんある。かういふのは身を殺して仁をなすといふものでせう。然し *personality* の論法で行くと、之は問題にならない。こんな人はとりのけて、ほんとに自覺したらどうだ



らう。即ち *personality* から出立しようとする、狩野の爲に生きるのをよして自分の爲に生きようとする事にしたらどうだらう。世の中には全く同じ事は決して再び起らない。*science* ではどうか知らないけれども、精神界では全く同じものが二つは來ない。故に幾ら舊様を守らうとしても、全然舊には復らない。尙他の一つは舊にかへるのではなく新しい *departure* をする。是等によつて *essential* な *personality* を發揮する事ができる。

導體的の文藝家美術家も、必要かも知れないが、人間の本分として、凡ての人は自覺しなければならぬ。此所が大切な所で充分に説明しなければいけないですが、今日は時間が無いから之で止めます。

私の云うた事は、あなた方と私共との職業の違ひから出立して、私共の方の事を精しく云つたのでありますけれども、同時に又あなた方の方にも或程度までは應用が利くかと思ひます。あなた方の職業の方面に於て幾分か参考になる事があります。然し個人としてなり職業としてなり、あなた方の御参考になれば、私は非常に嬉しいのであります。——それ丈です。(東京高等工業學校校友會雜誌所載の略記による)

談  
話



## 英國現今の劇況

西洋の芝居と云つても、此前に話をした事があつた英吉利の芝居のこととして、別に其時も調べて纏つた話でもなかつたのですけれども、只記憶した丈の事を話したのみなのでした。尤も誰でも知つてゐる事で、殊に近頃は外國へ芝居を調べに行つた人もあつて、その人達の見て來た事も、外の文藝の雜誌に出ますから、それを殊更私とその専門の雜誌に向つて、御話をするとはいふ程の價值もないと思ひますが、折角の御依頼でありましたから、御話を致しませう。

大體はこの間話をした通りであります。草稿もないし忘れて居ますから、すつかりとは行きませんけれども、そのあらましを云つて見ますと、この倫敦には芝居と名の附くものが五十ばかりあつて、その外にミウジツク・ホールといつて歌舞音曲の様なもの演る（日本で云ふ寄席のやうなもの）處が大小合はせて五百ばかりあります。それで其大きなものになると、例へばストランド街にあるカゼント・ガーデン座が三千五百人位入りますが、最下等のホワイトチャペルと云ふ處にある極安の芝居になると、四千人程入ります。けれども平均して普通五六百人といふ處でせう。だからして五百人平均とすると、毎夜この興行物を見て暮す人は、二十七萬五千人になります。夫でこれ丈の澤山な人が行きますが、その内で重なる座をいふと、今いつたカゼント・ガーデン座ですが、これは純然たる芝居と云ふよりも、寧ろオペラやファンシー・ボールなどを演る處です。それからストランド街の東の方でテームス河に架かつて居る、ウオ！タールー橋の畔にあるドルレー・レーン座が大きなもので、これは由緒のある芝居でして、昔の有名なガリツクだとかキインだとか、或はケンプル或はシドンス夫人などが出勤した處なのでして、此座の特



長はクリスマスマスの時分に、バントマイムを演るので有名なのです。其次は其傍に現今英吉利の團十郎たるアーピングが出勤する、ライシーム座と云ふのが有るのです。それから其邊には澤山有名な座もありますが、その名前ばかり挙げては詰らないから略しませう。そこで中央道路たるオクスフォード街から、所謂流行の根源地（流行と云ふ事が日本の重に花柳社會から來るのとは違つて、英吉利では上等社會から流行り出すのです）たるウエスト・エンド一帯の方へ行きますと、一番に目に立つのがヒズ・マゼステイ座でして、こゝは先達てまで女皇の御在世の時は、ハー・マゼステイ座と云ひましたが、崩御の後はヒズ・マゼステイ座と改稱してトリリーといふ役者が出る處です。『新小説』か何かにトルストイの劇を演つたといふ、抱月さんの通信のあつた劇場です。その向側にそんなに大きくはないけれども、ヘーマーケット座といふのが有ります。又二三町隔てて西南の方のセント・ゼームス街に街の名を附けた、セント・ゼームス座といふのがあつて、そこはアレキサンダーと云ふ役者の出る處で、ステーション・フヒリプスの劇詩、バオロ・エンド・フランチェスカを演つたのが即ち此座なのです。その他この界限ストランド街邊には、同じ様なものが澤山有ります。それから此ウエスト・エンドには所謂ヴァラエテイと稱して、純粹の劇場ではないけれども、曲馬、手品或は道化芝居といふものを混せて興行して居る有名な、パラスとかエンバヤーとかいふものが四五軒ありまして、これは皆大劇場と匹敵する位な、寧ろそれより内部の構造などは立派な建築なのです。その他單に芝居と號して居るものは、先に御話をした通りの數で一々擧げる事は出來ないが、その純粹の芝居を演る處は少いので、或處では道化芝居や茶番見たいなものを演つたり、或は音樂入の狂言見たいなものを演つたり、所謂高尚の意味に於ての劇を演る處は寧ろ少いのです。

それから其劇場には、この座長といふものがあつて、これをマチジング・デレクターと稱して、それは同時に芝居の持主或は借主を兼ねて居て、しかも役者の内の大頭がやつて居るのです。例へば先刻御話を

したヒズ・マゼステイ座の座長及び持主はトリリーで、セント・ゼームス座の座長及び借主はアレキサンダーといふ風になつて居ります。尤も小さい芝居とかイースト・エンドの方の場末の芝居になると、そんなものはない様ですが、場末の芝居などにはない譯で、つまり極つた役者が出ないからです。然し代るゝ、何々一座といふのが廻つて來るのでして、これはまあ田舎も同じ様に廻つて來ては興行するのです。それからウエスト・エンドなどで大きなものが當たると、その興行を打ち上げて、時には廻つて來る事もありますけれども、多くの場合には當たつた芝居を、他の一座が傳授を受けて方々持つて歩くので、謂はゞ當り狂言の忠臣藏といふ様なものを、この場末へ來て演るのです。さういふ譯だから大きな役者の座長とかいふものは、かういふ座には附いては居ないので。その他は今のマチジング・デレクターの外にジェラルド・マチジャーと稱して、一般の事務を支配する事務長といふやうな者があり、それから舞臺の事を管理するステージ・マチジャーといふ者があり、又その座の音樂を監督するミウジカル・デレクターといふ者があります。夫で今度はどういふ芝居をやるとか、役をどう付けるとかいふのは座長がやるので、又道具立をどうしようとか光線の具合をどうとか心配をするのはステージ・マチジャーがやるので、音樂や何かはミウジカル・デレクターがやり、一般の客の待遇とか、合間々々に客が出て飲食等をする注意をしたり、その他の雜務、例へば芝居に就いての手紙の交渉等はジェラルド・マチジャーがやるのでして、皆さういふ風な機關で出來て居るのです。

それから劇場の中の見物する席に就いて御話をしますと、席料の一番高價いのはブライエート・ボックスといつて、これは五十圓から十圓位で一間買ひ切つて、その中へ勝手に幾人でも入るので、其値段に高下のあるのは、一番低い處が高價いので、段々になつて二階三階となるほど廉價くなるのです。このボックスは數に限りがあつて澤山はないので、其處は舞臺を臨んでその兩側に、舞臺を斜に見る様に一側づゝ



段々と三階位のものが付いて居る丈なのです。是が高價い處であるけれども、見るには横からですから、見好い事はなからうと思ひます。その次はストールといつて、これは日本の土間で、最正面から舞臺を見る處ですが、見るのには一番好い場所ですから、従つて價も高く、大概大きな芝居ですと、一人席五圓二十五錢位です。このストールの後に少し高くなつて矢張舞臺を正面から見安い席があります。これをピットといつて、そのピットの一番初めの側はストールの一番後の席と付いて居るから極上等で、然も値段は安く一圓二十五錢位です。然し場末の芝居へ行くと、このストールも従つて大變に安くなつて二圓位の處もあります。其次のはぐるりと廻廊の様になつて居る二階で、これは座によつて名が違ひ、或はバルコニーとも云ひ、或は他の座へ行くとドレス・サークルともいつて、一人席三圓七十五錢位です。其次になると、又其上に三階が廻つてあつて、これも處によつて名が違ひますが、まあアツバー・サークルといつて居りまして、これも一人席二圓五十錢位です。又その頂上をガレリーといつて、こゝが日本の追込、即ち一番最下等の處で、一人前二十五錢位です。尤も大きな座になると、このガレリーの下にまだもう一つ廻廊の様なものが付いて居ります。

そこで席にはリザーヴ・シートと、アンリザーヴ・シートの區別があつて、前のリザーヴ・シートといふ方は一人が一つの席を占める様に出来て居て、その席は緩りとしたもので、腕をかけるやうな處が腰掛の兩方に付いて居て、それが海老茶色の天鵞絨で張り詰めてあり、さうして出入には腰掛が自由になるやうになつて居て、坐る時には疊んであるのを下ろし、出る時には元の様に疊むので、これをチップ・アップ・シートといつて見事なものです。大抵今の海老茶色で出来て居て、下の踏む處も同様です。それには皆番號が振つてあつて、一側目の第何番目とか、二側目の第何番目とか云つて、それで其切符を買つて了ふと、外の人はとても其席へ坐る事は出来ないで、遅く行つても早く行つても勝手です。夫を買

ふには、芝居の入口にボックス・オフイスといふ切符賣捌所があつて、そこで買ふか、又はその芝居まで行かなくとも諸向に代理店のやうなものがあつて、そこから買ふ事が出来るけれども、最流行る芝居になると、今夜行つて見たいからといつて、切符賣捌所へ行つても、中々席が手に入らない。だから大抵二三日前、若しくは一週間前にどの何番といふ札を買つて置いて出掛けるのですが、又その流行る芝居ですと、明日の何席が明いて居るとか、三日目の何席の何番、四日目の何席の何番といふ様な具合にして買ふのです。そこでアンリザーヴ・シートといふのは前のと違つて、一人に就いて一席を設けてないのでして、ピット或はガレリーがさうなのです。そこへ入るには幾ら金があつても、幾ら前から誂へても、席の取つてある氣遣はないのだから、早く行つて順番に早く入る方が好い處へ行けるといふ譯です。それで皆入口が違つて居る。土間へ行く人は正面から入りますが、ピットへ行きたいものはピットの入口で待ち、ガレリーへ行きたいものはガレリーの入口で待つて居て、その入口で金を拂ふのですが、入口は興行前大抵三十分を開くのです。だから我勝に待つて居て入るのですけれども、餘程規律の正しいもので、順番に二列になつて後から来た者は、跡からくゞと後へ蹤いて待つて居るので、かういふ様に開場刻限の少し前になると、待つて居る人が、ピットの入口でも、ガレリーの入口でも、長い行列になつて居るので、時によると一町も一町半も續いて、横町を曲つてはみ出して居る事もあるのです。夫でさういふ見物人は熱心であるから、前へ出て好い席を取らうと思つて、非常に早く行つて待つて居るので、大抵夜の八時か八時半に始まるのに、晝飯を食べると詰め掛けて居る者もあります。是に就いて面白い話があるのは、餘り熱心に客が詰め掛けるものだから、座主が時によると早く来た者に、御茶を出したといふ事があつて、大抵英吉利ではアフタヌン・チーといつて、四時か四時半には紅茶を飲むもので、日本の茶うけの様にやりますから、此時刻が來ると客へ出すやうにして茶を饗應したといふ事です。夫にまだ似寄つた面白い話と



いふのは、此間ゲイエター座といふ芝居が改築になつて、初めて興行した時に、一番初めにこの夜興行を見るので詰め掛けた人は、朝の六時半頃でした。夫から段々にほつり／＼と集つて来たのですが、何しろ夜の芝居を朝から寄つて来たのだから、仕舞には餘り退屈になつて代理人を雇つて自分の番をさせたものがあつたので、その代理人になつたのは、メセンジャ・ボーイといつて、一定の服装で一才使ひをする子供があるので、その子供を雇つて来て、自分の代りに置いた人が大分あつたのです。そこが人情といふものは妙なものでして、そんな子供を雇つて錢を拂ふ位なら、ちやんとリザーヴ・シートの處へ行けば、その錢で待ち遠い思をしなくとも、追込でない處へ入れるのだが、そんな事をやつた人が大分あつたといふ事でした。だから前に云つた通り此アンリザーヴ・シートの處へ入るには随分苦しい思ひを仕なければならぬし、又行列に入つて待つて居まいと思ふと、人の後になつて立つて居らなければならぬので、それに此ガレリーは芝居の一番高い天井に近い處であるから、其處から舞臺を見下ろすと、大きな芝居になると、丁度山の上から谷底を見るやうな、或は噴火口から中を覗くやうな心持で、只遙か下の方で美しいものが動いて居るやうに見えるのです。然し私の思ふのには、芝居といふものの見方にも依りますけれども、只美しいものを見るといふなら、芝居の筋とか白とか役者の技藝を別にして、只美しいものの活動をして居る處を見るといふなら、其ガレリーが一番好いと思ひます。なぜなれば丁度夢に龍宮へ行つた様な心持がするから、それだけで満足すべき美感があると思ふのです。

それで序に見物人の事を云ひますが、それは大變靜肅でして、今の追込などに入る連中としても決して騒がしい事はなく、殊に人の席を奪ふなどといふ事は決してないので、たとひその人が一時出て、歸つて来るとその跡に入つた人は直に退いてやるといふ風です。それから此席の前にオペラ・グラスといふものが附いて居て、それへ錢を入れると蓋が開いて、中から眼鏡が出るやうになつて居て、それで舞臺を見

るのであるから、見たい人は勝手に錢を入れて見るのだが、見た眼鏡を正直に跡へ入れない者はないと見えて、未だにその法が行はれて居ります。丁度日本で云ふと、今日ではあるまいが、その以前瀬戸物町の伊勢本といふ講釋の晝席で菓子箱の中に出て居て、勝手に食べて錢を入れたもので、それを只食つて仕舞ふといふ人もなかつたやうであつたが、それと今いふ眼鏡を見て持つて行つて仕舞はないのと同じ様な事です。それから上等な見物人になると、皆燕尾服を着し、又女は肩を出した禮服を着て行きますが、矢張非常に嚴重に靜肅で、寺の中が靜肅であります程でもないが、日本人のとは違つて極く眞面目であつて、聲を出すと云ふ事はなく、只手を拍つきりです。それで其合間々々には席を外して、酒とか珈琲を飲むリフレッシュメント・バースといふ場處へ行つて、又元の席へ来て見物するといふ譯です。興行は今いつた通り八時位から十一時頃まで、晝間あるのは水曜と土曜でして、二時位から五時頃まで、此晝の興行をマチネと云つて、遠くに居る人などは、それを見に行くのに遅くならないから便利です。そこで場末のイースト・エンドの方の芝居へ行くと見物人が喧しくつて、下品で、客種が大變に落ち、ワイ／＼いつて肝腎の泣く處を笑つて居て、禮服なぞ着て居るものは殆ど皆無で、着て居ると却つて一つ笑になる位なのです。この場所はイースト・セントラルといつて、銀行とか商會とかいふ、晝は勤め人が居て、夜は淋しくなるといふ處の後の方にある、風の悪い人間が住んで居る地ですから、つまり身分の良い人はこゝへは出入をしないのです。

それから次に舞臺の話を少しやりませうが、元來西洋の舞臺といふものは、今は非常に立派になつて居りますが、昔は詰らないもので有つたので、歴史は委しく云はないけれど、英吉利ではエリサベス朝の芝居が、最盛な時代であつたが、その舞臺は極詰らないものでして、藁の様なものを敷いたのです。又此時分には道具立といふものも殆ど無く、パリスとかミランとかいつて札に書いて出して、此處は何の場、此處



は何處だと極めたもので、見物は其處と思つて見て居たものです。それから幕は其時分からありましたが、何しろ鹿末なものであつたのです。そこで英吉利の舞臺で一寸目覺しい改良をしたといふのは、十八世紀の終にド・ルーサブルグといつて確か獨逸生れの人と思ひましたが、その人が大改良をしたので、例へば書割に光線を映す事とか、月を見せたり星を見せたりする事とか、それから銀の屑を使つたり、紗或は金屬の青い板で水を見せたりする事を發明しました。これが有名なものでして、この人が英吉利へ來て、先刻御話をしたガリックといふ役者の爲に、ドルレー・レーン座の道具立をやつたので、それはガリックが先生が自分で書いたものなのでした。その時に青い木が段々と焦茶色になる處を出し、月が段々と登つて來て雲の側を通る處などをやつたのでして、これを見て當時の看客は非常に驚いたのです。それが單に普通の看客のみならず、英吉利の第一流の畫家とも云はれて居るレノルヅですら、非常に嘆賞したといふ位で、確かにこのド・ルーサブルグといふ男の道具立は、この舞臺の道具立の歴史に於て、一時期を形作つて居るものです。その後段々發達して、それで現今の俗にステージ・リフォームといつて、舞臺改革といふ言葉が出來て來たので、それは何時頃からかといふと千八百八十年頃から興つたので、かのギエンナの劇場が焼けてから以後の事であるのです。その所謂舞臺改革の重なる點といふのは、一方では道具立を何でも自然を出來る丈眞似て、實物其物を舞臺の上へ出さうといふ趣意でそれが一つ、もう一つは現今の科學、器械學又は水力學を舞臺に應用するといふ事なのです。で、英吉利にあつて最近にこれを實行したのが、千九百二年にカゼント・ガーデン座でやつたその時に、サークスといふ建築家が意匠を凝らしてやつたのです。その他英吉利では斯ういふ事に關して、役者ではアーギング又はトリーなどが、大分熱心に改革を企てた方で、畫家ではハーコマーやアルマタデマなどが、皆舞臺の改革に盡力したのです。それで今の舞臺は昔と違つて、舞臺を五六の區劃に分ち、これを電氣の力で以て動かし、書割は上から吊して然

も鍾仕掛おんりに出來て居るから、一人位の力で大きな道具の上げ下げが簡易に出來るので、それから電氣を用ゐて四つの色を出さうといふ譯です。それに又昔は舞臺が傾斜になつて居たのが、現今のは平たくなつて居るので、舞臺には木で出來たものと、木と鐵で出來たものと、鐵製のものとか、かういふ風に別があるもので、木で出來たものは、人の力で運轉をし、木と鐵のも同じくであるが、鐵で出來たものは、人の力も無論の話であるけれども、これは水力及び電氣の力でやるのです。まだ其外に舞臺に關しては近頃種々やつて、米國ではセリ出しの舞臺を作つたのがあり、又獨逸では日本の廻舞臺の様なものをつたのが有りませんが、長く續くかどうか分らないのです。それに舞臺上の光線は下からと横からと上からと三通りに取る事が出來て、下からが俗にフット・ライトといつて、舞臺の前にあつて下から役者の顔を照らし上げるので、上からがバトンといふもので取り、横からがウイング・ラダーといふものから取ると云ふ由ですけれど、その器械や構造の精しい事は知りません。

それから西洋で近頃は一つの立派な芝居をするといふと、重に一人好い畫家を雇ふか相談するかで、その人が色々と道具の書割や何か工夫するのでして、アーギングがコリオレーナスを演つた時にはアルマタデマの意匠を藉り、それからキング・アーサーを演つた時にはバーンデョーンスの助けを藉りたので、是等は皆第一流の畫家であるのです。それで舞臺の畫を描く事に關しては、英吉利は今では歐羅巴で殆ど一流の地位を占めて居て、他の國には劣らないのです。倫敦でかういふ芝居を演るといつて、他の國へ行く時は其道具立まで持つて行くのですから、道具立も芝居の一部分として重くなつて居るのです。

それから今度は英吉利で演る芝居に就いて御話をしますと、その演る事は甚だ振はない方で、どうかと云ふと下火なのです。そこで實に愚にも附かない芝居を演つて居るが、然も大入であつて場末へまで持つて行つて演るといふ位に盛んなのです。或人例へばクレイギー夫人といふ有名な女流文學者の如きは、か



ういふ非難を云つて居るのでして、「どうも英吉利の役者といふものは、自然といふ事を舞臺に演じる事を努めないし、出来ない様になつて居る。それは一つの型が出来て了つて居て、その型に適らないものは不可ない様になつて居るから、自分では面白くないと思つても、是非それを演らなければならぬと云ふ様になつて居て、妙な氣取つた事などを演るから、慣れない人が是を見ると、極く厭味があつて可笑しいので、どうしても夫を止めなければ、劇は發達しないだらう」とかういつた様な譯です。それで現代の芝居が教育ある人の目から見ても重きを置かれて居らないといふのは、一般の事實であつて、或人は交際社會へ出て芝居の話をして見ない位であるが、その癖自分は芝居へ行くのです。何故その芝居の話をして見ないかといふと、まあ相手にもよりますが、何處へ行くと聞かれた時に、芝居へ行くといふと云へば、あんな下らない處へ行くかと相手がいふかも知れないといふ事を憚つて云はないのでせう。まづ云つて見ると、「貴方は何處へ」「芝居へ行きます」「芝居は何を見に行きますか」「何々を見に行きます」「それは誰が書いたもので」「あのピネロが書いたものです」「ピネロとは誰の事ですか」とこの様な談話は、最文學的な人にあつても珍らしい事ではなく、然もピネロといふのは現今英吉利の脚本家では、第一流の作者なのです。そこで又或人の説に據ると、英吉利には随分文才のある人もあるけれども、その人は脚本は書かない、何故書かないといふと、今云つた様な譯だからといふのです。それに大變面白い脚本を書いて座長の處へ持つて行くと、座長はそれを讀んで成程面白いと思つたつても、これを直ぐと劇場で演る譯には行かないと云ひ、それで此脚本は己のする役はあつても、己の女房の演る役がないとかういふ譯で戻すので、又これを他の座へ持つて行くと、今度は己の女房の演る役はあつても、己の演る役がないと、かういふ口實を付けるのです。さういふ譯だから、少し文才のある人でも脚本は書きたくないと、かういふ事になるかも知れないのです。現にこの間或人の書いたものを見たら、倫敦には二十五年前は凡そ芝居が二十五あつて、その内

二十といふものは本當の芝居を演つて居つたが、現今は芝居へ行く人は三倍にも四倍にもなつたに拘はらず、本當の芝居を演る處は七ツ位で濟むといふ譯であつて、その多くは道化芝居或は茶番といふものを演つて居るのです。で、其或人がこんな風ではいけないと云ふので、外國ではどんなに芝居を保護して居るか、其例を調べて見たら、どうしても保護をしなければ段々墮落して仕舞ふから、國立とか市立とかいふものを拵へなければ不可ない、それでないと遠からずして、芝居は一種の寄席見たいな物に下落して仕舞ふと云つて居ます。之を要するに今演つて居る新作脚本の大部分といふものは、重に社會的の寫實劇なのでして、然も滑稽に傾いたものが多いので、中には中々面白いものもあるやうだけれども、大いに流行つたり何かしたもので、行つて見ると極めて馬鹿氣なものも大分あるのです。だからかういふ風に芝居の前途を憂へる人が出るのも無理ではあるまいと思はれます。

そこで現代の芝居といふものは私の見た處では脚本が善いとか悪いとか云ふよりも、寧ろ道具立とか光線とか書割とかそんなものが主で、則ち附屬物が主となつて居るやうな傾きに見えるのです。尤も實際道具立その他のものは、實に想像にも及ばない位見事に出来て居るので、先づさういふものに費す金が十週間の興行として、十萬圓乃至十六萬圓位費して、あらゆる軌近の科學的智識を應用するから、立派に出来上がるし、又好くも見られる筈なのです。その最立派なもの一つとして毎年人が待ち設けて居るのが、最初一寸御話をした、ドルーレー・レーン座のバントマイムであつて、それは毎年暮に演るもので、そのバントマイムといふものは、何んなものかといふと、日本でいふ謂は、桃太郎の話といふのに、滑稽を混ぜて一つに繋ぎ合はせたものを芝居風にして、その時事の當て込みなどをチョツ／＼と入れて仕組んだものであるから、芝居として見ると實に詰らないものであります。まあ多少の滑稽があるといふだけの話です。だからこれは子供の慰みとしてクリスマス時分に興行するものになつて居るのですが、夫にも拘は



らず子供ばかりでなく大供が出掛けて行くのです。これは道具立が綺麗で大した金を掛けて立派なものを作るからで、それは、實に美麗を極めたもので、一つの道具立が下へ下がると、奥にちやんと立派な道具立が出来て居り、それが又下がると、又その奥に立派な道具立があるといふ風になつて居たり、又舞臺から噴水が出て、その噴水がしかも五色の色に變つて行つたり、舞臺の上に馬が出てドン／＼駈けて歩いたり、或は舞臺の上へ百人近くの女が十人位づゝ一組になつて、その一組が同じ着物で、互に離れたり合つたりして舞ひ、中には翅を生して飛んだりするので、その美は想像も及ばない程でして、毎年其美しい度が増して來るのです。先達て話をした時は、かういつた様な諧謔おどろだといつて讀んで見せましたが、今晩は夫だけ略します。で、そこにダン・リーノといふ道化師があつて、丁度日本でいふと落語家の圓遊といふ風な男でして、それを見に行くのと、道具立の綺麗なのを見に行くのです。然し要するに大抵の見物は道具立を見に行く事に歸着するので、煎じ詰めて見ると、目下の處英吉利の芝居は、無暗に道具立を（日本にはまだないが、道具立は舞臺を幾つにも割つて飾るのです）飾り立てる事計りに苦心して、肝腎の脚本は更に振はないと云ふ事になります。或人の説に據ると、型ばかり演つて居るから、さうなつて仕舞ふので、芝居其物の爲にいかんといふのです。然しこの型といつても、日本でいふ舊劇の型なぞといふものとは、その趣は違つて居るのでして、寫實そのものに對して云ふ型で、自然といふ事を舞臺で演じないで、妙に臭い舉動をするからなのです。

まあざつとこんなものでして、これで英國の劇況も略分るでせうと思ひますから、こゝらで御仕舞ひと致しませう。（明治三十七年七月、八月『歌舞伎』）

## 批評家の立場

小説の批評を見ると作者の爲に甚だ氣の毒な事がある。多くの批評家は評すべき個條を各方面から一々に擧げないで、局部々々をのみ論ずるやうな傾がある。

帝國文學で齋藤信策君が『新曲浦島』を評したのを見た。男らしい、しつかりした、秩序立つてゐる、立派な批評だ。けれどもあれで見ると、樂劇といふものはかういふものだ、例へば『沈鐘』だとか『タンホイゼル』だとかあゝいふ情緒を寫さなければならぬものだ、この風で行かなければならぬものだ、と、『沈鐘』なり『タンホイゼル』なりを標置して、この二作に標準を求めねばならぬらしい口吻である。かくては作者に不利益で、作者を誘掖することが少い。

元より樂劇には『沈鐘』『タンホイゼル』より外に面白いものがないとなれば、この二つを標準とするに不都合はない。けれどもあれより面白いものがあつて見ると、この標準は變なものになる。新たに拵へたものがある標準を立てて論ずるのは、兎角窄めるやうな感がある。『沈鐘』『タンホイゼル』を例に擧げて、参考にこんなものもあるといふのは差支ない。けれどもかうなくては面白くないといふ語勢が見えては、餘り窄め過ぎた遣り方だ。殊に坪内博士の主義と『沈鐘』『タンホイゼル』のとは其ブレインが違ふかも知れない。西洋の評家でも日本の評家でもこの弊をうけてゐるやうだ。

脚本は性格を寫さなければならぬものと定めて置くものだから、プロットから出た面白味を見て、性格が現はれない、この作はつまらないと云ふ。脚本必ずしも性格を寫さねばならぬといふ事を云ひ得るだらうか。それからまた性格の寫されざるものはドラマに非ずといふ事を云ひ得るだらうか。



ドラマは性格を寫すものだといふ事は、以前のものに向つても不可だし、これから又如何なる變り種が出ないとも云へない、櫻草にも色々なグライエテイがある。今までの櫻草を標準にして櫻草はこんなものに限るといつて居ると、其口の下から直ぐ變り種が出来る。

歴史を見ると、必ず標準を置いて是に合せないものは不可だと云つてゐるものに、長續きのした例がない。五十年位立つと其標準は自然に打破される。歴史が先づこの標準説を打破するのだ。

小説にしても、あらゆる小説を組織する要素を見て、其あらゆる方面から詳評しなければならん。作家は自分の特色を發揮しようし、批評家はあらゆる方面から評することにして、決して規則標準の如きものを與ふべきでない。

標準は自分でなくてはならん。自分を以て人の標準に合せしめようとするのは、自己の特色を没するものだ。

近頃西洋の名を得た人の作を標準にして無闇と西洋がるものがある。西洋の作にも甚だいかゞはしいのがある。餘り西洋崇拜をして自己と我國との特色を没するのは遺憾だ。

長谷川天溪といふ人がトルストイ翁の『アンナ・カレニナ』を何かを見て、長くて到底讀み切れないと云つて居たのを見た。餘り大作といふ名にかぶれないで、日本人のやうな洒脱な淡白なものを好むものは、忌憚なく、こつてりしたものは嫌ひだといつたらよからう。天溪君のやうな正直な發表が望ましい。

今時セキスピアを讀んで其作物を非難するものは、自己の馬鹿を世間に發表するやうなものだ。だから知ると知らざるとに關はらず、沙翁の作はうまいくと云つてゐる。そんなに何も阿諛せんでも正直な態度を保つたらよからう。

僕は軍人がえらいと思ふ。西洋の利器を西洋から貰つて来て、目的は露國と喧嘩でもしようといふのだ。

日本の特色を擴張するため、日本の特色を發揮するために、この利器を買つたのだ。文學者が西洋の文學を用ゐるのは、自己の特色を發揮する爲でなければならん。それが一見奴隸の觀があるのは不愉快だ。

人は壓迫せられた時自己の無能を思ふもので、明治維新の當時無闇と横文字が跳梁したので、一般に横文字は好いもの難有いものとなつたが、西洋ばかりが必ずしもえらいのではない。日本には日本固有の特色がある。其特色を發揮することが何よりえらいのだ。同時に自己の特色を發揮するのがえらいのだ。

高山林次郎君などの評は標準的のもので、自己の氣に入つたものは氣に入つた標準の下に論じ去つてゐるやうな嫌ひがある。作者を啓發する處は何物もない。

モルトンといふ人が沙翁の作をアナライズして科學的にやらうとしたのがあつたが、それは餘り機械的に流るゝ氣味があつた。然しそれでも幾分か僕の批評家に對する要求を満してゐる。

### 近作短評

風葉君の『深川女房』は如何にも深川女房らしい。牛込女房や麻布女房ぢやない。第一「深川」といふ名がいゝ。それに會話が自然だ。一二ヶ所變だなど心付いた處はあつたが。

『天うつ浪』のお柳お形などの會話は決して自然だとは云はんが、あの階級に丁度適した言葉つきだ。さうして其階級以外に涉らない處がうまい。

鏡花君の『銀短冊』は草雙紙時代の思想と明治時代の思想とを綴ぎはぎしたやうだ。夢幻ならば夢幻で面白い。明治の空氣を呼吸したものなら、また其空氣を寫したので面白い。唯綴ぎはぎものでは纏つた興趣が起らない。然し確かに天才だ。一句々々の妙はいふべからざるものがある。古沼の飽くまで鏝にふりたものだと見たものが、鯨の群で蠢動めいてゐるなどは餘程の奇想だ。若しこの人が解脱したなら、恐ら



く天下一品だらう。

『謎の女』は生田葵山といふ人の作だ。あゝいふ事を書いたのは新らしいと思ふ。或は翻譯ではあるまいか。(明治三十八年五月『新潮』)

## 戦後文界の趨勢

兎に角日本は今日に於ては連戦連捷——平和克復後に於ても千古空前の大戦勝國の名譽を荷ひ得る事は争ふべからずだ。こゝに於てか嘗に力の上の戦争に勝つたといふばかりでなく、日本國民の精神上にも大なる影響が生じ得るであらう。

今日までは——維新後西洋なるものを知つて以來、西洋との戦争はなかつたのである。然しそれは砲烟彈雨の間に力を角するの戦争はなかつたといふまでで、物質上精神上には平和の戦争は常に爲されつゝあつたのである。で、此平和の戦争のために獨立も維持される、文明は益盛んになるといふ有様であつた。これは西洋から輸入された文化の御蔭であつたが、然しこの御蔭を蒙る上から其報酬として、幾分か彼に侵蝕される傾きはあつたのである。これは諸事萬端がさうであつた。精神界の學問の事は無論として、禮儀、作法、食物、風俗の末に至るまで漸くこれに則るといふことになつた。つまり風俗人情の異つた西洋が主となつて來た。即ちこの平和の戦争には敗北した。

それでその結果が妙な所に來て、西洋には敵はない、何事も西洋を學ばねばならぬ、眞似なければならぬといふ觀念——これが年來、今日まで養成された事實かも知れぬ。否、事實以上の感じが起るのは明らかである。

それで物がかうなると、又これに對する反動が起る。國粹保存主義が一時勃興したのも、此趨勢に對する反動であつた。然しそれは一部の人が局部の弊を見て反抗したに過ぎなかつた。此國粹保存といふことは昔の日本の事を再び今日に繰り返さうといふ精神が基礎であつたと思ふ。然しそれは到底時代の大趨勢



には敵すべきものでない。

日本と西洋とは無論歴史からも建國の基礎からも違つてゐるが、東西交通の今日に於て昔のまゝをそのままに繰り返さうといふ國粹保存主義は事情が許さぬ。従つて此主義もやかましく言つただけの効力が無かつたのである。一時反抗した國粹保存主義も遂に時代の趨勢に壓せられてしまつた。これが一般の形勢であつた。

自體我日本は不幸にして、文學の方面に於ては、昔から外國に向つて誇り得る——誇るに足るべき文學はないと思ふ。或は比較的あるかも知れぬ。然し大きな顔をして世界の舞臺に濶歩し得るやうなもの、どうも見當たらぬ。それで文學以外に、例へば繪畫とか乃至は裝飾品では、十分に西洋人から其價値を認められて居るものがある。然し夫すらも一時は時代の趨勢に壓せられて、國民は悉くこれを棄てた。況んや前に傑作の無い文學は、無論自分から見縊つて、つまらぬ文學的國民として、文學を以て外國と角逐することは出来ぬと自認し、外國の書籍を見ても、日本人の夢想せざる點が開拓されて頗る發達して居るのに氣が付くと、其方が非常にえらく思はれて來て、模範は彼に在る、手本は外國に採らねばならぬといふ風潮が深く浸み込んだのである。

尤もかゝる風潮は、これは自分を知り亦他を知るといふ點に於て、最公平な觀察で、決して悪くはない。けれども其弊をいふと、つまり一も二もなく西洋を崇拜するといふことになつて、標準がなくなつて來て、唯彼を真似る、彼を崇拜するといふに止まる。加之、其極端に至つては、自分が讀んで面白いものでなくつても、これを無理に面白がらなければならぬやうに、或は世間の手前御世辭に褒めちぎらねばならぬやうに感ずる。嘗に感ずるばかりでなく、これを敢てするに至るのである。西洋の批評家が云ふことは何所まで正しいか、日本人の立場としては何所まで信ずるかといふことを吟味もせず、唯これを傳へる

に過ぎなかつた。

成程日本には文學としては西洋に向つて誇るに足るものなく、彼は頗る發達して居たかも知れない。然し日本と西洋とは凡ての點に於て異つて同じでない。敢て故意に日本を區別するのではなく、事實異つて居る。その異なる國民であれば、一種の文明、一種の歴史といふやうに、日本としての特性を有つて今の世の中に生存して居るので、よしんばどの位西洋に感服しても、これを國民に紹介するに當つては、日本人としての特性を忘れてはならぬ。これを判斷するのその通り、日本人としての特性を離れてはならぬ。

凡て物を判斷するの標準は世と時とを問はず現在が標準である。自己が標準となるのである。千古に貫く標準とか、或は東西を通じた標準もあらう。然し茲にはそれはさて置いて、つまりこれらの有無に拘はらず、標準は自分自身で定めねばならぬ。昔から今日に至るまでの歴史の中から自ら得來つた趣味と、西洋の文化から自ら得來つた趣味とが標準となるので、これが吾人の標準である。これが自分の標準となるのである。然るにそれを棄てて單に西洋の批評家が言つた事をそのまま、に解釋しなければならぬ、さう解釋したくはないが、西洋人が言つたことであるからなどといふのは、西洋に心酔したもので、隨分馬鹿氣た話である。縱令西洋の標準がよい、それがよろしいとしても、吾人はこれを自分の經驗に訴へねばならぬ。また自分で經驗して貰はねばならぬ。さてこの上で吾人の得た標準から判斷するのを正當とするのである。文學上の判斷としても決してこれ以外に互るべきものではあるまい。

チースは西洋人が喜んで食べるから、日本人たる吾々は嫌ではあるが食べねばならぬといふのはつまりぬ話で、嫌な人が食べぬといふのは正當である。西洋人が好きであるから好かねばならぬといふのは不道理で、況んや嫌でありながら好きですと吹聴するのは苦しい話である。馬鹿々々しいことだといはなければならぬ。



それで凡ての發達は如何しても人間に氣力——精神がなければ出来ぬ。精神といふのは自分だけでは出来ぬ。この自覺自信の無い國民は、國民として起つことは出来ぬ。個人としても墮落したもので、自ら立つといふことは出来ない。漸く人眞似をするより仕方がない。これを移して文學の方面でいへば、その製作にも特性を具へたものは出来ないものである。然し今日の場合は大勢は是の如くである。自覺自信が無い——無いのではない衰へて居る。同じ事を言つても、西洋人の言つた事であれば肯づかれる。同じ事を書いても、洋語で書いたものは立派なものとなされる。大勢は實に是の如きものである。

日本人は由來武士魂といふ。この負けじ魂を有つて居るといふが、西洋人に負けて居たのは事實である。然し負けながらこの魂の維持されたのが、今までの有様であつた。それであるからこの日本人の特性である。誇りつゝある武士魂でさへ、負けながらの中にやつと維持されつゝあつた。かゝる時に、文學などでも、世を驚かし人を愕すといふやうな立派なものが出来よう道理はない。といふのは自己を基礎とした標準がない。西洋が標準である。自己の特性を發揮するといふことが出来ない。他を眞似るといふにとゞまるからである。

徳川時代に漢文が盛んであつた。然し當時は支那が標準であつたから、よし傑作があつたといつても、それも特殊なのは無い。支那人と同じやうなのか若しくはそれ以下で、決してそれ以上に出るといふことは出来なかつた。今の文學界も亦こんな様がある。

吾々は和魂——又は武士魂といふことを今までも口にしたが、然しこれを今日まで無暗に口にしたといふのは、或必要から出たのではあるまいか。これを事實の上に現する事なしに、徒に其聲をして高からしめんと叫んだのは、一方に精神の消耗といふ事を思はせるのと、一方には其事に對して恐怖を抱いたが

爲ではあるまいか、と臆測する者があるのも餘儀ないことになる。自信があつて云つたのでなくて、その精神の消耗を杞憂する恐怖といふ語の呼び換へられた叫びであると思はしめたのも餘儀ないことである。

然るに日本は茲に歐洲第一流の頑固で強いといふ露西亞を敵にして連戦連捷したのである。この連戦連捷といふ意味は、船を沈め敵を斃すといふ物質上の事であるが、然しこの反響は精神界へも非常な元氣を與へるので、今日まで恐れのかげを高くして居つた吾々は、最初から死力を盡し、生きるか死ぬかといふ精神であつたが、かう勝を制して見ると、國民の眞價が事實の上に現はれた心地がする。或はこれは多少期して居たかも知れないが、然し忌憚なくいへば、決して吾々には所信があつて今日の大成功を期して居たとはいはれない。或はいへば暗に豫期して居た位であつた。それがかう事實が發展して來ると、つまり今日まで苦しき言つた大和魂は、眞實に自覺自信して出た大なる叫びと變化して來る。これと同時に、同じ日本といつても、言ふことは同じだが、言ふ人の了簡が違つて來る。人間の氣が大きくなつて、向うも人なら此方も人だといふ氣になる。チルソンも偉いかも知れぬが、我が東郷大將はそれ以上であるといふ自信が出る。此自覺自信が開けてくると、この反響はあらゆる方面に波及して來る。

かうなつて來ると、文學の方面にも無論この反響は來るのである。今までは西洋には及ばない、何でも西洋を眞似なければならぬと、一も二もなく西洋を崇拜し、西洋に心酔して居たものが、一朝翻然として自覺自信の途が啓けて來ると、その考へも違つて來る。日本はどこまでも日本である。日本には日本の歴史がある。日本人には日本人の特性がある。あながちに西洋を模倣するといふのはいけぬ。西洋ばかりが手本ではない、吾々も手本となり得る。彼に勝てぬといふことはない、かう考へが付いて來る。

日本の文學界にも製作物として立派なものがある、近松はセクスピアと比較し得る、といつたやうな昔の國粹保存主義時代の考へではなく、今日から自覺自信の位地に起つた國民は、吾々は國民として全世界



の何所までも通用する。我邦の過去には文學としては大なる成功を爲したものはないが、これからは成功する。これからは大傑作が製作される。決して西洋にひけは取らぬ。西洋の比較され得るもの、いやそれ以上のものを出さねばならぬ。出すことも出来得るといふ——氣概が出て来る。これが反響として國民に自覺され自信される事になるのは自然の勢ひである。で、この趨勢から生れて来る日本の文學は、今までとは違つて頗る有望なものになつて来るであらう。

それでもう一つは日本の文學の見方——在來のものを批評するのでも、大分違つた見方が出て来るであらう。例へば繪畫でも、西洋畫の標準で日本の見れば丸で形なしであるが、然し見方を換へれば、日本畫には又日本畫として西洋畫には發見されぬ面白さが存在する。日本人は西洋の畫を持ち出して標準を西洋に取るが、これは餅屋の標準で酒屋を評するのと一つである。ところが西洋では既に自分に倦きて居るから、能く其間に日本畫を見て、日本畫に新しい所を發見する。マクキル・ホイットスラーなどは、日本の繪畫から發見して、平面的に物を寫して美しい理想を現はすのは日本繪畫の特徴であると稱して、其發見を應用して自身の繪畫に能くこれを現はしたが、これを日本人が聞くと言肯する所がある如く、日本の文學も在來の見方でなく、繪畫のやうに觀察點を違へたなら、亦或は未發の面白さを見ることもあらう。日本の芝居は西洋の劇から云へば比較にならぬかも知れぬが、或一種の技術としては特別な發達をして居る。美しい價値を認めることが出来る。これらは人が氣を付けるが、文學の方は人があまり氣を付けぬ。けれども、俳句の如きものに就いても、考へ直す餘地は十分にあるかも知れぬ。

それで戦後の影響としては、前言つたやうに、自然の勢ひが西洋を標準としないで日本自身を標準とする事になるから、人間が窮屈でなくなる。文學界の製作としても非常に潤達にのび／＼した感じを以て對することになる。批評の上にも自由な行動が出来るやうにならうと思ふ。

或はもう一つ、戦後に於ける經濟的變化で、日本の富が在來よりも膨脹して來れば、すべての贅澤な職業とか事業とかが従つて發達して來る。文學の如きも無論この部分に屬して發達して來るので、富の力は、かかる種類の事業を必要ならしめる。由來衣食が足りないで禮節を知るといふことは難いのと同じく、富の力に十分な餘裕が無いとすれば、向上的な精神界の娛樂は興らない。餘財があつて初めてこれらのものは發達勃興するのである。世間に餘財が出來て來なければ、大文學者が居つても用ふるに處なしで、餘財が出來て初めて立派なものも作られもし、亦歡迎もされる事になるのである。で、富の力が膨脹すればするほど、これらの需要も多くなり、これに對する名譽も報酬も多くなるといふことになる。従つてこれらの事業も發達して來るのである。

それで今の老人株に屬して居る人達は、個人としては兎も角、概して一般に文學などの方面には——富豪の名のある人でも、あまり關係したり深い嗜好を有つて居る人は尠い。それは今日までの時勢がさうだつたのであるが、これからは現代の青年時代の人が段々に家を成し亦家族をなせば、氣風が一變して來る。書籍を読むとか雑誌を見るとかといふことは、おのづから國民として、業務の餘暇にはかゝる事を娛樂とするといふ、方に向つて來るであらう。英國などでは、必ず業務の餘暇には書籍を読むこととして居る。それが下等の階級に在るものでも、かゝる習慣が作られて居る。これは一方には經濟的問題で、即ち富の力が餘つて來なければならぬのと、一方には業務の餘暇は斯くの如くして費すべきものであるといふ、習慣が浸み渡つて來なければ出來ないのである。然し日本も今や漸次にこれに近づきつゝあると思ふ。これは戦後に起る影響として勘定すべき事實であらう。ある人は日本は文學に今まで大なる成功がないから、今後とても怪しいものだといふ。それには種々なる原因を數へるであらうが、然し單に今までに成功がないからといふ事を以て今後を律することは出來ない。或方面に著しき活動があれば、其活動の餘波はあら



ゆる方面に影響して来るものである。この餘波が文學の方面に入れば、茲にも一變化を起すのは順序である。單に從來が斯うであつたからといふ事を以て、絶望の判断を下すことは出来ない。英國のエリサベス時代の文學の興つたのは、一つはスパネツシ・アーメーダの艦隊を破つたので、天地が廣くなつて歡樂を盡す方面に一般の氣風が向き、世の中が自由であるといふ氣で作をするから、勃々たる生氣が湧いて來て、決して窮屈の態が無い。夫で人を愕すやうにはつと文學が盛んになつた例證に見ても解ることである。

それで當時の英國と現代の日本とを比較して話したら面白いと思ふことも澤山あるが、あまり長くなるから今日はこれで止める。(三十八年八月『新小説』)

## 水まぐら

### 俳優と落語家

僕は芝居を見るくらゐなら落語を聞きに行く。この前『バオロ・エンド・フランチェスカ』の芝居を見に行つて、西洋人が出て來たりなんかして驚いて歸つて來た。それつきり芝居見物といふものに出かけた事がなかつたのを、この頃ある人に招待されて本郷座の『金色夜叉』を見た。こんどは夫でも前よりは面白かつた。それからまた落語の圓左會だの、落語研究會だのに行つて、近頃落語家の顔も大分覚えて來た。僕は落語家小さんの表情動作などは、壯士俳優のやるより餘程旨いと思ふ。人が賞める高田などは、芝居のために芝居をするやうで、肩が凝つて面白くない、餘程不自然だ。まああの白などのやり口は、講談師松林伯知ぐらゐの所だらうと思ふ。河合の女形はよい。あの詞調子態度などは死んだ圓朝其ま、だ。餘程巧でそれで自然だ。僕は寧ろあゝいふ重だつた役をするものより端役をやるものゝ方が自然で旨いと思ふ。華族さんが寫真をうつすとか義太夫を語つて踊るとか、あゝいふことばかりすればよいと思ふ。

能であるとか又舊演劇であるとか、それらは元技能的のもので、所謂新派の芝居とは大いに趣が違ふ。寫實の眼を以て見るべき劇を、菓子折を持つて震え出す瘡病みのやうな動作や、講談師調の不自然な白や、乃至は無闇と氣狂じみた性格や、そんなものばかり見せつけられたのぢや、とても堪らない。もつと自然に、感情が乗るやうにしたらよからうと思ふ。

小さんの煙草を呑む稽古の話は大變面白かつた。御客様も初めて、あらうが、私のやるのも初めてだと



云つて居たから、小さんが自分で拵へた噺であるかも知れない。さんざ煙草を喫つた揚句が、ふら／＼になつて、仕舞には我慢が仕切れないで、寺に通けこむ。あとから追つかけて来たやつを坊さんが遣り過した其あとで、やつと戸棚なんかから出てくる。そこで先づ安心したといふので、一服やらうと云ふのが落ちだ。あの眞面目な顔を種々に使ひ分ける。しかも夫が餘程自然に出来て旨い。落語の方には動作はあまりないのだが、その表情の様子で動作も伴ふやうに思はれる。劇をやる人もあゝいふ所に少し注意するとよからうと思ふ。

談が落語の方に移るが、燕枝といふのが柳派にゐる。あれは旨い。蓋し近頃旨くなつたのであらう。圓橘は老い込んで仕舞つた。いや昔から餘り旨くなかつたやうに記憶する。圓喬は僕が以前識つて居る頃は二好と云つてゐた。その時分から旨かつたが、その割合に發達しない。當時と今日とでは餘り變りがないやうだ。世間では圓喬を今日の落語家中で白眉だと云つて居るさうだが、僕は矢張り小さんが旨いと思ふ。扇歌といふのも、昔はつばめといつて音曲ばかりを遣つてゐたが、近頃は噺もやる。そしてうまい。圓左は矢張り老巧だ。

何しろ落語家の方が今日の壯士俳優よりも數等上なる事は慥かだ。

### 新體詩

僕はあまり新體詩といふものを讀まないから知らんが、この間『しら玉姫』といふのと『塔影』といふ詩集を贈つてくれた。『しら玉姫』の作者の方が『塔影』の作者より才もあり力もあるやうだ。しかし分らない事に至つたら『塔影』より『しら玉姫』が分らない。

近頃の新體詩は一體にわからないのが多いやうだ。といつて僕は卷頭五行より多くを讀まないのだから、讀まずに評する譯には行かないが、どうもさうらしい。有明といふ人の詩を雑誌などで、是も二三行の拾ひ讀みだが、見る。一向わからない。鐵幹といふ人は旨い。それに餘程才があると思ふ。

今日の新體詩全體からいふと、作人の考へが違つてゐるやしないかと思ふ。どの作り振りを見ても入口は一つで、中頃から枝が出たやうに、あちらへ岐れこちらへ岐れるといふ迄で、其筋道は大抵おなじだ。もつと思ひ切つて、入口初から在來の風と想も調も變へて見たら、随分面白いものが出来ようと思ふ。どうも今の新體詩のやり口は無意味に唯ならべる丈のやうに見える。

丁度こゝに雑誌がある。試にこのうちの新體詩を見給へ。大抵わからない。若しわかるのであれば、即ちくだらない。

『春の夜』といふ題だ、冒頭が

櫻花咲く庭隅に

君と路かへ忍び來ぬ

木立のあなた灯はもれて

笑どよめき樂は湧き

湧きこそ立てや胸の血潮も

といふのだ。「櫻花」といふのが先づ餘計な事だ。「さくら」で澤山だと思ふ。「庭隅に」も窮してゐる。「君と路かへ忍び來ぬ」は厭味だ。其あともくだらないが、兎も角わかる。それから

ほてるやわ頬に頬をよせば

鬢をのゝきて櫛落ちぬ



朧月夜の月くらく  
木立のあなた灯はもれて  
今ぞ唄止み歡聲さらに

「やわ頰」なんて云ふ言葉が元來くだらない。「ほてるやわ頰に頰をよせば」、なんだか厭な感が起るばかりではないか。あとは評するまでもないが

垂れし項に手をまきて  
そとさゝやけば片鱗

戀する人の息に似て

風なめらかに枝をすぎ

緋桃ほろく夜更を散りぬ

少しかうなつては警視廳の注意がほしい位だ。是等は随分極端な例としても、くだらなさは多く是と相如くものであらう。然しこんなのはよい、例へば『夢の湖』といふ小説中に插まれた一節の詩だね。

美はしき我顔ばせも

今日のみぞたゞ今日のみぞ

物皆は變り果てなめ

明日こそは嗚呼明日こそは、

わがものと君を思ふも

束の間ぞ嗚呼いつまでぞ

君にわかれ身はたゞひとり

死に果てんあはれいづこに。

同じ雑誌の中でも、是などはよほどまいと思ふ。要するに今少しく意味のある、蘊蓄のある、しつかりした人が作家にほしいのだ。(明治三十八年八月『新潮』)



## 余が文章に裨益せし書籍

四三八

文章鍛錬上に最も多く裨益した書籍、文章と、特に擧げていふべきものはないが、先づ自分が好きな作家をいへば、英文ではスチブンソン、キップリング、其他近代の作家である。いづれも十九世紀の初め頃のと違ひ、文章に力があつて間緩まどろこくない。アーギングのスケッチブックは、我が國人間に非常に愛讀されたもので、其文章は美しくなだらかであるが、惜しいことには力がない。これは十九世紀の初期頃の通じての弊である。自分はかゝる類の書物は好まない。また寫實的のものでは、スウィフトのガリバーズ・トラベルスが一番好きである。多くの人はこれを名文と思はないが、これは名文の域を通り越してゐるから、普通人には分らぬのである。實に達意で、自由自在で、氣取つてゐない、ケレンがない、ちつとも飾つた所がない。子供にも讀めれば、大人も讀んで趣味を覺える。寔に名文以上の名文であると自分は思ふ。國文では太宰春臺の『獨語』大橋訥庵の『關邪小言』などを面白いと思つた。何れも子供の時分に讀んだものであるから、此所が何うの、彼所が斯うのと指摘していふことは出來ぬが、一體に漢學者の片假名ものは、きち／＼締つてゐて氣持がよい。

漢文では享保時代の徂徠一派の文章が好きである。簡潔で句が締つてゐる。安井息軒の文は今も時々讀むが、輕薄でなく淺薄でなくてよい。また林鶴梁の『鶴梁全集』も面白い。

また明治の文章では、もう餘程以前のことであるが、日本新聞に載つた鐵崑崙といふ人の『巴里通信』を大變面白く思つた。其頃ひどく愛讀したものである。因に云ふが、鐵崑崙は今の東京朝日の池邊氏であつたさうである。

一體に自分は和文のやうな、柔かいだら／＼したものは嫌ひで、漢文のやうな強い力のある、即ち雄勁なものが好きである。また寫生的のものも好きである。けれども俳文のやうな、妙に凝つた小刀細工のもの嫌ひである。俳文は氣取らないやうで、ひどく氣取つたものである。これを喜ぶのは、丁度樂隱居が古茶碗一つをひねくつて嬉しがると同じ事だらう。徒にだら／＼した『源氏物語』、みだりに調子のあつた『馬琴もの』、『近松もの』、さては『雨月物語』なども好まない。『西鶴もの』は讀んで面白くと思ふが、さて眞似る氣にはなれぬ。漢文も寛政の三博士以後のものはすかぬ。山陽や小竹のものはだれてゐて厭味があるから嫌ひである。(明治三十九年三月『中學世界』)



## 中學生時代

四四〇

其頃東京には中學と云ふものが一つしか無かつた。學校の名もよくは覚えて居ないが、今の高等商業の横邊りに在つて、僕の入つたのは十二三の頃か知ら。何でも今の中學生などよりは餘程小さかつた様な氣がする。學校は正則と變則とに別れて居て、正則の方は一般の普通學をやり、變則の方では英語を重にやつた。其頃變則の方には今度京都の文科大學の學長になつた狩野だの、岡田良平なども居つて、僕は正則の方に居たのだが、柳谷卯三郎、中川小十郎なども一所だつた。大學豫備門へ入るには變則の方だと英語を餘計やつて居たら容易に入れたけれども、正則の方では英語をやらなかつたから卒業して後更に英語を勉強しなければ豫備門へは入れなかつたのである。面白くもないし、二三年で僕は此中學を止めて了つて、三島中洲先生の二松學舎へ轉じたのであるが、其時分此處に居て今知られて居る人は京都大學の田島錦治、井上密などで、學舎の如きは實に不完全なもので、講堂などの汚なさと來たら、今の人には逆も想像出來ない程だつた。眞黒になつた腸の疊が敷いてあつて机などは更にない。其處へ順序もなく坐り込んでは講義を聞くのであつたが、輪講の時などは丁度カルタでも取る様な具合にしてやつたものである。輪講の順番を定めるには、竹筒の中へ細長い札の入つて居るのを振つて、生徒は其中から一本宛抜いてそれに書いてある番號で定められたものであるが、其番號は單に一二三とは書かないで、一東、二冬、三江、四支、五微、六魚、七虞、八齊、九佳、十灰と云つた様に、何處迄も漢學的であつた。其頃は又寄宿料等も極めて廉く——僕は家から通つて居たけれど——慥か一ヶ月二圓位だつたと覚えて居る。元來僕は漢學が好きで随分興味を有つて漢籍は澤山讀んだものである。今は英文學などをやつて居るが、

其頃は英語と來たら大嫌ひで、手に取るのも厭な様な氣がした。兄が英語をやつて居たから、家では少し宛教へられたけれども、教へる兄は疇癩持、教はる僕は嫌ひと來て居るから、到底長く續く筈もなく、ナシヨナルの二位で御仕舞になつて了つたが、考へて見ると漢籍計り讀んで此文明開化の世の中に漢學者になつた處が仕方なし、別に之と云ふ目的があつた譯でもなかつたけれども、此儘で過ごすのは詰らないと思ふ處から、兎に角大學へ入つて何か勉強しようと思つた。其頃地方には各縣に一つ宛位中學校があつて、之を卒業して來た者は殆ど無試験で大學豫備門へ入れたものであるが、東京には一つしか中學はないし、豫備門へ入るものは多く成立學舎、共立學舎、進文學舎、其他之に類する二三の豫備校で入學試験の準備をしたものである。其處で僕も大いに發心して大學豫備門へ入る爲に成立學舎——駿河臺にあつたが、慥か今の曾我祐準の隣だつたと思ふ——へ入學して、殆ど一年許り一生懸命に英語を勉強した。ナシヨナル二位しか讀めないのが急に上の級へ入つて、頭からスウキントンの萬國史などを讀んだので、初めの中は少しも分らなかつたが、其時は好きな漢籍さへ一冊残らず賣つて了つて夢中になつて勉強したから、仕舞にはだん／＼分る様になつて、其年（明治十七年）の夏は運よく大學豫備門へ入る事が出來た。

こんな具合にして何とか彼んとかして豫備門へ入るには入つたが、怠けて居るのが大好きで少しも勉強なんかしなかつた。水野鍊太郎、今美術學校の校長をして居る正木直彦、芳賀矢一なども同じ級だつたが、是等は皆な勉強家で、自ら僕等の怠け者の仲間とは違つて居て、其間に懸隔があつたから更に近づいて實際するやうなこともなく全然離れて居つたので、彼方でも僕等の様な怠け者の連中は駄目な奴等だと輕蔑して居たらうと思ふが、此方でも亦試験の點計り取りたがつて居るやうな連中は共に談するに足らずと觀じて、僕等は唯遊んで居るのを豪いことの如く思つて怠けて居たものである。豫備門は五年で、生理學だの動物植物礦物など皆な英語の本でやつたものであるから、讀む方の力は今の人達より進んで居た様に思



はれるが、然し生徒の氣風に至つては實に亂暴なもので、それから見ると今の生徒は非常に温順しい。皆な悪戯計りして居たもので、ストーヴ攻杯と云つて、教室の教師の傍にあるストーヴへ薪を一杯くべ、ステ、クス／＼笑つて喜んで居た。數學の先生がボールドに向つて一生懸命説明して居ると、後から白墨を見持つて其背中へ怪しげな字や繪を描いたり、又授業の始まる前に悉く教室の窓を閉めて眞暗な處に靜まり返つて居て、入つて来る先生を驚かしたり、そんなこと計り嬉しがつて居た。丁度僕が二級の時に工部大進歩して現今の高等學校になつたのであるが、僕は其時腹膜炎をやつて、到頭二級の學年試験を受けることが出来なかつた。追試験を願つたけれども、合併の混雜やなんかで忙しかつたと見え、教務係の人は少しも取り合つて呉れない。其處で僕は大いに考へた。學課の方はちつとも出来ないし、教務係の人は試験を受けさせて呉れないのも、忙しい爲もあらうが、第一自分に信用がないからだ。信用がなければ、世の中へ立つた處で何事も出来ないから、先づ人の信用を得なければならぬ。信用を得るには何うして追試験を受けると切りに勧めるのも聞かず、自分から落第して、再び二級を繰り返すことにしたのである。人間と云ふものは妙なもので、眞面目になつて勉強すれば、今迄少しも分らなかつたものも、瞭然と分る様になる。前には出来なかつた數學なども非常に出来る様になつて、一日親睦會の席上で誰は何科へ行くだらう誰は何科へ行くだらうで投票をした時に、僕は理科へ行く者として投票された位であつた。元來僕は訥辯で、自分の思つて居ることが云へない性だから、英語などを譯しても、分つて居乍らそれを云ふことが出来ない。けれども考へて見ると、分つて居ることが云へないと云ふ譯はないのだから、何でも思

ひ切つて云ふに限ると決心して、其後は拙くても構はずどし／＼云ふ様にすると、今迄は教場などで云へなかつたこともすん／＼云ふことが出来る。こんな風に落第を機としていろいろな改革をして勉強したのであるが、僕の一身にとつて此落第は非常に樂になつた様に思はれる。

一級になると、もう専門に依つてやるものも違ふので、僕は二部の佛蘭西語を選んだ。二部は工科で僕は又建築科を選んだが、其主意が中々面白い。子供心に乙なことを考へたもので、其主意と云ふのは先づかうである。自分は元來變人だから、此儘では世の中に容れられない。世の中に立つてやつて行くには、何うしても根柢から之を改めなければならぬが、職業を選んで日常缺く可からざる必要な仕事をすれば、強ひて變人を改めずともやつて行くことが出来る。此方が變人でも、是非やつて貰はなければならぬ仕事さへして居れば、自然と人が頭を下けて頼みに来るに違ひない。さうすれば飯の喰ひ外れはないから安心だと云ふのが、建築科を選んだ一つの理由。それと元來僕は美術的なことが好きであるから、實用と共に建築を美術的にして見ようと思つたのが、もう一つの理由で、僕は其頃ピラミッドでも建てる様な心算で居たのであるが、當時同級であつた米山の云ふのに、今の日本の有様では君の思つて居る様な美術的の建築をして後代に遺すなど、云ふことは逆も不可能な話だ、それよりも文學をやれ、文學ならば勉強次第で幾百年幾千年の後に傳へる可き大作も出来るぢやないかと。僕の建築科を選んだのは自分一身の利害から打算したのであるが、米山の論は天下を標準として居る。かう云はれて見ると成程さうだと思はれるので、又決心を爲直して、僕は文學に定めたのであるが、國文や漢文なら別に研究する必要もない様な氣がしたから、其處で英文學を専攻することにした。

其後は變化もなく今日迄やつて来て居るが、やつて見れば餘り面白くもないので、此頃は又商賣替をしたいと思ふけれども、今ぢやもう仕方がない。初めは随分突飛なことを考へて居たもので、英文學を研究



して英文で大文學を書かうなどと考へて居たんだつたが――。

(明治三十九年七月『名士の中學生時代』)

## 人工的感興

例へば創作に就いては色々ある。こゝには創作の方法に就いて自分の知つてゐる人々の二三例話を話さう。

女流作家のオースチンなどは、芋の皮をむきながら、其隙々に一頁もかく。それから又子供の世話をすゝる、着物の洗濯をする、そして其隙に一頁もかく。何處で始まつてもよい、何處で終つても差支ない。用の都合で鉛筆の跡が終る所を終りにする。それで少しも苦にならぬらしい。そしてあのやうな傑作が出来る。

エリオットは其亭主のルイスと同室にゐるが、ルイスのペンの動く音さへ苦になつて書けなかつたといふ。オースチンの無頓着に比べて、是はまた特別の神經家である。

さうかと思ふとブラウニング夫妻の如きは、伊太利にゐた頃などは、御互に詩を作らうと思ふと、二人が離れ々になる。そして各自の室に入つて、日課を立て、何時間とか書く。そして又一定の時間に出てくる。殆ど機械的に出来るやうだ。

サツカレーは自分の書いたものを何日でも持ち歩いて居る。銀行に用がある時などは銀行へ持つて行つて、暫く待つてゐる間に、原稿を直してゐる。

バルザックの如きは、草稿を活版屋にやる。活版屋が校正を送つて來ると、全紙が眞つ黒になる迄直してしまふ。それからまた活版屋にやる。活版屋がまたすつかり組みかへて再校の初校を送つてくると、また其大半を直す。こんな鹽梅で、初め活版に附したものは何日でも未定稿なのである。つまり其初めは大



體の筋だけを書いて、漸次にすつかり直しあけるのであらう。

英吉利のトロロップは汽車に乗つて居つて、一時間に何頁とか書く。これなどは餘り物事を苦にしない方ではあらうが、しかし餘り傑作も出来ないやうであつた。

ユーゴーはまたヨットに乗つて横になつて、海上で仕組を考へる。それから筆を執ると一氣呵成に出来るのだといふが、スチーブンソンなどは腹ん這ひになつてゐるて書くのださうな。

是を綜合して考へると、神経質の人もあれば、機械的に出来る人もある。少々くらくらる物に妨げられても構はぬ人もあれば、無闇と物事を氣にする人もある。けれどもかういふ事だけは云へるやうだ。世にインスピレーションが起らねば筆が執れぬと云はれてゐるが、インスピレーションは必ずしも待つてゐて出てくるとは限らない。なぜなら、名家で立派な作物を出す人が、時間を定めて、其間々に用をしながら、然も渾然たるものを作る餘地がある所を以てすると、インスピレーションが來なければ筆が執れぬといふ事は、一寸考へる價值があると思ふ。

其意味は、氣が乗らなければ書けぬといふ事は、事實に相違ない。夫は事實には相違ないが、然し氣が乗るのを待つてゐなければ書けぬといふのは、嘘であらうと思ふ。換言すれば、自分が氣が乗らなければ、自ら氣が乗るやうに仕向けるといふことが必要ではあるまいかと思ふ。いはば人工的インスピレーションとでもいふものを作り出すやうに力めなければなるまいと思ふ。何日まで經つてもインスピレーションが來ないといふので、徒にボカンとして居つて、其來るのを待たうとしても、夫が何時くるか知れたものではない。その來るやうに仕向けるといふ事が、大事な事であらうと思ふ。さうすれば年に一冊しか書けないものでも二冊三冊と書ける事になるだらうし、また其數の徒に多きを貪るといふのでなく、作の上にも上達を誘ふことになるだらう。つまりインスピレーションを出すやうに工夫するといふ事は、藥を飲ん

で病氣を治すやうなもので、病氣は打つ遣つて置いても癒るものであらうが、早く癒す爲には是非藥を飲む必要があると同様であらう。

然し人工的インスピレーションの出來し方はどうしたらよいかといふ事は問題である。是は分らないと答へるより仕方がない。唯自分はどうしてインスピレーションを作るかといふ事だけは語られる。自分はインスピレーションなど、いふ程の大袈裟なものでもないが、兎に角氣乗りのするやうに工夫する。つまり自分のやうに人から日を限られて頼まれたり、是非書いて貰ひたいなど、云はれたりする時は、どうしても小説を作るやうに氣を向ける必要がある。さうしないと、今論文などを讀んで居るとすると、もう其論文が書いて見たくなつて、創作などは出來なくなる。そこで自分が小説を作らうと思ふ時は、何でも有り合せの小説を五枚なり十枚なり讀んで見る。十枚で氣が乗らなければ十五枚讀む。そしてこんどは其中に書いてあることに關聯して種々の暗示を得る。かういふことがあるが、自分ならば是をかうして見たいとか、是を敷衍して見たいとか、さまざまの思想が湧いて來る。それから暫くすると書いて見たい時、筆をそれをだん／＼重ねて行くと、だん／＼興が乗つてくる。其興に浮かされて堪へられなくなつた時、筆を執るとよいのであらうが、自分などはそれを待つてゐる事はなく、好加減な所で筆を執り出す。

餘り創作などの出來さうにも思はれぬ自分が、まあどうかかうか書く。書くうちには其或部分の如き、隨分氣が乗つて書けるやうに思はれるところもある。是は自分で作り出したインスピレーションであらうと思はれる。だから自分などは屢この人工的インスピレーションをやることに力めてゐるのである。

かの氣が向かなければ出來ないと云つて、氣の向くのを待つて居る天才肌の人たちは、元より天才だから自分等には分らないが、然し是等の人は必ず自ら力めることをしないといふ責は免れまい。力めるといふ意味は、無理をするといふ事ではない。誘ふといふ事である。誘ふといふ事もしなければ、何時其イン



スピレーションが出来てくるか、何時其作物が出来るか分らない。

吾等が嫌ひだと思ふ運動でも、力めてしなればならぬと云ふやうに、作をやるにも亦自ら鞭つといふ必要があるだらう。だから自分は文章家だから氣が乗らなければ書けないといふやうな事は、いはずとも濟むと思ふ。ちよつとした例であるが、スチーブンソンといふ人がかの有名な『ツレジュニア・アイランド』といふを書いた。それはスコットランドで毎日一章づゝ書くことを日課にして十章ばかり書いた。するとぴたりと止つた。そしてそれから書けなくなつた。それから何かの書を見たら急に書けるやうになつて来たといふ話がある。これは不用意の際にインスピレーションを作つたものと云はねばならぬ。

創作に従事する事は一二年に過ぎぬ上、是と云ふ人に誇る程の作物を出さぬ自分が、創作に對する意見杯は人の參考にならうと思へぬが、折角の來訪だから、今一つ話さう。古人今人の別なく他の書いた書物を讀めば、よんで居るうちに、幾多の暗示は求めずして胸中に湧いて來るものである。創作をやらうと思つてこゝ迄漕ぎつけるのは、別に苦勞も心配も入らぬ、自然に出來る。要は讀書中（こゝには特に讀書中に得たる暗示のみに就いて云ふ）に湧き出したる趣向を如何に仕上げるかに歸着する。創作も草木の種を蒔くのと同じ事で、蒔く種の數は非常なものだが、生えて花を開く數は何分の一にも足らぬ僅かな數である。胸裏に得來りたる趣向の漠然たるものはいくらでもあるが、いざ是を物にしようとなると、大分時がかゝるからして、愈出來上つたものは比例から云ふと極めて少いので、殊に余の如く多忙なものは、到底片端から片付けて行くといふ様な時間はない。よし幾ら時間のある人でも、此漠然たるものを悉く纏めて明瞭なる體裁に仕上げ切る程の人はあるまいと思ふ。して見ると創作家は種に困ると云はんより、仕上に要する時間と勞力に困るのではないかと思はれる。余一家の経験からいふと、今迄雜誌其他に載せる迄に書き上げたものは、其何倍かの數が頭のうちにあつたので、其中から、いざとなつたとき好い加減に一

つぬき出して來て、此一つ丈を熱心に考へて捏ね上げたものである。出來たあとから見ると、どうして是丈が物になつて外のは依然として曖昧な形で居るか、自分ながら其選擇の意味がちつとも分らない。多くの作家のうちには、自分と同じやうな経験があるかどうか知らぬが、兎に角自分丈には面白い現象で、然も外の人がまだ云うて居らん様だから、一寸蛇足ながら御話をする譯である。（明治三十九年十月『新潮』）



## 余が諸作と人生觀

四五〇

筆はさう遅い方ではない。其中でも『猫』などは最速く書ける。『坊ちゃん』『趣味の遺傳』なども遅い方ではなかつた。何んでも學校へ通つてゐる書いたのだが、左様『趣味の遺傳』は一週間位もかゝつたらう。『坊ちゃん』は其倍位と思ふ。『まほろしの盾』『薤露行』などは短い割合には日數がかゝつた。多分十日以上かゝつたやうに記憶して居る。例へば俳句のやうなものを長く聯ねて文章を書くとするれば、何うしても速くは書けない道理である。『猫』は最初は何もあのやうに長く續けて書かうといふ考へもなし、腹案などもなかつたから、無論一回だけで御仕舞ひにする積りで、また斯くまで世間の評判を受けやうとは少しも思つてゐなかつた。最初虚子君から「何か書いて呉れ」と頼まれて、あれを一回書いてやつた。丁度其頃文章會といふのがあつて、『猫』の原稿をその會へ出すと、それを其席で寒川鼠骨君が朗讀したさうだが、多分朗讀の仕方でも旨かつたのだらう。非道く其席で喝采を博したさうだ。それで愈『ホトトギス』に出して見ると、一回には世間の反響は無論なかつた。只小山内薫君が『七人』で新書の讀物だとか云つてほめてくれたのを記憶してゐる。虚子君の方では雑誌の埋草にもなるからといふので、「是非後を書け後を書け」と迫るので、十回十一回とかう長くなつた。然しもうさう／＼引き延ばしても、世間が厭きるのみならず第一自分が厭きるから、今度で御仕舞ひにした。勿論腹案もなかつたことだから、何う完結を付けたらいい、か分らない。然しどうかしなければならんから、あの通りいゝ加減な所で御免を蒙つた。

妙なもので、書いて仕舞つた當座は、全然胸中の文字を吐き出して仕舞つて、もう此次には何も書くやうなことはないと思ふ程だが、偕十日経ち二十日経つて見ると、日々の出來事を觀察して又新たに書いたやうな感想も湧いて來る。材料も蒐められる。こんな風だから、『猫』などは書かうと思へば幾らでも長く續けられる。

僕は無論専門の大家でないから、澤山も書いて居ないが、書きもせぬ前から變な癖があつて、一篇の小説に毎回長短の差が甚だしくあるのが、どうも平均が取れない様な氣がして嫌ひだ。例へば第一回を十枚書いたとすれば、第二回をも第三回をも大抵平均して十枚位にしないで氣が濟まない。何も毎回毎回に長短があつたからつて、其作物の優劣高下には影響のあるべき筈はないのだが、然し一回より二回の方が短いとすると、何んだか其回の重味が足りない様な感じがしてならない。尤も頁はどうでも内容の比例さへ出來てゐれば、讀んで不平均な感じはないかも知れぬが、夫でも頁が氣になるのである。で、第一回はこれだけの事件を書き、第二回にはあれだけの事件を書くとして置いても、書きかゝつて見て、さうさう思ふやうに旨く枚數が平均して書けるものではない。さうかといつて、第一回にも第二回にも大抵一つ宛の山は作つてあるものだから、第二回が短いからといつて、第三回と一緒にして書くわけにはゆかない。だからかういふ場合には、何か別に材料を見付けて、大抵紙數が平均するほどに引き延ばすやうに工夫する氣になる。然し延ばすのは下手にやると失敗する。何んでもない面白くもない事を書き埋めて唯紙數だけと同じやうにするには、左程困難なことはないが、兎に角面白味を付けて、何うにかかうにか讀者を倦かじめず讀み續かじめやうとするほどに書きこなすのは骨が折れるのである。

作者が作中の人物を主觀的に書くといふことは、良否は俄に言ひ難いことだが、まづくやると、出來上つて見て、何うも厭味なものになつて仕舞ふ事がある様だ。僕は夫大抵第三者の地位に立つて客觀的に書くが、此方が書きよくもあり、萬一出來損なつても、厭味がなだけ良い様にも思はれる。例へば芝居を見



る様なもので、芝居をやつてゐる役者になつて書いても委しいことが書けようし、又見物の地位に立つても其光景を寫し出すことは出来るが、何方がすきかと云へば、見物になつて客觀的に書いた方が、非ジユアライズする方から云ふと、遙かによく寫し出せると思ふ。

われ／＼が普通の小説を作ると假定すれば、世間人事の糾紛を寫し出すことだから、何うしても小説には道徳上に涉つたことを書かなくてはならない。勿論短篇のものならば、月が良いとか、風が涼しいとか書いただけでも文章の美を味うことは出来るが、長篇の小説となると、道徳上の事に涉らざるを得ない。諸君に長篇の一小説を草するとすると、作者が作中の事件に就いては黑白の判断を與へ、作中の人物に就いては善惡の批評を施さねばならない。作者は我作物によつて凡人を導き、凡人に教訓を與ふるの義務があるから、作者は世間の人々よりは理想も高く、學問も博く、判断力も勝れて居らねばならないのは無論のことである。文學は好惡をあらはすもので、普通の小説の如く好惡が道徳に涉つてゐる場合には、是非共道徳上の好惡が作中であらはれて來なければならぬ。此點から見て、文學は矢張り一種の勸善懲惡である。世間で云ふ道徳に反したことをした人物に同情を表して、俗に云ふ間違つたことをするのを獎勵するやうなことを書いても、夫は其人の好惡で、其人から云へば矢張り勸善懲惡である。例へば小説中の人物が人殺しをする。人殺しは普通惡い事であるから、其小説を讀んで、人殺しはいやなものだと感ぜしむる様にかげば、無論勸善懲惡である。然しある人がある場合には是非人殺しをしなければならぬ、してはぬ様だと云ふ考への作家も、居らんと限らぬ。其人はある時ある場合には人殺しをして人も人が厭と思はぬ様に、又進んで人殺しがしたくなる様にかくかも知れない。夫でもいゝ。此作家に取つては、それが勸善懲惡である。又は、人殺しはわるい、然し其うちに大いに恕すべき點がある、罪は憎むべきだが、其人は可哀相だと、感ずる様に筆を使ふ作家が出て來るかも知れない。夫でも構はない。矢張り一種の勸善

懲惡である。

私の態度は此三の中どれでもよい。唯自分の良心に恥かしからぬ様に勸善懲惡をやりたい。世間の道徳に反對する事もあらうし、又は道徳通りを道徳通りと示す場合もあらうし、世間の道徳を是と感ぜしめると同時にそれを破つたものも大いに稱すべき價值がある様にもかゝうし、要するに自己の見識に負かぬ様にした。而して此見識は深く考へ、深く修め、深く讀み、又深く寓して出來るものだから、文學者、殊に此種の小説家は、頭腦の修養を怠つてはならぬと思ふ。イブセンは自らイブセンで、トルストイは自らトルストイで、彼等の道徳上の好惡は明らかに一種の勸善懲惡主義となつて其作品にあらはれて居る。見識のない作物は、此點から云つて價值がない。換言すれば一種の人生觀のまとまらない作物は、其他の點に於ていくら成功しても、物足らないと云ふてもよい。

人生觀と云つたとて、そんなむづかしいものぢやない。手近な話が、『坊ちゃん』の中の坊ちゃんと云ふ人物は、或點までは愛すべく、同情を表すべき價值のある人物であるが、單純過ぎて、經驗が乏し過ぎて、現今の様な複雑な社會には圓滿に生存しにくい人だな、と讀者が感じて合點しさへすれば、それで作者の人生觀が讀者に徹したと云ふてもよいのである。尤も是程な事は誰にでも分つてゐるつまらぬ人生觀である。然し人が利口になりたがつて、複雑な方ばかりをよい人と考へる今日に、普通の人のよいと思ふ人物と正反對の人を寫して、こゝにも注意して見よ、諸君が現實世界に在つて、鼻の先であしらつて居る様な坊ちゃんにも、中々尊むべき美質があるではないか、君等の着眼點はあまりに偏頗ではないかと注意して、讀者が成程と同意する様にかきこなしてあるならば、作者は現今普通人の有してゐる人生觀に少しでも影響し得たものである。然も其人生觀が間違つて居らぬと作者の見識で判断し得たとき、作者は幾分でも文學を以て世道人心に裨益したのである。勸善懲惡主義を文學上に發揮し得たのである。



然し此人生觀が間違つてゐると知りつゝも、こんな風に人を動かさうと力めたら、其作家は正しく不徳である。假令知らざるも、間違つた人生觀を説いて人を動かしたら、恥辱である。間違つて居らなくても、低い人生觀を説いたら、低い作家である。狭い人生觀を説いたら、狭い作家である。だから作家は見識家でなくてはならぬ。頭腦を養はねばならぬ。普通の人の考を聞いて見ると、小説家は女の衣装やら髪のものやらに細かに通じてゐて、又は粹人や田舎者の言葉の遣ひわけをやつて、達者に文章をかくものだと思つて居るが、それは淺薄な考へである。普通の小説を作るもの、資格は、第一が人間の行爲行動（夫は大部分道徳に關係がある）を如何に解釋するかの立脚地を立てるにあると思ふ。だから學問がなければならぬ。學問がなくとも見識がなければならぬと思ふ。むづかしく云ふと、人生觀と云ふものが必要になるのである。その人生觀は、局部的で篇々に斷面があらはれてもよし、又はどの作にも大きい一つのものが貫いて居てもよし、又は前篇と後篇との間に反對があつても構はない。反對の兩方に正しい所があると云ふ事が、讀者に通じさへすればよい。かやうに兩極の人生觀を同時に把持し得る人は、頭腦の容量の大きい事を證明してゐる。矛盾でも何でもない。

世の中では小説家を以て、教員とか官吏とか商人とかと同じ様な單純なる職業だと思つてゐる。相互道徳上の交渉、問題に就いては、小説家は自分と同程度の批判力しかないと考へて居る。夫は間違つてゐる。小説家も夫で甘んじてはならぬ。

學問は教師にきかねばならぬ、事務は官吏に任せねばならぬ、金儲は商人に頼まねばならぬ事がわかれば、吾人が世の中にある立脚地やら、徳義問題の解決やら、相互の葛藤の批評やら、凡て是等は小説家の意見を聞いて参考にせねばならぬ。小説家も其覺悟がなくてはならぬのである。「ラッし」

## 余が『草枕』

一體、小説とはどんなものか、定義が一定してゐるのか知らぬ。

見た所、世間の真相を穿つたものを書く心理小説とか、一つの哲理を書き現はす傾向小説とか、主として時代の弊のみを發く一種の傾向小説とか、又は、走馬燈の如き世間の出來事を、何のプロットもなしに其まゝに寫し出すものとか、その他いろいろの種類はあるが、是等、普通に小説と稱するもの、目的は、必ずしも美しい感じを土臺にしてゐるのではないらしい。汚なくとも、不愉快でも、一切無頓着のやうである。唯世の中の人間はこんなものである、世の中にはこの位汚ないことがある、こんな弊がある、人間は斯くまでに恐ろしいものであるといふことが、讀者に解りさへすればよいのらしい。もし其上に、ある感じを與へるとすれば、それはかうでもあらう。即ち、だから人間は働かねばならぬ、正直でなければならぬ、悪い者には抵抗して行かねばならぬ、世の中は苦しいけれども忍ばなければならぬ、物事は齟齬して失望落膽は頻に到るが常に希望をもつて進んで行かねばならぬ、と。要するに、世の中に立つて、如何に生きるかを解決するのが主であるらしい。

若し假に、これのみが今の小説であるとすれば、美を描くといふ主意はいらぬ。唯眞を寫しさへすれば、たとひ些の美しい感じを傳へなくとも構はない譯である。

けれども、文學にして苟も美を現はす人間のエキस्पレッションの一部分である以上は、文學の一部分たる小説もまた、美しい感じを與へるものでなければならぬ。勿論定義次第であるが、もし此定義にして誤つて居らず、小説は美を離るべからざるものとすれば、現に美を打ち壞して構はぬものに傑作と云は



れるもの、あるのは、可笑しい。私はこれが不審なのである。

私の『草枕』は、この世間普通にいふ小説とは、全く反対の意味で書いたのである。唯一種の見方——美しい感じが読者の頭に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットもなければ事件の発展もない。

茲に、事件の発展がないといふのは、かういふ意味である。——あの『草枕』は、一種變つた妙な觀察をする一畫工が、たま／＼一美人に邂逅して是を觀察するのだが、此美人即ち作物の中心となるべき人物は、いつも同じ所に立つてゐる少しも動かない。それを畫工が、或は前から、或は後から、或は左から、或は右からと、種々な方面から觀察する。唯それだけである。中心となるべき人物が少しも動かんのだから、其處に事件の発展しやうがない。

所が普通の小説ならば、この主人公は甲の地點から乙の地點に移つて行く。即ち其處に事件の発展がある。此場合に於ける作者は、第三の地點に立つて事件の発展して行くのを側面から觀察してゐるのだが、『草枕』の場合はこれと正反對で、作中の中心人物は却つて動かずに、觀察する者の方が動いてゐるのである。

だから、事件の発展のみを小説と思ふ者には、『草枕』は分らんかも知れぬ。面白くないかも知れぬ。けれども、それは構つたことではない。私は唯、読者の頭に美しい感じが残りさへすれば、それで満足なのである。若し『草枕』が、この美しい感じを全く讀者に與へ得ないとすれば、即ち失敗の作、多少なりとも與へられるとすれば、即ち多少の成功をしたのである。

また、私の作物は、やゝもすれば議論に陥るといふ非難がある。が、私はわざとやつてゐる。もしもそれが爲に、讀者に與へるいゝ感じを妨げるやうではいけないが、これに反して、却つて是を助けるやうな

らば、議論をしようが何をしようが、構はんではないか。要するに、汚ないことや不愉快なことは一切避けて、唯美しい感じを覺えさせさへすれば、夫でよいのである。

普通に云ふ小説、即ち人生の真相を味はせるものも結構ではあるが、同時にまた、人生の苦を忘れさせて、慰藉を與へるといふ意味の小説も存在してゐると思ふ。私の『草枕』は、無論後者に屬すべきものである。

此種の小説は、從來存在してゐなかつたやうである。また多く書くことは出来ないかも知れぬ。が、小説界の一部に、この意味の作物もなければならぬと思ふ。

分り易い例を取つて云へば、在來の小説は川柳的である。穿ちを主としてゐる。が、此外に美を生命とする俳句的小説もあつてよいと思ふ。尤も、在來の小説の中にも、此分子が全然無いと云ふのではない。いかにも美しい感じを與へるやうな所もあるが、それが主になつてはをらぬ。汚ないものをも避けずに平氣で寫してゐる。

で若し、この俳句的小説——名前は變であるが——が成り立つとすれば、文學界に新しい境域を拓く譯である。この種の小説は未だ西洋にもないやうである。日本には無論ない。夫が日本に出來るとすれば、先づ、小説界に於ける新しい運動が、日本から起つたといへるのである。(明治三十九年十一月『文章世界』)



## 文章 一口話

四五八

繪畫に impressionist といふのがある。是は Turner が元祖である。Turner 自身でかういふ一派を創設主唱したのでもなければ、此時代の人からさう認められてゐたのでもない。唯ずつと後世になつて斯かる一派が事實上認められるやうになり、遠く其系統を辿り其根源に遡つて見ると此人に歸着するといふのである。

傳統は兎に角、イムプレツシヨニストの特色は、如何なる色を出すにも間色を用ゐぬと云ふ事に歸着する。彼等の考ふる所によれば、凡ての色は主色の重なつたもので混つたものではない、と云ふ立脚地から出立する。従つて近寄つては何か分らぬが立ち離れて一定の距離から見ると自然の色彩を感じ得る様にかきこなす。其方法は豫め和色板で顔料を混じて其混じたものを畫布に塗りつけるのではない。單純な主色 (pure tones) を一色一色にぢかに塗抹して、其集まつたものを一定の距離から見ると、眼の作用で、夫が其寫すべき實在の色彩に接したと同様の感を生ずるやうにするのである。色彩に就いての技術はかうだが、其外筆の用る方に就いても、例へば、こゝが一筆に勢ひを示し得るとか、或は筆つきで恰も音楽の調和のやうな趣を現はしてゐるとかといふ風で、主に技術の側に心を用ゐる。従つて夫がかうじて行く取材の選擇とか結構の工夫であるとかは、自然第二第三以下の問題となる。従つて composition (結構) から得る感じ、或は idea (思想) を現はすなどはどうでもよい。筆つきなどが巧みに運ばれて居れば、繪畫の能事は終つたやうに考へる程極端になつて来る。

文章に就いても同じ事が言へると思ふ。即ち文章の上にも亦イムプレツシヨニストがある。文章も、或

見方では、餘の事には眼を着けず、丁度繪畫に關して畫家が其仲間で褒め合ふ如く、技術其物のみを褒めるやうな事がある。或意味から云ふと、さう云ふのは、現在の寫生文家が互に褒め合つてゐる所である。即ち今の寫生文家の立場から云ふと、要するに何を書かうが勝手だ、唯其敍し方さへ巧みなればよい。極端に言へば、車夫馬丁の駄洒落でも、馬が尻をひつたことでも、犬が孳んでゐるさまでも、其敍寫が精緻でありさへすれば、直にうまいといひ面白といふ。唯巧みに書かうといふ弊は、其何を言ふかの目的に多大の注意を拂はぬ様になる。描き出された部分はそれは極めて明白に巨細に寫されて、間然する所がない程な技巧を示してゐるかも知れぬ。然し讀んだあとで何か物足らない。淡白で飽き足らないのではない。何だか不満足である。で、其原因を探ると色々になるが、分類をするのは面倒であるから先づ分り易い例で云ふと、或は中心がない、或は山がない、或は人を惹き付ける力がないと云ふ場合が、比較的に多い様に見える。鹽の中の水に春風が渡つて水面を刷く漣の縮緬皺の一つ一つ細やかに明かではあるが、然し其水全體に籠る力がないといふ場合もある。面滑かな大洋の浪の何の曲もなきが自ら心ゆく弧線を作すとは自ら異つてゐるので、何だか物足らない。そこで、彼等に聞いて見ると寫生だといふ。成程うまく寫生が出来てゐるかも知れない。リアルかも知れない。然しリアルであれば夫で充分だと云ふ場合計りはなからう。リアルでも其物自身がつまらん時は折角の技巧は牛刀を以て鶏を割くと同じ事であらう。余の考では、かゝる場合に於てよし有りの儘を有りの儘に寫し了せても、attractive でなければ物足らぬ。attractive であれば、如上の意味に於てリアルでなくても構はぬ。神は創造する。人も創造するがよい。一定の時の一定の事物を隅から隅まで一毫一厘寫さずとも、のみならず、進んで一枝一葉一山一水の削加増減を敢てするとも、宛も一定時の一定事物に接したかの感じを與へ得ればよい。更に一步を進めると、何時か何處かに果して存在し又は存在すべきことを要せぬ、唯、直に全く實在すると感じられ、實在するで

四五九



あらうかせぬであらうかと遲疑する餘裕のないものならば、夫で澤山である。是亦一種の意味に於てリアルである。此意味に於てのリアルとは、一定の時に一定の場所に起つた事物の證據力ではない、歴史的考證力でもない、躬方に其説述の裏に同化し眞偽の間に躊躇ふことなき境界の状態を意味するのである。かくて事物の證據力としては許されぬ創造は、如上の同化の境界を眞覺せしめる爲に、許されべきのみならず又實に必要である。或場合に在つては多少の創造を許すが故に充分 attractive となり、attractive であつて初めて藝術的にリアルとなる。かうやつたら事實に違はうか、さうしたら嘘にならうか、と戦々競々として徒に材料たる事物の奴隷となるのは文學の事ではない。感興の趁く所、創造の思ひ切りが大切である。翼々として思ひ切れぬ寫眞術には感興興趣の色彩は撮れぬ。シエクスピアは、今の人ならばとてもそこまでは思ひ切つて描くことが出来ぬ程のあたりまで、興に任せ筆を走らし立ち入つて描き出す。其思ひ切つた點がいつも其作を活躍せしめてゐる。

凡そ世の中の事は發達するに従ひ單純から複雑になる。本來を云ふと、文章もどこまでが思想でどこまでが技術か分らぬ程單純なものである。所が漸々人が文章を堅に見たり横に見たりして捏ね廻してゐるうちに、自ら實質と技術とが分れる様になつて來た。同じものが分れる譯はないが、人間の眼のつけ所が複雑になると、一つのものゝ色々に差別して見る事が出来るから、かう云ふ現象が起るのである。例へば形と色との關係の様なものである。一の物體に就いて云ふと、其物から色を取れば其形は無くなる、其形を取れば其色は無くなる。二相歸一、色は形で形は色である。然し人の智識が進むに従ひ解剖が出来る様になるから、此分かつことの出来ない色と形とをも假に分けて見ることが出来る。同一物體から色だけを抜き若しくは形だけを抜いて見ることが出来る。夫と同じ事で、文章も實質と技巧とを分けて見ることが出来る様になる。或人は技巧のみを抜いて見るし、或人は實質のみを抜いて見る。即ち前者後者の區別から、

form (形) に重きを置く技巧派と matter (質) を主とする實質派とも名づくべき二流派を生ずる。而して前者は現今の畫界に於けるイムプレッションニストと同傾向のものである。

“Art for art” は、文章若しくは繪畫を斯く分解して是を技巧的にのみ觀じ得る程吾人の頭腦が發達した時に、初めて勃興すべき現象であつて、又必ず起らねばならぬ一派である。夫で今の所謂寫生文家には大いに此傾向がある。此傾向のあるのは時勢の發展上かういふ一派が認められべき機運に到着したので、一方から云ふと、寧ろ社會が之を産出するまでに進んで來たのである。歴史上漸次文章界も複雑になつて來た結果、古くよりあつた思想派の外に近頃技巧派が出來た、といふのは開化の潮流がそこまで達したのであらう。唯、此技巧派が極端に走る時には、前に述べた様な弊害に陥ることは自覺せねばならぬ。

前述の次第だから、所謂寫生文は現今の社會からは頗る輕蔑されて何等の價値もない者の様に云はれてゐるに拘はらず、自分はさうは思はぬ。日本人の全體、今の所謂小説家などの多分の思ふ如く、寫生文は短くて幼稚だと云ふのは誤りで、幼稚どころか却て進歩發達したものと云ふても然るべき事と考へてゐる。否寧ろ發達し過ぎて其弊に陥つた者、一方の極端に走つた者と思ふ。即ち實質其者はどんな平凡な事でも、寫す技巧さへ確かであれば構はない。平たく言へば、事柄は面白くないが敘述はうまからう、と云ふ傾向になつてゐる。それだから或人は大いに感服すると同時に、或人は大いに不満足なのだらうと思はれる。議論の原則としては、技巧で書いた者は技巧を見る。趣向が主なら趣向を見る。人情の機微を寫した者なら人情の機微を見る。唯極端に走り餘弊に陥つた今の寫生文家は、趣向、結構 (composition)、筋、仕組 (plot) を考へなければならぬ。

技巧派の弊がこの邊にあるに對して、實質派の墮落の一は、唯筋を運ぶより外に何も知らぬことであらう。其筋も面白ければだが、つまらぬ人情話を容赦もなく運んで行く。丸で地圖を披いて見てゐる様であ



る。或は造船の設計を眺めて居る様である。

文章上に就いて、こんな咄嗟の際に思つた事を述べるとよく盡さぬ事があるので、屢人の誤解を招く事がある。この議論でももつと秩序を立て、長いものにして、判然と納得の行く様にしなければならんが、座談だから、さううまくは行かん。第一考ふべき事は、文章に於て考ふべき條項は何と何であるか、それから詳しく考へて、さうして相互の關係を論じて見なければならん。然る後小説でも戯曲でも完全な批評は出来るのである。現今の批評といふ者は毫も系統的でない。各勝手次第に氣のついた事をい、加減に並べる計りである。其代りどれも器械的でない。そこが頼もしい所で、さうして又科學的でない所である。

(明治三十九年十一月「ホト、ギス」)

## 滑稽文學

將來我國に滑稽文學が盛に勃興するだらうか何うだらう？そんなことは豫言者でなければ斷言することは出来ない。社會の流行と云ふものは妙なもので、別に重大な理由がなくつても、ちよつとした動機で或ものが流行り出して或ものが廢れる。例へば羽織の五ツ紋が流行るのを見ても別に是と云ふ深い譯があるのぢやないので、多勢の人が今迄三ツ紋計り着て居て多少厭きた様な傾きがある時、一人が五ツ紋を着出すと、是は變つて面白いと云つて隣の人が着る。すると又其隣の人が着ると云ふ風に、だん／＼多勢が着る様になるから、それが即ち流行となるのである。西洋の社會學者は社會は模倣である (society is imitation) と云つたが、成程さうかも知れない。人がちよつと珍らしいこと面白いこと奇抜なことを始めると、直に之を真似るのは世の中の常で、全く没交渉にして居る譯には行かぬと見える。文學の方面にしても十八世紀の頃一人が錢のアドヴェンチュアを書くとき、今度は夫をまねて着物のアドヴェンチュアを書くものが出来る。其他いろ／＼それに類似したものを多勢が書く様になるので、是等は慥かに模倣である。然しながら人は全く縁のないものを真似ると云ふことはしないので、必ず自分と近いものを真似る。たとへば自分の隣に外國人が住んで居て非常に珍らしい異つた風俗をして居れば、直にそれを真似るか云ふに、それはしない。かけ離れた縁の遠いものは真似ようともせず、又真似ようとしても出来ないのである。一體模倣と云ふことは、一寸聞けば何となく輕薄な様だけけれど、人のすることを真似た處が何も罪惡になる譯でもなく、人が變つたこと珍らしいことをするのを見て、それに倣ふのは人情の已むを得ぬ所で、作つてするのでなく、強ひてするのでなく、自然と其方に傾くのである。で、滑稽文學は將來何うなるだ



らうか杯と云ふ問題に就いて、自分は今まで考へて見たこともないので、又考へても容易に分るまいと思ふが、滑稽文學の興ることなども流行と云へば流行と云へるので、新に一人傑出した作者が出て大作を出すか、或は他の動機に刺戟されて、非常な勃興を來すかも知れない。けれどもそれを斷言することは六ヶ敷い。世の中に金を儲けたがつて居る人は随分澤山あるが、儲如何にしたら金が儲かるだらうかと云ふことの分る人は極めて少い。大抵は分らずにまごついて居るので、商賣をして居る者は必ず儲かると鑑定してやるのだらうが、十中の七八は思ふ様に行かぬ勝である。百人の中に一人か千人の中に一人位よく是等のことの見える人が居て、慥かに慥うと目星を付けければ大抵當たるが、文學の方ではさうは行かぬ。金儲などはビジネスだから思つた通りに働かさへすればいゝが、文學の方では假令今喜劇を一つ出せば屹度當たると云ふことが分つて居ても、自分でそれを書くことが出來なければ、何うすることも出來ない。又外に書く人がなければ、或は其儘で過ぎて終ふかも知れない。是は頭の問題だからビジネスと同じ様に論じ難いのである。

又、滑稽文學が興るか何うかと云ふ問題に就いては、其國の歴史と國民性も少からず關係を有して居る。歴史の事は少時措くとして、其國民性であるが、ヘブライ民族の様な嚴格な國民には到底滑稽文學のありやう筈がないので、先づ國民一般にユーモアを有つて居なければ、其興る可き第一の資格のないものと云つてよい。處が日本人は元來眞面目氣の少いとほけた様な、そしてよく泣きよく笑ふ、感じ易い國民である。眞面目でないと云ふて語弊があるなら、多血的な神經質な、即ち膽汁質でないと云つたらよからう。何れにしても冷やかな堅苦しい國民でないだけに、何れかと云へばロマンチックな、そしてポエチカルな國民であるから、悲劇を見て泣き得ると同時に喜劇を見ても必ず笑ひ得ることは慥かである。精細に國民

性を研究すれば云ふ可きことも随分多いだらうが、要するに我國の人々は充分滑稽趣味も有して居るし是を樂しむ資格もあるのだから、一人傑出した作家が出るとか或は他の動機に依つて非常な隆盛を來すだらうと云ふことは、斷言することは出來ないが、信じ得られる。而して今の社會が之を要求して居るのも事實である。

多くの人の中には悲劇と喜劇とを比較して、悲劇の方にのみ重きを置き喜劇を輕んずる人もあるが、是は大いに謬見だと思ふ。自分は悲劇も喜劇も其價値は同等で、更に輕重がないと思ふ。悲劇に起る事件は概ね死ぬか生きるかと云ふ問題だから、重大には違ひなく、又人の心を動かすことも強いが、悲劇に泣く計りが人生ではない。笑ひの間にも人情の機微はあるので、唯悲劇の方が實際的であると云ふに過ぎぬ。赤い色の血は最人の心を引くと云ふが、悲劇は是を以て彩られて居る爲に、直接に又現實的に人の心を動かすのだらうと思ふ。けれども喜劇に血の色がないからと云つて、直に之を軽く見ることは出來ない。本郷座あたりで時々演じられる様な喜劇を見て價値がないと云ふならば、卑俗な看客が無暗に涙を流す悲劇も矢張り價値がないのである。下らないものは何れも下らないが、眞に上乘の作ならば、何れを何れと云ふことは出來ぬので、其價値は同じだらうと思ふ。悲劇だから貴い喜劇だから卑しいと云ふことはないのであるから、單に悲劇喜劇と云ふ區別で其輕重を論ずるのは、謬見たるを免れぬ。然し各特長はある。即ち悲劇は血の色を以て人の心を動かす様な場合が多いから、何處迄も現實的で又實感的である。けれども喜劇には赤い血の色で人の心を動かすと云ふ様な直接に胸を突く感じがなくつて、何時も談笑の間に進行して行くのだから、此方は間接的で、何方かと云へば空想的な傾向を持つて居る。或はこんな處がちよつと見ると輕い様に思はれるのかも知れない。



滑稽文學として世にあるもの、多くは大抵陳腐でなければ卑しい駄洒落か、嘲笑の氣の充ちたもの計りであるが、滑稽と云ふものは唯駄洒落と嘲笑ばかりではあるまいと思ふ。深い同情もなければならぬ。讀む人に美感をも與へなければならぬ。西洋などには喜劇も随分多いけれども悪感を起す様なものが多い。假令其事實が如何に滑稽でも、悪感を起させる様なものだつたら、決して之を上乗の作と云ふことは出来ぬ。モーパッサンの作に次の様なものがある。

或處に生活に不自由なく暮して居る仲の好い夫婦があつた。ある時夜會に招待を受けたので、夫は二人で行つて見ようぢやないかと細君に勧めた處が、何う云ふものが別に嬉しさうな顔もせず、唯黙つて鬱ぎ込んで居る。そこで夫は何うして御前は夜會に行くのを喜ばないかと聞いたら、夜會へ行くのは嬉しいし是非行きたいけれども着るものがないので鬱いで居ると答へた。それぢや其着物を買ふには幾ら位要るのかと聞くと、幾ら／＼だと云ふ。聞いて見れば、現在に於ける自分の境遇では夫丈の着物を妻に買つてやるのは分不相應な事ではあるが、折角行かうと云つたものを着物がなから止めると云ふのも残念なので無理算段をしてやつと着物を買つてやつた。處が、細君はまだつまらない様な顔をして居る。欲しいといふ着物も出來たのに御前は何故不満足な顔をして居るのだと云ふと、着物は是で結構だが裝飾品が一つもない。外の貴婦人や令嬢は皆ルビーや眞珠やダイヤモンドを鑲めて燦爛として行くのに、私一人指環さへなくて行くのがいやだと云ふ。成程さうではあらうが、着物さへ借金までしてやう／＼調へたのを此上少からぬ金を出して指環まで買つてやることは到底出來ぬので、それだけは誰かに借りようと云ふことに一決した。それから細君は自分の知つて居る夫人の處へ行つて其事を話すと、早速承諾してダイヤモンドの指環を貸して呉れたので、漸く身の廻りを整へ、夫婦揃つて夜會へ行き踊つたり舞つたり其夜は楽しく

過して歸つたが、偕翌日早速指環を返さうとして見ると、何處へ失くしたのか影も見えない。ちよつと買へる品ではないから、夫婦は狂氣の様になつて探したけれども、中々出て來ないので、兩人はもう青くなつて終つた。然し失くしたからと云つて其儘濟む譯ではないから、市中のあらゆる寶石屋をさがして、やうやう元借りたのと同じ様なのを見付け、莫大な金を出してそれを買つた。勿論指環を買つたのは全然借金したのだから、それ以來財政上の苦しみと云ふものは非常なもので、夫も眞黒になつて働き細君も下女の様になつて臺所のこと迄し、長い間かゝつてやう／＼其借金を返した。其後細君は前に指環を借りた夫人に逢つた處が、細君は數年間の辛酸の爲に面もやつれ、其上勞働の爲に細く美しかつた指も太くなつて、ありし昔の面影を忍ぶことも出來ぬ程になつて居る。そこで夫人はだん／＼様子を聞いて見ると、其原因は自分の貸した指環にあるのでひどく氣の毒に思つたが、夫人の云ふ處によれば、以前貸した指環は眞のダイヤモンドではなくて米を煉つて作つた偽物であつた。

自分は之を讀んで何だか厭な感じがするのである。勿論滑稽には違ひないが、終ひにダイヤモンドが偽物だつたと云ふことが知れるので——或は是が全篇の主眼かも知れないけれど——夫婦が指環を失くして虚榮心の詰らないことを覺り數年の間眞面目になつて働いたのが、全く嘲笑の裡に葬られて終つた。同情もなければ何にもない。其處いらの芝居で之に類した喜劇を演つたら大に喝采を博すだらうが、其價値は別として、自分はこんなのを喜ぶことは出來ない。此喜劇は指環を失くして狼狽する處が既に滑稽である。あとで偽物だつたと云つて、無理に笑はせない方が却つていゝと思ふ。偽物だつたと云はれると、滑稽と云ふよりも寧ろ厭な感がする。世の中と云ふものはこんなものだと思つて冷笑した様な風も見え、更に讀者迄馬鹿にされた様に思はれる。それならば何んなのがいゝか、と云つて茲に例を擧げることは出來ないが、要するに嘲笑や罵倒が眞の滑稽ではなく、笑の裡にも深厚な同情を有するのが、上乘の作だらうと



## 家庭と文學

諸第一に家庭と、——元來家庭とはどう云ふものを云ふか、私にはよく解らないのだが、しかし、とにかく、人間がたつた一人で居ては、家庭に成らぬ、家庭を作つて居るとは云へないらしい。家庭と云へばどうしても二人以上の家族が一團となり、協同の生活をして居なければならぬ。加之一般の場合に於ては、家庭と云ふ言葉を聞けば、同時に必ずまた少年少女を聯想する。即ち家庭には子女が在ると云ふ、是丈の事はまづ明らかであるやうに思ふ。

で、一般に、家庭にはまだ年の行かぬ子女なるものが居るところで、かの家庭に入れてもいゝ、讀物とか、家庭に入れては悪い讀物とか云ふのは、主としてまた此子女等に對する文學の感化に就いて云ふものであらう。

家庭の少年少女に對して、文學の與ふる感化は、それが彼等を利するか、彼等を害するか、もしくは彼等を利しもせず害しもしないか、此三つの中の一つである。而して或種の作物を家庭に入れて悪いと云ふのは、それが單に利を與へないと云ふのみではなくて、尙害になる點からと云ふのであらう。

それならば家庭の少年少女に對して、或種の讀物が害となるのは、抑それが如何なる點に於て害になるのであらうか。如何なる場合に於てそれが有害無害の問題となるのであらうか。自分の見るところに依れば、それは主として作家の戀愛、男女兩性の愛を描き出す場合にのみ限られて居るらしい。

家庭對文學の問題を以上の如き見地より追求して見れば、畢竟問題の中心は戀愛の一事に存する。即ち戀愛の表現を全然否定し去るか、もしくは之が表現を許すとすれば、如何に之を取扱ふべきか、此二つの



問題になる。

戀愛の表現を悉く除却し去つて文學特に小説が出来得るや否や、是は實際やつて見なければ分らぬ。出来るとも出来ないとも云へぬ。是が云へなければ、戀愛の表現を全然除却し去るべきや否やは論題外となる。で、それは論題外としたところで、從來の状態よりして之を見れば、一寸した寫生などのやうなものは別として、文學とくに小説脚本の類に於て、戀愛の表現を全然缺乏して居るものはあまり見當らぬ。かの家庭の少年少女に悪影響を受けさせぬやうにとの希望並びに要求を以て世に現はれたる所謂家庭小説の如きすらも、全然戀愛の表現を斥けては居らぬ。居らぬものが多い。茲に至つて家庭對文學の問題は、一に戀愛の取扱方に關する問題に歸着するのである。

偕、自分の見るところに依れば、此戀愛の取扱方に關して、從來小説の一般に受けたる非難は、決して根柢のない非難では無かつた。そのやうな非難を受けたのは、蓋し當然の事なのである。と云ふのは、今日我國の小説は、爾餘の種々なる文化と共に、西洋からして輸入された、正に直輸入品の一つに屬する。従つて此直輸入品を現在の家庭に入れようとすると、そこに色々不都合なことが起つて來るのである。

抑も、何れの社會に在つても、其社會の現存組織を持続するのに最都合のいゝ觀念が、常に他の諸觀念を壓倒して居るものである。御維新以前などは、忠孝と云ふやうな觀念が、當時の社會組織を持続するのに、最都合よく最重要なる觀念で、従つて他の諸觀念を壓倒して居た最有力の觀念であつた。で、戀愛などの如きも、戀愛を描いた作品がないではないが、其戀愛たるや（西鶴文は別として）大抵皆、世の中の義理なるものとの葛藤なので、葛藤の結果は、義理の勝利によつて解決せらるゝものときまつて居た。若しも之が逆に行けば、世人の同情は去つて仕舞ひ、その興味も失はれて仕舞ふ。つまり當時の小説に、戀愛を單に戀愛として描いたもの、無いのは、専ら身を戀愛に打ち委せる事は道德的でないと云ふ當時の考

へ、其考へと相伴つて居たものである。

然るに右の如き考への、尙少からず人心を支配して居る今日の我國に、新たに輸入されて來たところの西洋文學は如何なるものであるか。戀愛を表現する上に日本從來の文學と西洋文學とは如何に相違して居るか。

西洋では一般に、本人に愛がなければ結婚は出来ぬ。而して、かく結婚に愛を必要とするのは、やがて結婚の自由を許して居る所以なので、また戀愛に大なるシグニフィカンスを置いて居る證據なのである。かくの如く戀愛に大なるシグニフィカンスを置いて居る社會に於ては、大抵、檢束なき戀愛が實際に存在する。常に檢束を受けないのみならず、時には忠孝等の爲に此戀愛を捨てるのは不徳である罪惡である。さへ考へられて居る。つまり此戀愛なるものは社會組織を持続する上に決して都合の悪くない觀念なのである。少くとも他のより有力なる觀念の爲に壓倒さるゝが如き憂はない。だからあちらの小説は此社會状態と相應じて、専ら縦まなる戀愛の表現を主として居るのである。

ところが我日本の新文明と云ふものは、全然西洋から移植された。文學殊に小説なども、其直輸入品の一つなのである。日本在來の社會状態の推移と相並行して自然の發達を遂げたものではない。現在の社會組織を持続する爲には、やはり忠孝の如き觀念が最大切なるものと考へられ、他の諸觀念は依然として此觀念に壓倒されて居る。かゝる時勢に於て、右に述べたやうな西洋文學が直輸入されたのであつて見れば、そこに色々の不調和や、不満や、不平の起るのは無理もないことである。今の小説が一般に、戀愛の取扱に關して、世間から非難を受けると云ふのに、何の不思議もない、尤な事である。それが、世間から非難されて初めて氣がつくなぞは、あまり氣が利かな過ぎる。

若し強ひて西洋の文學者などと同じやうに、檢束なき戀愛を忌憚なく書かうと云ふならば、どうしても



多少現存の社會狀態を動搖せしめても構はぬと云ふやうな意氣込がなくてはならぬわけである。ところが格別さう云ふ意氣込があるのではなく、たゞ漫然と所謂戀愛小説を作り、世間殊に家庭に排斥を受けたとする。排斥を受けて、初めてさうかと氣がついたとする。それでは一寸困る。

以上は今日の小説の今日の家庭に容れられない所以を説明したのだが、要するに、此「家庭と文學」なる問題は、戀愛を全然除却するかしないかの問題にはならないまでも、少くとも、戀愛を表現する上に立ち、如何に取扱つたならば、かの問題となる。つまり其取扱方に關して、家庭の監督者はどれだけの自由を許すか、子女たるものはどれだけの獨立行動を主張するか、また文學者はどれほどまで戀愛を鼓吹するか、是が要點なのである。

自分は此問題に對して、こゝに截然たる解決を與ふことが出来ぬ。勿論日本舊來の保守主義其儘でやつて行くのがいゝとは云はない。なぜかと云ふに、今日の社會組織は大體在來の繼續であるとは云ふものの、しかも全然在來の儘ではない。現に親子の關係の如き、日一日と變つて行きつゝある。乃ち親は自身、日一日と子の方に近きつゝ、變化しつゝある。而して日一日と子女に負けつゝある。之は常に親子の關係にのみ限つたわけではない。凡てのことに於て、社會の組織は日一日と新しくなりつゝある。従つてかゝる時代に於て、御維新前の趣味傾向を其儘に現はすやうなものを作れば、それで直ちに家庭向きになるとは決して云へぬ。けれどもさうかと云つて、現在の社會狀態が、まだ西洋に於けるほど戀愛の自由を與へて居ない今日にあつて、西洋に於けると同じ程度に戀愛を鼓吹するものを作り、或はそのやうな西洋文學を根こぎにして輸入する必要があるとまでは思はぬ。それでは自分の立場は何處にあるのかと聞かれると、實のところ少々困る。仕方がないから戀愛は描かぬ。少くとも今迄は描かないで居た。是から先よしかいたところで、自分は決して現在の社會狀態を危くするやうなものは書かない。又、そんな精神で

かゝうとはせぬ。是丈のことは兎に角明白である。

元來戀愛の取扱方如何によつて、社會狀態を危くするか、しないとか云ふ、其取扱方なるものは、全く嚴密に取扱方の義である。表現せらるゝところの情熱の大小強弱は、敢へて問ふ所ではない。唯その大小強弱各の情熱を如何に表現するか、即ち表現の方法が問題なのである。而して其方法なるものは、實際に書いて見なければ分らぬ。——自分の事を例に取るのも可笑しいものではあるが、私はあの『草枕』の中で若い女の裸體を描いたが、あれなどは、格別さう讀む人に厭な感じを與へはしなかつたらうと思ふ。實のところ私は、裸體のやうなものでも、かきやうに依つては、随分綺麗に、厭な感じを起させないやうに書くことが出来る、強ち出来ないものではないと云ふ、その一例としてあれを書いて見たのである。戀愛でも描寫の方法次第で、充分純潔にかき得られないことはなからうと思ふ。尤も實際に遣つて見なければ、確かなことは云へないが。

こゝらあたりで一つ結論を付けて見よう。自分の考へでは、戀愛は強ち排斥するには及ばぬ。熱烈なる戀愛の表現でも、強ち之を避くるには及ばぬ。また戀愛を他の感情即ち忠孝などの感情に從屬せしむるの必要があるとも限るまい。但作家の方に充分の手腕があり、其表現をして純潔ならしめ、無害ならしむると云ふことだけが肝要である。

是迄御話して來たのは、一般に、或種類の文學は或種類の家庭と相容れないと云ふやうな方面から、「家庭と文藝」なる問題を研究したのであるが、更に翻つて他の一面「家庭に對する文學の貢獻」と云ふやうな方面から觀察して見ると、文學の功用なるものは、亦輕々に看過し去ることが出来ぬ。

家庭の圓滿なる發達を期する爲には、廣い意味での趣味と云ふものが大切である。從來我國の家庭に於ては、其子女等は琴とか茶とか花とかを教へられた。名づけて藝と云ふ。實は趣味の教育に外ならぬのを、



惜しいかな、其教育方法は間違つて居る。方法が間違つて居ると云ふよりも、寧ろ是に對する考が根本的に誤つて居る。趣味の教育としては師匠も教へず、自分も教はらず、親も教はらせぬ。單に器械的のみにやつて居るのであるから、いくら琴を弾いても、花を活けても、茶を立てても、趣味は一向に發達せぬ。あゝ云ふ遣り方では全く駄目だが、若しよく其精神を汲んで之を教へ、之を習ひ、之を習はせれば、誠に嘉すべき趣味の教育である。

文學もまた趣味の教育である。茶の湯や、活花などよりも遙かに大切なる趣味の教育である。

本來文學なるものは、趣味の向上と云ふこと以外に目的を有たぬ。而して趣味特に道德的趣味、例へば、親に對してはかくくすべきもの、兄弟に對してはかくく振舞ふべきものと云ふやうな道德的趣味は、如何にして養はるゝかと問へば、是は専ら目上の者から教はるのだと云ふ。偕其目上のものと云つたところで、親よりも勝れてえらい教育者は、詩人文學者である。して見れば、父兄は其子女の教育を依頼する氣で之を文人の手に委ね、文人も亦それだけの見識を以て筆をとらねばならぬ。とり分け今日の時勢、親は親で、全く子女の趣味を教育する資格はなし、學校は學校で、趣味と云ふ言葉さへ知らないやうな倫理の先生が何の役に立たう。國家已に道德的趣味の教育を怠り、家庭また其任に堪へずとしたならば、そのよく是を爲し得るもの、かの文人を措いて他に何があらう。趣味教育者としての文人の任務は、今日に於て特に重大なるものがあるのである。

然るに今日の父兄は此大切なる文人の感化を子弟に受けさして居ない。其子女に對しては所謂藝などを習はせながら、その子弟に對しては、文學の影響を受けさせないやうにして居る。少くとも受けさせようと云ふことに、一向骨を折つて居らぬ。けしからぬことである。さう云ふ父兄だからして、自らも何等の趣味教育がなく、よし學問があるとか地位があるとか云つたところで、非常に品の悪い、非常に野鄙な人

が多い。殆ど今日の日本では自分で趣味の有無を決定されないやうである。

是の如き弊風を矯めるのには、文學者たるもの、決して漫然と筆を執つて居てはならぬ。文學は人生の批評と云ふではないか。趣味の高尙とか野鄙とかを、常人よりも二倍、三倍深く觀察して、讀者に是を教ふるに云ふのが、彼の任務ではないか。

されば父兄が其子女に活花、茶湯を習はすのに、それを單に機械的にのみやつてはいけないのと同じやうに、文學もまた充分其精神を汲んで趣味の涵養に資するやうに心掛けねばならぬ。取分け筆を執る方の人には、此心掛がなくてはならぬ。もし此心掛さへあるならば、よし外觀上、今の家庭に有害なるが如き觀あるものと雖も、實際は無害にかき得らるゝものと信する。萬々一、此心掛を以てかいたものが、尙有害だとするならば、それは有害であつても構はぬ。それは恐らく、害を受ける者の趣味があまりに低きに過ぐるが爲で、如何とも致し方のないことである。又もし一旦害を被つて、却つて趣味の高い方に導かれるならば、それこそ一般社會の爲に賀すべきことである。一時の流毒はともあれ、究竟は寧ろ慶ぶべきことなのである。(明治四十年二月『家庭文藝』)



## 僕の昔

四七六

あの猫はね、此方へ引越してきてから元の千駄木の家へ折々歸つて行くんだ。此間も途であいつが小便をしてゐる處をうまくとつつかまへて連れて戻つた。やつぱり元の家といふものは戀しいものかなあ。――何、僕の家。君、輕蔑しては困るよ。僕はこれでも江戸ッ子だよ。しかし江戸ッ子でも大分幅の利かない山の手の、牛込馬場下で生れたんだ。

親父は馬場下町の名主で小兵衛といつた。別に何も商賣はしてゐなかつた。何でもあの名主なんかといふものは庄屋と同じくゴタ／＼して、収入なども可なりあつたものと見える。丁度、今、あの交番――喜久井町を降りてきた處に――の向ひに小倉屋といふ、それ高田馬場の敵討の堀部安兵衛武庸かね、あの男が、あすこで酒を立飲をしたとかいふ柄を持つてる酒屋があるだらう。そこから坂の方へ二三軒行くと古道具屋がある。そのたしか隣の裏をすつと入ると、玄關構の朽ち盡した僕の家があつた。もう今は無くなつたかもしれぬ。僕の家は武田信玄の家筋だぜ。えらいだらう。處が、一つえらくないことがある。何でも何代目かの人が、君に裏切りとかをしたといふことだ。家の紋は井桁の中に菊の紋だ。今あの邊を喜久井町といふのは、僕の親父がつけたので、家の井桁の中の菊の紋から、菊井を喜久井とかへたのださうな。こんなことはさうさなあ、明治の初め頃の話だから、名主といふものがまだあつた時分だらうな。

名主には帶刀御免とさうでないのとの二つがあつたが、僕の親父はどつちだつたか忘れて仕舞つた。あの相模屋といふ大きな質屋と酒屋との間の長屋は、僕の家で、あの時分に玄關を作るのは名主に丈は許されてゐたから、名主一名御玄關様といふ奇抜な尊稱を頂戴して、親父は盛んに威張つてゐたんだらう。

家は明治十四五年頃まであつたのだが、兄哥等が道樂者でさん／＼につかつて、家なんかは人手に渡して仕舞つた。兄哥は四人あつた。一番上のは當時の大學で化學を研究してゐたが、死んで了つた。二番目のは随分振つた道樂ものだつた。唐棧の着物なんか着て藝者買やら吉原通ひにさん／＼使つてこれも死んだ。三番目のが今、無事で牛込にゐる。然し馬場下の家にゐるのぢやない。馬場下の家は他人の所有になつてから久しいものだ。

僕はこんなづほらな、香氣な兄等の中に育つた。又従兄にも通人がゐた。全體にソワ／＼と八笑人か七變人のより合ひの家見た様に、一日芝居の假聲を遣ふやつもあれば、素人落語をやるやつもあるといふ有様だつた。僕は一番上の兄に監督せられてゐた。

一番上の兄だつて道樂者の素質は充分もつてゐた。――僕かね、僕だつてうんとあるのさ。けれども何分貧乏と閑暇がないから、篤行の君子を氣取つて猫と首つ引きしてゐるのだ。子供の時分には腕白者で喧嘩がすきで、よくアバレ者と叱られた。あの穴八幡の坂をのほつてすつと行くと、源兵衛村の方へ通ふ岐れ道があるだらう。あすこをもつと行くと諏訪の森の近くに越後様といふ殿様の御邸があつた。あの御邸の中に桑木巖翼さんの阿母さんの御里があつて鈴木とかいつた。その鈴木の家の子が折々僕の家へ遊びに來たことがあつた。

僕の家には大きな棗の木が五六本もあつた。『坊ちゃん』に似てゐるつて。或はさうかも知れない。『坊ちゃん』に清といふ親切な老婢が出る。僕の家にも事實あんな老婢がゐる。僕を非常に可愛がつて呉れた。『坊ちゃん』の中に、清から貰つた財布を便所へ落とすと、清がわざ／＼それを拾つて持つて來てくれる條があつた。僕は下女から金を貰つた覚えはないが、財布の一條は實地の話だつた。僕の幼友達で

四七七



今名前を知られてゐる人は、山口弘一といふ人だけだ。たしか學習院の先生かなんかしてゐるといふことだ。精しくは知らぬ。

四七八

その中に僕は中學へ這入つたが、途中でよして仕舞つて、豫備門へ入る準備の爲め駿河臺に其頃あつた成立學舎へ這入つた。其頃の友人には大分えらくなつた奴がある。それから豫備門へ這入つた。山田美妙齋とは同級だつたが、格別心易くもしなかつた。正岡とは其時分から友人になつた。一緒に俳句もやつた。正岡は僕よりももつと變人で、いつも氣に入らぬ奴とは一語も話さない。孤峭な面白い男だつた。どうした拍子か僕が正岡の氣に入つたと見えて、打ち解けて交るやうになつた。上級では川上眉山、石橋思案、尾崎紅葉などがゐた。紅葉はあまり學校の方は出來のよくない男で、交際も自分とはしなかつた。それから暫くすると紅葉の小説が名高くなり出した。僕は其頃は小説を書かうなどは夢にも思つてゐなかつたが、なかに己だつてあれ位のもはすぐ書けるよといふ調子だつた。

丁度大學の三年の時だつたか、今の早稻田大學、昔の東京専門學校へ英語の教師に行つて、ミルトンのアレオバジチカといふ六ヶ數本を教へさ、れて、大變困つたことがあつた。あの早稻田の學生であつて、子規や僕等の俳友の藤野古白は姿見橋——太田道灌の山吹の里の近所の——邊の素人屋に居た。僕の馬場下の家とは近いものだから、折々やつてきて熱烈な議論をやつた。あの男はとう／＼精神錯亂で自殺をして仕舞つたよ。『新俳句』に僕があの男を追懷して、

思ひ出すは古白と申す春の人

といふ句を作つたこともあつたつけ。——その後早稻田の雇はれ教師もやめて仕舞つた。無論僕が大學學生時代の話だぜ。其間僕は下宿をしたり、家に居たり、あちらこちらに宿をかへてゐた。僕の大學を出たのは明治二十六年だ。元來大學の文科出の連中も時期によつて大分變つてゐる。高山が出た時代からぐつ

と風潮が變つてきた。上田敏君も此期に屬してゐる。この期には中々やり手が澤山ゐる。僕等はその以前の所謂沈滞時代に屬するのだ。

學校を出てから、伊豫の松山の中學の教師に暫く行つた。あの『坊ちゃん』にあるぞなもしの訛を使ふ中學の生徒は、この連中だ。僕は『坊ちゃん』見たやうなことはやりはしなかつた。然しあの中にかいた温泉なんかはあつたし、赤手拭をさけてあるいたことも事實だ。もう一つ困るのは、松山の中學にあの小説の中の山嵐といふ綽名のついた教師と、寸分違はぬのがゐるといふので、漱石はあの男のことをかいたんだといはれてゐる事だ。決してそんなつもりぢやないのだから閉口した。

松山から熊本的高等學校の教師に轉じて、そこで暫くゐて、後に文部省から英國へ留學を命ぜられて、行つて歸つて來て、今は大學と一高と明治大學との講師をやつてゐる。中々忙がしいんだよ。

落語か。落語はすきで、よく牛込肴町の和良店へ聞きに出かけたもんだ。僕はどちらかといへば子供の時分には講釋がすきで、東京中の講釋の寄席は大抵聞きに廻つた。何分兄等が揃つた遊び好きだから、自然と僕も落語や講釋なんぞが好きになつて仕舞つたのだ。落語家で思ひ出したが、僕の家からも少し穴八幡の方へ行くと、右側に松本順といふ人の邸があつた。あの人は僕の子供の時分には時の軍醫總監で羽振りが利いて中々威張つたものだつた。圓遊や其他の荒語家が澤山出入りして居つた。

——ざつと僕の昔を話したらこんなものだ。此僕の昔の中には僕の今も大分這入つてゐるやうだね。まあ可いやうにやつて置いてくれたまへ。(明治四十年二月『趣味』)



## 漱石一夕話

四八〇

### 脚本と小説

脚本家になるものは少くて、小説家は多い。それには色々の理由もあらうが、一つは芝居が見物相手の商賣だといふことが原因をなして居るらしい。いつかと言つたことだが、越路を聞きに行く大隅を聞きに行くといふものはあつても、門左の曾根崎を聞きに行くとか半二の何を聞きに行くとかいふものは餘りない。つまり作其ものよりも、それをやる其技術に重きを置くといふのが、一般の實際であらう。早い話が落語を見てもさうだ。落語の題目は昔から餘り變つたものもないやうだが、それを小さんもやれば圓遊もやる。其やり方の巧拙に面白いところがあるので、十年一日の如き落語も未だに廢れない。かういつた風に、芝居も俳優が主になるので、脚本家はどうかすると、俳優の從屬らしい關係をつくる。これはどうも已むを得ぬことで、櫻痴の如きを以てすら、俳優に、もつと適切にいふと見物に、左右せられたことは少でなかつたらしい。小説にも讀者といふ相手はあるが、芝居のやうな束縛はうけない。人は成るべく自由な方に行く。そこで脚本家は少くて小説家は多いといふ、其原因のうちの一つにもなるのであらう。であるから、芝居の立作者といふやうなものになると、どうも制肘せられることが多くて、何だか冷遇せられるやうな氣持もする。西洋でもさうで、人氣役者の型に合ふやうなものを書き下ろしたところで、私はよろしいが妻がやるものがないとか、自分の相手の誰にやらせるものがないとか云ふので、已むを得ずまた書き直すといふやうな事は、自然免がれぬことらしい。それ故脚本家が自分の脚本を思ふやうにや

らせるには、坪内さんのやうに芝居の外に立つことがよさうだ。渦中に這入つてはなかくむづかしからう。

英吉利では、殊に脚本家が少くて小説家が多い。其理由として傳ふる一説によると、ビューリタンの騷動以來、國民一般に眞面目な宗教觀念につれて、芝居といふものは唯一つの娛樂に過ぎぬ、一日をそんな道樂に過ごすよりも公園を散歩した方がよいか會堂に行つた方がよいかいふので、芝居は頓と卑まれてしまひ、従つては脚本家を出すことも少くなつたのだと云ふ。眞偽は知らず、兎もあれ小説家が多くて脚本家は至つて少いといふのは、殊に英吉利の異色である。

時代は素人法を説く時代となつた。獨り宗教の上ばかりでなく、繪畫にも素人の上手が出れば、音樂にも出る。まだ出ないか知らんが、何だか出さうな。それから文學、殊に小説は所謂小説家の手から全く素人の手に移りさうだ。自分杯も素人でやり始めたなら、いつの間にか小説家の部に繰り込まれて、近頃は新進の素人小説家の名が喧しい。蓋し壯士劍を提げて起つの時だらう。

### 僕の水彩畫と書齋

僕の水彩畫か。あれは『猫』を書いて居る頃に勉強したが、この頃では少しも閑がないので、全く御廢しだ。何しろ訪客だ、原稿だ、學校の仕事だといふので、水彩畫なんかやつて居る閑がなくなつたのさ。それにどうも性がよくないといふのだし、自分でも少々呆れ返つたから、廢したよ。だが捨てたものでもないと思つたのは、此間引越しの手傳ひに来てくれた人に自分の畫帖をやつて、それから後に其人の家に رفتて見ると、夫がちゃんと額にして恭しく懸けてあるぢやないか。見ると柳は柳らしく見えるし、家鴨は家鴨に見える。こんな事なら廢めないでもよからうかと、我ながら感心したよ。

四八一



『文章世界』に出た書齋か。あれは元の家のだが、あれで見ると、何だか自分はさも骨董家で、もあるらしい。印材が十個餘りもあつて、夫を連りに愛撫するなんて書いてあるが、僕の印材はこゝにあるこの三つしかないのさ。これも日本派の俳人が彫つてくれたので、印材は支那の友人から貰つたものだ。固より面白いもので嫌ひではないが、愛撫といふ程でもないのさ。

### 天下の篆刻家

ところが面白いのはあの書齋が出てから数日の後であつた。或人の紹介で「天下の篆刻家……堂大我」といふ大變な人が来た。座敷へ通すと、色々の印材や印譜を出して来て、あなたは篆刻を好ませられるさうだがといふ話さ。自分は篆刻のことなどはわからぬが、唯好きは好きだといふと、いや篆刻のことが分るといふ者は其實分らんので、まだ至らないものだ、大我先づ自らわからぬといふ。自分はそんなつもりで言つたのではなかつたのだがと思つてゐると、其人は語を續いで云ふ。凡そ刀を執つて印材に向つたら刀の先で直ちに字を作る積りでなくてはいかぬ。紙に文字を書いて夫を貼り付けて彫るやうでは、提灯屋と選ぶ所はない。そんな篆刻は市中の印判屋がやるといふ氣儘さ。

それから寒山といふ人を知つてゐるかと思つたと、あれは下らぬ男で、姑蘇城外の寒山寺へ行つたといふので、寒山といふ號を拵つたのだが、それは嘘で、そんな嘘をいつても信じる人はないから、寒山の號をやめたらよからうと忠告してやつたが、寒山もこの號は追々にはやめる積りだといふ。自分も大我を號として天地を尊とするものであるが、大我くらゐではいかぬから、無我の境に入らなければならぬと思つて居る。それ故私も大我をやめて無我にしようと思つてゐるといふやうな事で、随分面白い話があつた。それで印刻をやるにも精進潔齋といつた様に、數日身體を養ひ心を養つて充分興に乗つたとき、刀を印材に向け

る。其時は唯一氣にすうとやるのださうな。

僕の書齋の紹介がこんな大袈裟なことになつて、其末が印材は商人なら二十圓といふのだが八圓五十錢にして置くから「仰せつけられい」といふやうな始末さ。いろんな事もやれぬものだよ。——をかしいのは、或雑誌記者が僕に何か話せといふから、子供時代の話をしたら、後で其雑誌に出たのを見ると、とんでもないいなせな御兄いさんになつてゐたのなぞもある。(明治四十年二月「新潮」)



## 余の愛讀書

四八四

僕はあのスチブンスンの文が一番好きである。スチブンスンの文は力があつて簡潔でクドクしい處がなく、女々しい處がない。ハキ／＼して、心持がする。話も餘り長いのがなく、先づ短篇といふてよい。句も短い。殊に晩年の作がよいと思ふ。Master of Ballantraeなどは文章が實に面白い。

スチブンスンは句や文章に非常に苦心をした人である。或人は單に言葉丈に苦心をした處が後に残らぬといふ。さういふ人はどういふ積りか知らぬが、スチブンスンの書いた文句は活きて動いて居る。彼は一字でも氣に入らぬと書かぬ。人のいふことをいふのが嫌ひで、自分が文句をこしらへて書く。だから陳腐な文句がない。其代り餘り奇抜過ぎてわからぬことがある。又彼は字引を引繰り返して古い、人の使はなくなつたフレーズを用ゐる。さうしてその實際の機能がある。スコットの文章などは到底比較にならぬと思ふ。スコットは大きな結構を造るとかいふことにはうまいが、文章に贅澤な人からいへば、だら／＼して讀まれぬ。

あのメレデイスは警句家である。警句といふ意味は短い文章の中に非常に多くの意味を籠めていふことを指したのである。エビグラムなどでは、彼が一番らしい。往々抽象的なアフォリズムが出て来る。非常に意味の多いのを、引き延ばして書かぬから、繋がり具合、承接具合がわからなくなる。のみならず、夫の頭腦のある人でなければよく解らぬ。僕等でもわからぬ所がいくらかもある。メレデイスはたゞ寐ころんで讀むべきものでない。スタデーすべきものと思ふ。必ずしも六づかしい所のみではないが、到底讀みよい本とはいはれぬ。

メレデイスは第一、人の性格をフィロソフィカリーにアナライズすることなどは實にうまい。又次には非常に詩的な所がある。詩的なシチュエーションをつらまへて巧みに描寫することがある。それはメレデイスのユニツクで、メレデイスの前にメレデイスなく、これから後も恐らくメレデイスは出まい。スチブンスンは文だから眞似手が出るかも知れぬが、メレデイスは頭だからあゝいふ頭を以て考へる人が出ない内は、あゝいふ文は書けまいと思ふ。然るにあゝいふ頭の人はない世に出ないものである。丁度或人がマコーレーは澤山出るかも知れぬがカーライルは一人しか出まいといつたやうに、スチブンスンは澤山出るかも知れぬが、メレデイスは一人しか出ないかと思ふ。彼の作の中で Egoist と Vittoria などは最面白い。Lancelotti



## 愛讀せる外國の小説戯曲

四八六

僕は大抵一度讀みつ放しにする丈で二度と繰り返す事は殆どない位だから、何を愛讀するかと聞かれると一寸困る。人に就いて云ふにしても、此人では何處がよい、あの人ではかう云ふ處が旨いと云つた風で、誰が好きだとも云ひ難い。同じやうに思つてゐる人を挙げたり挙げなかつたりすると不公平になる。

勿論愛讀すると云へば近代のもので、何時か僕が十八世紀文學の講義をしたのでアヂソンなどが好きだと云つてゐる人もあるやうだが、アヂソンなどは唯當時のマナーを時代違ひの現代から髣髴して、隔世の覗き眼鏡を香氣に眺められるところに興味が多いので、靴の紐の結び方がどうだとか帽子が馬鹿に高いとか云ふやうな處が僕には面白い計りである。寐轉んで讀むには氣樂でいゝ。汗牛充棟の書物のうちから特に是を抜き出してこれが愛讀書とは勿論云ふ積りはない。

イブセンですか。イブセンは豪い。さあ何處が豪いか明瞭に御話するには讀み盡した上で考を纏めてからなければならぬ。然しマーテルリンクの戯曲論のうちにこんな意味の事がかいてある。——色々な事情（内界外界）の爲めに現今の戯曲と云ふものは詩趣的裝飾を失つた。この缺陷を補ふ爲めに戯曲家は已を得ず人間の意識の奥へ奥へと割り込んで其方面で償をとらなければならぬ。意識の奥へ這入る爲には靈明な意識を捕へて來なければならぬ。ほんやりした、分らず屋の眞暗な意識では十歩割り込んでも百歩割り込んでも依然として暗い許で要領を得ない。イブセンの劇は此點に於て意識の最高點に達したものである。劇は固より動作が主である。如何に意識の内部へ這入り込んでも之が動作に變化しなければ劇にならない。所で意識が動作に變化する状態を觀察して見ると願望と義務の衝突に歸着して仕舞ふ。換言

すれば情熱と徳義との喧嘩に過ぎない。従つて現代の戯曲家は好んで道德問題を捕へて來る。否彼等は悉く甲もしくはこの道德問題を研究して居ると云つても差支ない。此種の劇はヂユマに始つて現代の佛國の劇場の三分の二は矢張此種の劇を演じて居る。他國の劇は固より佛國の反響に過ぎぬ故勿論の事である。然し此種の劇に於て吾人の注意すべき事實はどれもこれも道德問題を取扱ふにも拘はらず其道德の解釋が最初から觀客に分り切つて居る事である。世間の約束でちやんと杓子定規に極まつてゐるもの許である。女が貞操を汚しても許して差支なからうかとか、相愛の結婚の方が金錢の結婚よりも望ましきものであらうかとか、親と雖も子の戀を壓服する事が出来るだらうかとか、云ふ様な明々白々毫も世間の習慣から見て解釋に苦しまない問題のみである。だから劇中の所謂義務は平凡なる常人の意識内に起る義務である。劇中の所謂願望も亦平凡なる常人の意識内に起る願望である。従つて意識の奥へ進み度でも、底迄行き度でも、どうする事も出來るのである。そこをハウプトマンやビョルンソンや（ことに）イブセンは構はず切り込んで先へ進んだのである。然し先へ進む爲には俗以上に明らかな意識を具へて居る人物を作らなければならぬ。ほんやりしたどろんけんな意識の所有者では如何に身分が高くても、幅利きでも、評判のいゝ男でも、尊敬される金持でも世間に通用する丈で舞臺には通用しない。意識の最高度をあらはす劇には無用の長物である。古代劇の詩趣的裝飾を失つた埋合せをする劇の主人公としては三文の價値もない。だからイブセン杯はそれを避けて意識の尤も明かに進んだ人物を描いたのである。然しながら理論的に考へて見ると眞個開明の極致に達した意識といふものは普通のものよりも遙かに平穩で、忍耐に富んで、抽象的で、概括的でなければならぬ。又義務の方から云つても其通りである。普通の昏昧な意識中にある義務は時としては謬見である。偏解である。虚偽である。約束である。かの俗界に云ふところの名譽なり、復讐なり、自重なり、虚榮なり、信心なり、悉く流俗の見とめて争ふべからざる義務の根源と心得るもの

四八七



で、悉く義務とするに足らぬものである。己靈の光輝に遍照の利益を享けたる超凡の人より見れば正しく義務とするに足らぬ義務である。にも拘らず普通の劇なるものは此義務とするに足らぬ義務を中心として成立してゐるのである。そこで再びイブセンに立ち歸つて考へて見ると彼は其劇に於て吾人を人間意識の甚深の急所迄連れ込んで行く男である。たゞ劇には一道の怪談があつて、終始吾人をつけ纏つて居る。従つてイブセンの劇に於ても吾人が彼と共に最高なる人間の意識を承當すると共に、かれの悲劇の運命を支配する義務が此高邁英靈なる意識の内部より起らずして却つて外方に存するが爲めにやゝともすると不適合なる自覺もしくは暗鬱たる風狂と化したるのを悲しむのである。——マーテルリンクの説は大變面白い。イブセンの書いた人間が一拍子變つてゐるのは全く是が爲で、ドンキホーテやピクウイックに出てくる人間が一拍子變つてゐるのはとは主意が違ふのである。又レミゼラブルの主人公が群を離れて變つてゐるのも自ら其主意が違ふのである。つまり普通以上の自覺のある人間を描き出して、其自覺を動作にあらはさうと云ふのが彼の目的なのである。従つて彼の道德問題に關する解決は常人の解決と違つてくる。途方もない解釋をする。イブセンは此方法で吾人に約束的な解決以上に道德問題の解釋の方法があると云ふ教訓を與へると同時に、此約束的以上の解釋で現代の劇に不足してゐる詩趣的裝飾を償つたのである。其代り彼のかいた人間は一寸面喰ふ様な無鐵砲ものが多い。考へると馬鹿氣た氣狂染みた人間が雜作なく平氣で出てくる。殆んど應接に違なき位出頭没頭するから驚ろいて仕舞ふ。それが普通の身分のものである。三度の飯はそれ相應に食つてゐる。活潑々地に働いてゐる。にくらしい程健全である。隣りの八さんや向ふの熊さんと同じ人間である。只どこか一方が底が抜けてゐる。此底抜趣味の爲めに一篇の劇が成立する。それが彼の慣用手段である。早い話がヘツダ・ガブラなんて女は日本に到底居やしない。日本は愚か、イブセンの生れた所にだつてゐる氣づかひはない。それだからイブセン劇になるのである。只こんな底拔を

つらまへて來てさも生きて居る様に、隣りに住んでゐる様に、自分と交際して居る様にかくのがイブセンの藝術家たる所、一大巨匠たる所以である。藝術家と云へばイブセンの劇の構造に就ても云ひ度なるが、あまり長くなるから、たゞ氣のついた二三ヶ條のうち一つを話すと、イブセンの劇のあるものを見ると正に展開し又展開せざる可からずとの豫期を讀者に與へながら、其事件がそれぎり御流れになつて仕舞ふ事がある。例へばマスター・ビルダーの内の序幕に出てくる女の書記と大工との關係は、どうしても、これから先があるなと讀者から發展を待ち設けられても一言もないかき方だ（他の理由も認められるけれども）。所が中途から一種奇妙不思議な女が飛び出して來て、大工と女書記との關係は仕舞迄ちつとも動いて居ない。序幕を忘れて居れば夫迄だが暗に期待しつゝ、讀んで行くと何だか物足らない。蒔いた種が何時迄立つても芽の出ない様な氣がする。此外にも例を挙げればまだあるが、こんな所は外の人には氣にかゝらないかも知れない。たゞ余にはどうも何だか難有くない。尤も近來はハウプトマンの織子杯と云つて丸で個人としての主人公の存在しない劇が出てくる位だから、此位な事は何でもないかも知れない。シエクスピヤの構造も研究したら色々非難が出るだらうが、結末が纏まつてゐると云ふ點は慥である。其代り何だか不自然に纏めた感じが起らないとも云へない。批評家の研究に價する問題だらうと思ふが、長くなるから此位にして置かう。

英國のものですか。ピチロダの、ジョーンスだの、シヨール杯のものを少し讀んで見たが、セコンド・ミセス・タンカレーが一番面白かつた様に記憶してゐる。近頃面白く感じたのはズーデルマンのアンダイイング・バストで、あの中のでエリシタスと云ふ女の性格と其敘方にはひどく感心した。あんな性格が生涯に一度でも書けたらよからうと思ふ。（明治四十一年一月『趣味』）

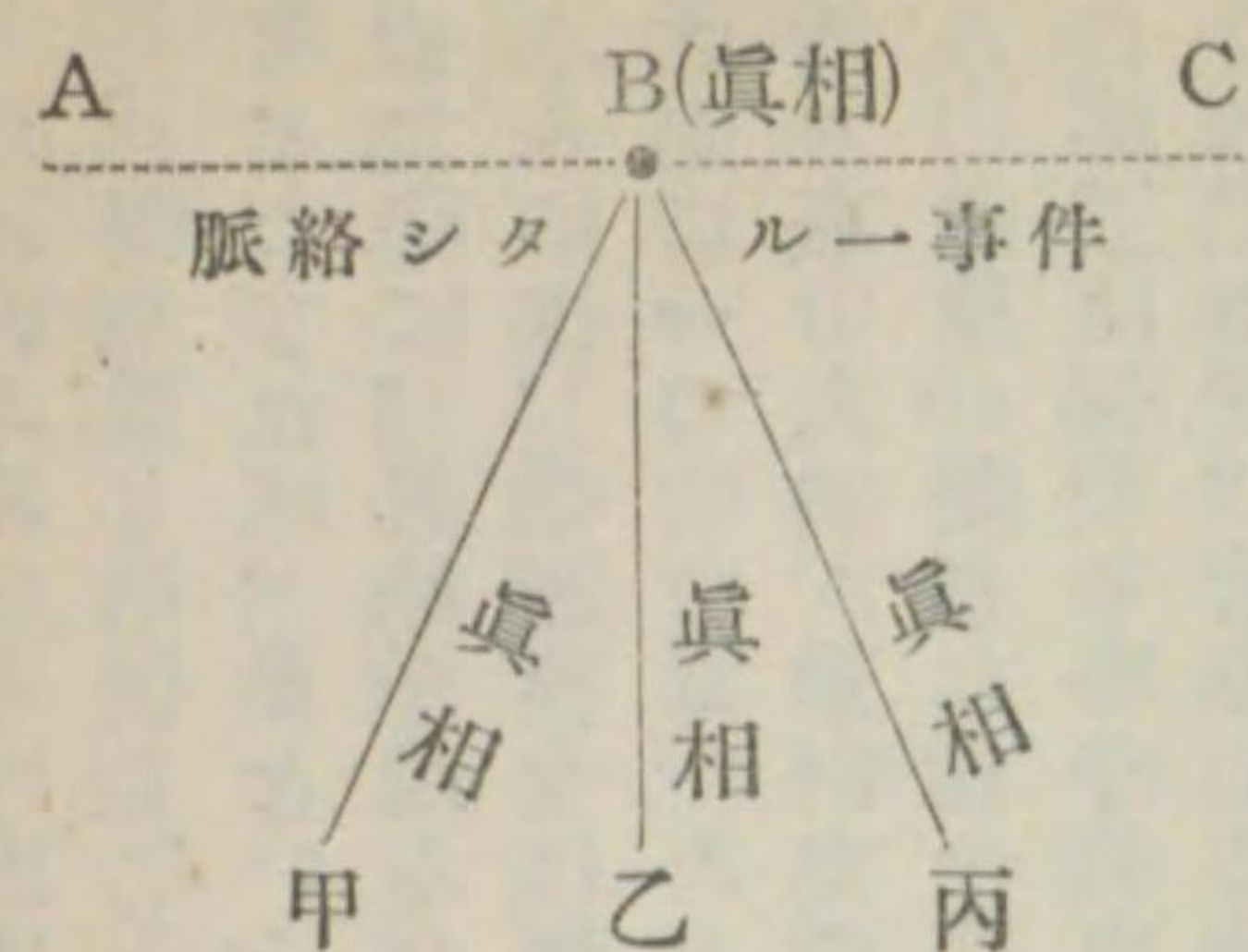


## 坑夫の作意と自然派傳奇派の交渉

四九〇

『坑夫』の謂れはかうである。——或日私の所へ一人の若い男がヒョククリやつて来て、自分の身の上にかういふ材料があるが小説に書いて下さらんか、其報酬を頂いて實は信州へ行きたいのですと云ふ。今は私の家に居るが、其時は一向見知らぬ人だったので、夫に上田敏君が暇乞に来てごたく／＼してゐた時だから、私も話を聴いてる暇が無い。で、財布から幾らか摺み出して、是で行けるかと訊くと、行けますと云ふ。今夜はまだ立たぬかと云ふと、居りますとの答。ぢや今夜兎も角も来て其材料といふ奴を話して呉れと一旦歸してやつた。あゝは云ふものゝ、何の、騙かなんかなら来やしまいと思つてると、正直に其夜やつて来た。そして三時間ばかり話を聞かせた。それは新聞に書いたのと違つて、主に坑夫になる前の話だつたが、私は個人の事情は書き度くない。向うの云つた通りに書けば好いけれども、小説にするにはどうしても話を變化させなきやならん。すると其人が氣の毒の有様になるから、成べくは書き度くない。それで聴いて了つてから、私は、こりや信州へ行つてから君自身で書きちやどうか、出来たものが面白かつたら、雑誌へ載せる丈の盡力はしてやるから、と勧めると、ぢやさうしませうと云つて歸つて行つた。所が其後信州へも行かなければ、書きもせん様子。さうかうする内に朝日新聞に小説が切れて、島崎君のが出るまで、私が合ひの楔に書かなきやならん事になつた。早速憶ひだしたのは例の話で、本人に、坑夫の生活の所だけを材料に貰ひたいが差支へあるまいかと念を押すと、一向差支無いと云ふ許しを得たから、そこで初めて書き出したのが『坑夫』なのである。最初の考へぢや三十回位で終る積りなのが、とう／＼長くなつて九十餘回に上つて了つた。

あれに出て居る坑夫は、無論私が好い加減に作つた想像のものである。坑夫の年齢は十九歳だが、十九の人としちや受取れぬ事が書いてある。だから現實の事件は濟んで、それを後から回顧し、何年か前のことを記憶して書いて居る體となつてゐる。従つてまあ昔話と云つた書方だから、其時其人が書いたやうに敘述するよりも、どうしても感じが乗らぬわけである。それはある意味から云へば、文學の價値は下る。其代り（自分を辯護するんぢやないが）昔の事を回顧してると公平に書ける。それから昔の事を批評しながら書ける。善い所も悪い所も同じやうな眼を以て見て書ける。一方ぢや熱が醒めてる代りに、一方ぢや、さあ何と云つて好いか——遠い感じがする。當りが遠い。所謂センチシヨナルの烈しい角を取ることが出来る。これは然しある人々には氣に入らんだらう。



も一つは、あの書方で行くと、ある仕事をやる動機とか、所作などの解剖がよく出来る。元來この動機モチの解剖といふ奴は非常に複雑で、我々の氣付かん事が多くある。これを眞に事實として寫せば極く／＼煩瑣なものであつて殆ど書き現はせない。よし現はせても煩に堪へぬ不得要領のものとなつて了ふ。面白くない所爲かも知らんが、ある意味から云へば、かゝる方面の事は餘り多くの人がやつて居らんのを、私は却つて夫が書いて見たい——細かくやつて見度い。といふ念があるから、事件の進行に興味を持つよりも、事件其物の真相を露出する。甲なる事と、乙なる事と、丙なる事とが寄つて、かうなつたと云ふ風な所に主として興味を持つて書く。——詳しく云へば、原因もあり結果もあつて脈絡貫通した一個の事件があるとする。然るに私はその原因や結果は餘り考へない。事件中の一個の真相、例へばBならBに抵徊した趣味を感じる。従つて書方

四九一



も、Bといふ真相の原因結果は顧慮せずに、甲、乙、丙の三真相が寄つてBを成してゐる、夫が面白いと書く。即ち同じ低徊してゐても、分解的に出来てゐる所が多い。此書方はある人には趣味が無いだらう。もし有るとすれば、Bといふ真相は、いかなるものが寄つて出来たかと説明して智力上の好奇心を満足せしめた時に、興味が生ずる。處が説明を聞いても、そんなことは面白くないとか、自分には逆も解らんと云ふ人には、毛頭興味は起らん理窟なのである。

此處に一つの行爲がある。例へば活人畫を見物するとする。と、その見方に三つの趣味がある。願はくは活人畫の人物が動かすに、長くあの好ましい姿勢を取つて、呉れ、ばい、と希望する趣味が一つ。第二はあの状態が變じたら今度は如何なるんだらうといふ事を考へるんで、これは事件の筋を悦ぶ人である。また第三は何でも事件の内幕に興味を持つ。即ち活人畫を見せるに至るまでの成立、事情を知らうとするのである。私の先に云つた書方はこの第三に屬するので、つまりコンポジションをやつた要素を知る所が面白い。『坑夫』の書振は第三のつもりである。智力上の好奇心のない人は、これを餘り面白がらん。だからかういふ人の眼から見れば、活動が鈍くてたゞ徒に長たらしく、同じ處に何遍も低徊するものと思はれるだらう。然しこんな書方は私の主義ではない。ある時、ある場合にやつて見たくなる事があるばかりである。

いや、誤解といふ事は世の中にあるもんで、この頃自然派の議論が益熾んとなるにつれて、私は到底その派とは相容れないもの、やうに目されて了つた。一體今の自然派はロマンチズムを攻撃するんでなく、積極的に自派の主義を主張してゐる。もうロマンチズム對自然主義ぢやない。絶對的に自然主義萬能論となつて、其餘のものは一顧の價値もなく擯斥されてゐる。自然主義の議論も色々出た。解釋もさまざまある。私も一々見たんではないが、見た限りぢや、何れも面白い。所で、世間では、私を自然派と目

して居らん。自然主義を主張する人は、間接に私を攻撃して居る様に外面上見える。この意味から云へば、私は夙に辯じて居なければならぬのである。けれども今迄何にも云はない。云へなだかも知らんが、まあ云はなだかである。何となれば私は自然派が嫌ひぢやない。その派の小説も面白いと思ふ。私の作物は自然派の小説と或意味ぢや違ふかも知らんが、さればとて自然派攻撃をやる必要は少しも認めん。誰が書いても出来損ひは悪く、善い物は善いに極つてゐるんだから、そこで殊更に何といふ意見も發表しなかつたのである。

然し自然派の人々は、我々の書くものでは悪くつて、自分たちの作物でなければ文學でないかの如くいふのである。かうなつて來ると、自然派の立場と私の夫との比較研究が多少必要となつて來る。第一に自然派とは何ぞや、歴史的に如何なる價値ありて、如何に發展せしものぞ。第二に自然派は日本に渡つてその小説に如何に現はれしか等を研究しなくてはならぬ。けれども自然主義は誰にもむづかしいと見えて、自然主義とは何ぞやと問うても、大抵の者は明瞭に答へられん。然し朦朧とは解つてゐる。が、たゞ纏められん。色々の作物を讀んで比較を試み、その共通の要素を抜き出して、自然主義は斯く／＼のものだと云ふ事もやり悪い。それは複雑で解剖が出来んからだらう。も一つには、自然主義の意味が始終ぐらつてゐるんぢやなからうか。

だから歴史的研究は先づ止めて、心理的の、物の見方の研究などから入ると、やり易くはないか、その極單純な最初の經驗から出立して、次第に複雑になる所を調べてみれば面白くはあるまいか、と私は考へた。で、元より杜撰な、不完全なものぢやあるが、纏められるだけ纏めて見た。すると其結果は、無論歴史上の自然派とか何派とかいふものはなくなつて來る。が、たゞ其名に結び付けて考へてみると、ロマンチズムとナチュラリズムとは對立してゐると云ふ興味のある一種の現象が出て來る。古典主義もこの兩



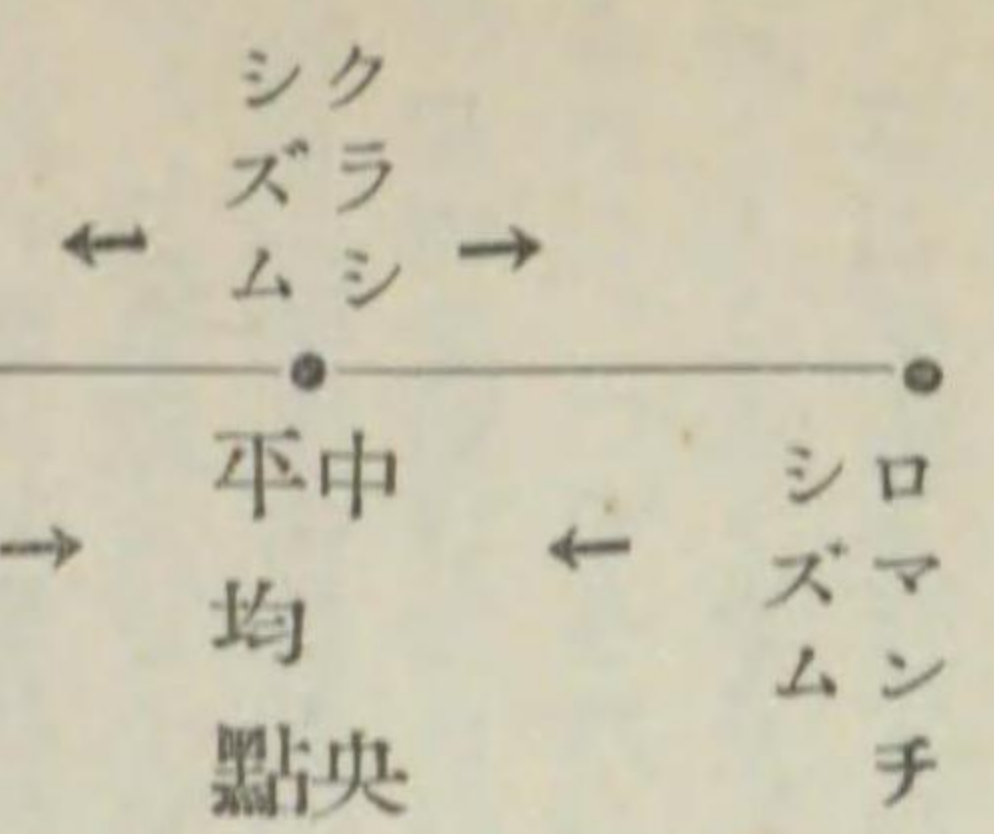
者の中間に入れて這入らん事もないが、古典主義は世間でも殆ど何とも云はんから、今度はその名前さへ出さなかつた（今月のホト、ギスへ載つて『創作家の態度』が此研究の發表である）。そこでかゝる研究——と云ふのも實は大袈裟だが、こんな風に出立したのに據つてみると、ロマンチズムと自然主義とは、世の中で考へて居る様に相反して居るものではない。相對して一所になれんといふものではなくて、却つて一つの筋がズート進行して居るやうなものである。その筋の兩極端に二主義を置くと、丁度中央の部では半々に交はるところが出来てくる。或は三分の一と三分の二とで交はつて居る所もある。或は五分の一と五分の四とで交はつて居るところもある。即ちグラデーションをなして居る形となる。光線をスペクトラムで分解すると七色に分かれるが、一色と一色との間は劃然と別れて居るに、混つて居る。丁度そんな事實を認めたのである。

すると今迄の人々が考へて居たよりも、兩主義を少し接近させて比較することが出来るやうになつた。どちらにか片付けなければならんといふ考へが薄らいで來た。これは一つの參考になる價値はないだらうか。

も一つは、こんな階段で進行するものは、歴史的には如何に動いて其間を往來してゐるか、問題となる。如何なる社會的狀態の時にはロマンチズムに片寄り如何なる時には自然主義に傾くかと云ふことが、興味のある問題となつて來る。この點で私の達した結論では、對生に來る——互違ひに來るのが順當の状態ではなからうかと思ふ。けれどもかう云ふと、ある時機の文學は必ず自然主義で、ある時機のは必ずロマンチズムに取られるかも知らんが、このところは細かく云ふと、人が見てそれほど明瞭には解らん事もあるだらう。

さて一つは、兩主義を何方かに片付けなければならんといふ必要はないんだから、従つて何方かの澤

山混つたものが出來て來る。よつて互違ひに來るといふ趨勢は、理論的な大ざつばの議論に過ぎないことは明白である。そしてこの二つの傾向が、ある所で平衡を得る場合には、調和を示す——ある時機には對立しなくて、能く交ることがある。古典主義とは歴史的に起つた名前だから、やはり歴史的に定義を



下さんければならんが、今のやうな研究から出立して、何の邊にクラシシズムがあるかと云へば、今の平衡を得た中央にある。此處を取り上げて見たならば、丁度歴史上のクラシシズムに相當するやうな所が出て來るんぢやないか。けれども此平均點は僅かの度合で破壊される。すると一方例へば自然主義の方が勝つ。勝つた勢ひで極端にすつとロマンチズムの方へ行つてまた戻つて來る。來て以前前の點を通過し、尙ズン／＼反對の方向へ向つて馳せてゆく。圖にすると斯うである。

で、一寸見ると同じ事を繰り返すやうに思はれるが、事實上、繰り返してゐるのは傾向だけで、同じ文學を繰り返す事は決して出來ない。またない筈である。だから同じロマンチズムでも、五十年前のと今日のとでは、當然違はなければならん。自然主義もさうである。もし古典派も存在するとすれば、同じく然りである。では、傾向だけ繰り返して文學そのものは何故繰り返さんかと云ふに、そりや切れ切つた話で、例へば前の圖解で、ロマンチズムが勝つたとする。と、其勢ひで自然主義の方へ押し寄せて來るが、極端までゆくと復元へ戻る。其戻つたのは同じロマンチズムでも、最初のそれとは違つて居る。何となれば一旦自然主義の領分を通つて、その材料を含有して歸つて來たからである。

先づ私は大體以上のやうな結論に到着したから、些か發表して置いた。これによつて、自然主義とロマ



ンチシズムとは氷炭相容れざるものと云ふ思想を打破する事は出来るだらう。それから、紛らばしい自然主義とかロマンチシズムとかの名に束縛されて、それに拘泥する弊が幾分かは除かれるかとも思ふのである。(明治四十一年四月『文章世界』)

### 近作小説二三に就いて

私は平素多忙であるために、諸方から寄贈される雑誌や小説を悉く讀むわけにいかない。近頃は小説を書く人も多くなり、従つて小説の数も殖えて面白いものも出るやうであるが、私は自分で小説を書いて居る内は、つひそれに追はれて外の人達の物を見るわけにゆかず。また自分の方が小説を書き終へると、外の書物を讀むために、折角贈つて貰つた月々の雑誌や小説を見落とすことが多いのである。が、丁度この四月は春季の雑誌の臨時増刊の物や其他に出た各雑誌の物も奮發して讀んで見た。尤も無論悉くは讀まぬで、私が讀んだ十ばかりの物は何れも面白かつた。例之、小栗風葉君の『ぐうたら女』、田山花袋君の『祖父母』、徳田秋聲君の『二老婆』、(以上は中央公論)、早稲田文學に出て居た眞山青果君の『家鴨飼』、其他まだあつたが、とりくに面白かつた。で、何れも面白くは讀んだが、其面白く讀んだ間に、今までは氣が付かなかつたが、考へた譯でもなく、唯不圖かういふ事が浮んだのである。それは讀んだ小説の殆ど悉くが、涙を出す物が一つもないといふ事である。尤も花袋君の『祖父母』には少し其方の傾向があつたかも知れないけれども、外には一つもなかつた。それで居て大抵は陰鬱なものである。無論面白くは讀んだのだけれども、何かかう壓迫を感じたやうな氣がする——讀んで愉快といふのでなく旨いといふ意味で——唯何となく陰鬱な調子が大多數を貫いて居る。何れもが申し合はせたやうに此調子で書いて居る。これは勿論合議の上ではあるまい。偶然の暗合であらう。然し暗合でも、單に御圖を抽いて二人が同じに當たつたのとは違つて、自ら作家に一種の傾向が胸の中にあるのが期せずして同じやうに現はれたのだらう。それは四月に見た物に就いていふのだが、恐らく近來——現時我邦に於ける小説はさういふ



傾向のものが多くはないかと、かういふ事に気が付いた。で、作家諸君は無論、自分は如何いふ物を書いて居つて如何いふ調子を出さうといふ事は、心得て居られるに相違はない。然し讀者がそれに對して泣くか泣かないかといふ事は、其念頭にさへなかつたのではないかと思ふ。泣かせてやらうといふ考へは無論ない。さればといつて泣かせるやうなものは書くまいといふ決心も普通ない話であるから、要するに泣き得ないものであるといふ事は、作り上げて気が付いたのではあるまいか。何故私は泣くとか泣かぬとかいふかと云ふに、是等の作物の大部分のシチュエーションからいふと、泣き得べき條件を具へて居る様に思ふ。例之、首を縊つて死ぬとか、或は老爺さんが家財道具も何もない一軒の荒屋から追ひ出されるといふ事、其他にも之に類した事は種々あるが、それらの所作を読んで氣の毒とか可哀相とかいふ心は一寸も起らぬ。一步進めていへば泣き得ない。それは何故だらうか。詰り悲劇の條件を具へて居ながら悲劇のやうに涙を溢す事が出来ないのは、考へて見ると其篇中の人間が、極く狭い意味に於ての現代精神を發揮して居るからである。茲にいふ狭い意味の現代精神といふのは、自我發展の傾向を云ふのである。即ち他に對する道徳でなく、自己に對する道徳の勝つたもの、換言すれば人に對する道徳が殆ど眼中に無いものを描いたのが多い。もう一つ言ひ直すと、寫された人間が何等の犠牲を拂つて居ない。社會の爲にも、親の爲にも、他の爲にも、まづまあ自己の損失を敢てする點が無い。有るかも知れぬが作には見當らぬ。夫故、窮するとか、困るとか、苦しむとかいふのが、他の爲に窮したり、困つたり、苦しんだりするのはなく、たとひ首を縊つて死んでも、まあ義理人情で死ぬのではなく、世の中の壓迫で仕方なく死ぬとか、社會的情況の變化に伴れて自我を發展仕損なつて死ぬ。初めから自我を縮少しようといふ念は少しも見えない。要するに一毫の犠牲だも他に對して拂はぬ。元來氣の毒だとか同情の念に耐へぬとかいふのは、或意味に於て自分が損害を受けて居らねばならぬのと、及び其損害の受け方が他の道義心を満足させて居なくては

ならぬ。さうでなければ、幾ら腹を切つても、幾ら困却しても、首を縊つても、唯厭な心持になるばかりである。斷つて置くが、かう言つたからとて作物が拙いといふのではない。沈鬱な調子にはなるのだけれども、可哀相な極、泣くといふわけにはいかぬといふのである。

前に挙げた作物のある物や、このあひだ中出た國木田獨歩君の『竹の木戸』などもさうである。植木屋の女房が首を縊つて死ぬ。其死ぬのを讀んで見ると、世の中が悲惨なものだといふ感じは起るが、それが爲め可哀相だといふ感じは起らない。

そこで此泣かせるといふ事は、敢て上等な作物なら必ずなければならぬといふ譯ではない。前に挙げた作物でも、泣かぬ——泣けぬといふものでも、然も立派な作物である。泣く泣かぬで其優劣を判するのではないが、何んな作物は泣き得ないかと考へると、要するに情操の伴はない困窮、讀者からいへば情操を満足せしめない作中の人物の窮迫は、泣き得ないのは明かである。で例之、イブセンの物は——總體は見えないが——まあ泣けない物が多い。情死をしたり怖るべき境遇に陥つたりしたもので、まづ涙は流さずに讀む。イブセンは一種の哲學者である。哲學者といつても何もカントやヘーゲルを研究はしないが、社會制度に就いての上の哲學者、例之、夫婦の關係とか、個人の自由は此點まで行かねばならぬとか、約束的道徳は打破して宜いとかいふ事に就いて、考へを持つて居る。其考へが骨子になつて戯曲が出来て居る。或解釋からいへば、彼の作は其社會的哲學の具體的表現に過ぎない。而して其哲理には中々意味がある。また尤である。或は流俗より一步も二歩も先に出て居るともいへる。然し其哲理が情操化されて居らない。従つて此哲理に由つて行動する人物が躍然として出て、尤だとは思はれても、行動が無理はない位まで行けても、新しい位迄は感心されても、急に故い世界から組織の異つた世の中へ出た様な氣持がしても、——どうも泣けない。其泣けないのは、篇中の人物の實行する主義道徳が未だ一般に情操化されて居らな



いからである。尤も或意味では社會的にいつて合理的であるかも知れない。然し合理が合理に止まつて、一種のセンチメントが附け加はつて來ぬ。全體道德には思想上の道德と情操化された道德と二つある。思想上の道德といふのは、今の世の中はかういふ弊があるから、かう改むべきものだと思ふ者が考へた結果、案出した道德である。それは結構なものには違ひない。然しそれは理論で説明されて尤だと思ひ、或は戯曲で具體化されて成程と思ふまでで、或學者の所謂美的價値は無い。價を有して居ない。美的價値は情操化されて、其發現を見ると思索の暇なく、直覺的に評價し得るものである。然るにイブセンの篇中の人物の實踐の道德はそこまで行かぬ。習慣に背いたのが多い。一般からいへば、習慣に従つた道德に情操が附着して居るのだから、イブセンの新道德には情操が憑つて居らないのが多い。それだから泣けない。そこで前に擧げた小説——我邦現代の小説の傾向は、イブセンの戯曲のやうに、或哲理を骨子として成つたものとも見えないのが多い。然し作者にイブセンの如き考へがないにしても、換言すれば作者が意識して居らない迄も、篇中の人物が人物相應の道德——哲學を實踐する。(尤も其哲學が植木屋の女房や長屋の母親が發揮したりする哲學だから、哲學と云ふ名をつけるのは勿體ないが)。けれども其動機が、吾人の情操を満足せしむる意味が渺い。其點に於てはイブセンの書いた人物と同じであるから、何故泣けないかといふ事は、前に哲理を具體化したイブセンに就いて云つた言葉で、充分説明が出来ると思ふ。

前にいふた通り、作物は必ず泣かなければならぬものではないから、旨く出来、面白く讀めさへすれば、それで宜いのである。が然し、讀む物も同じ傾向であつた爲に何だか物足りない感じがした。物足りないといふのは何となく壓迫を感じたといふ事で、即ち情操の満足を少しも得られなかつたと云ふ事である。で、其時思つたのは、成程人間は時々泣かずに居なくては居られないものだといふ事で、それは時時鰻飯や天麩羅が食ひたくなる意味に於て、人間は泣きたくなるものだ。泣いて情操の満足を求めたがる

のだらう。泣くといふと苦しいやうに聞えるが、かういふ場合の涙は情操を満足した記號に過ぎないのだから、要するに一種の快感の符徴である。煎じ詰めれば、吾々は作物を讀んで快感を欲しいといふ意味になる。而して其快感は、笑ふ快感や美しいといふ快感や勇しいといふ快感と並んで、時々吾々の胸に來て涙を誘ふものがなければ苦痛を感じる時もあるのだらうと思はれる。一時日本の文學が無暗に情操を發揮するので、泣かないでも濟むものに泣いて、やれ董が咲いたといつては泣いて見たり、星が出たといつては泣いて見たりした、寔に廉い涙の時代もあつたが、これには辟易するとして、今日は其反動で斯ういふ文學が出来たといはぬが、然し一部分は其反動と見てもよろしからう。だから、これで別に不都合はない。が、出るものも見るものも悉皆さうであつたら、矢張笑ひたくなつたり、泣きたくなつたりする讀者も出来るだらうし、作家自身も、自らそちらの方に氣が向いて來るだらうと思ふ。

道德といふものは畢竟時世に伴はねばならぬ。だから社會の情況に應じて、思索の道德を情操の道德に變化する必要がある。特に今日のやうな過渡時代には其必要がある。で、徒に情操が附着して居るからといつて、古い道德を擔いで居る譯にはいかぬ。また擔いで居る内には社會制度の變化で情操が磨り減つて形式ばかりが残る。夫故何の益にも立たぬと同時に、茲に偉い人が在つて、今の社會制度に應じて未來の道德を思索的に打ち建てにしても、それが情操を具へて居らなければ、矢張十分の効果を文學の上に收める事はむづかしい。最宜く收めた極度は、イブセンに於てこれを見得る。然もイブセンには泣き得べき情況を具備しながら泣き得ざる底の戯曲が多いのである。従つてイブセンはそれだけ損をして居る。彼は社會の改革者(イブセン自身に思ふ)としての主張を貫徹する爲に、彼の作物の文學的の効果を減ずる事を敢てして居るといつてもよろしい。(明治四十一年六月『新小説』)



## 獨歩氏の作品

五〇二

余は個人として國木田獨歩氏を知らぬ。西洋から歸つて六年になるが、歸つた當時は、殆ど日本の文壇の様子を知らなかつた。どんなものが流行つて居るのか、何人の作物が歓迎されて居るのか、雜誌などの種類でも、どれが文藝雜誌で、どれが商業雜誌だか、さうした事は全く知らなかつたのである。其内に、家に来る若い學生などの話に聞いて、少しは文壇の消息が分るやうになつた。然し獨歩氏に就いては知らなかつたのである。古く、新體詩なんかを書いて居た當時、獨歩氏の姓名だけは知つて居たが、小説家としての獨歩氏は全く知らなかつたのである。

所が、或日理學博士の寺田寅彦氏が來て、『獨歩集』を讀んだかと云ふ。一向知らないと言ふと、大變面白く非讀んで御覽なさいと云ふ。寺田寅彦氏の『獨歩集』が面白いと云つた意味は、其頃流行の小説と違つて居て、新しく面白いと云ふのである。確か幸田露伴氏の『天うつ浪』と相前後して出た時だと記憶して居る。兎に角、寺田氏は非常に褒めて居た。世間では斯う云ふ小説を何故黙つて居るであらうか、今少し褒めなければならぬ筈だと、頻りに残念がつて居た。で、それは余も見たいものだ、早速本屋に行つたが無。寺田氏に借りようと思つたが、生憎寺田氏も人に貸した儘になつて、手元になかつたので、それなり『獨歩集』は讀まずに了つた。其後雜誌に出たのを時々讀んで居る内に、第二獨歩集と云つたやうな『運命』が出たので、早速讀んで見た。然し其『運命』も全部讀んだのではない、其中の三四篇しか讀んで居らぬ。で、余の獨歩氏に於ける智識は、『運命』に於ける一部分と、其他諸雜誌に散見したものをほんの少し讀んだに過ぎないので、余の獨歩氏の作物に對する智識と云ふものは極めて淺い。で、

他の獨歩氏の作物を全部遺漏なく讀んだ人や、又、幾度でも繰り返して讀んだ人々のやうな、批評の出来る譯もない。それに讀んでから時日も経つし、又讀む時にも、今日あるを豫期して讀んだ譯でもないから、何うも記憶が極めて茫漠として居る。讀んだ當座未だ印象の新しい時にした處が、面白いと感じた所でも、批評するとなると、其面白いと云ふ感じを言ひ現はす爲に、無理に言葉を工夫して、實際自分の面白と感じた其感じとは、かけ離れた言葉を使用して、批評は虚偽になり易いものである。況して、漫然讀んだ作物の古い記憶を喚び起して云ふのだから、とても完全な批評など、云ふ事を期することは出来ない。で、其事は豫め斷つて置かねばならぬ。

『運命論者』は面白いと思つて讀んだ。實際面白いと云ふ感じがあつた。然し、其面白いと云ふ感じは愉快と云ふ感じではない。只、奇であつたのだ。あの作物が自然派の作物であるかどうか余は知らぬが、『運命論者』を讀んで得た感じは、丁度スチヴンソンを讀んで得た感じに近い。スチヴンソン、プラス或物の面白いと云ふのは、只、奇で面白いのである。スチヴンソンの書いた作物は突飛である。然し、『運命論者』の作者は、此作物を、只、奇で書いたものではない。千人中只一人あるかないかと云ふやうな、最珍らしい事件を借り、其事件に依つて人生の或物を言ひ現はさうとしたので、スチヴンソンの作物とは、其趣が大變違つて來る。然し、私の今面白いと云つた意味は、スチヴンソン、プラス、エツキスの方を云ふのではない。此『運命論者』の中に現はれた所のシチュエーション、即ち主人公の境遇及び所爲に、ロマンチック・エーアを帯びて居る其事が面白いと云つたのである。それはエツキスの方にも面白い所があるにはあるが、余は世間で云ふ程、大なる價値を認めて居ない。寧ろ此『運命論者』の中のプラス、エツキスに就いては、餘り感服することが出来ないのである。

次に今余の記憶に残つて明らかなるは、『巡查』だけである。『巡查』は只巡查なる一人の人間を描き出

五〇三



したもので、其巡査が好く出て居る。此篇の面白味は、丁度チエホフか誰かの書いたもので『爺』と云ふものがある。其『爺』の面白味が『巡査』のやうな、あゝした面白味である。巡査なら巡査、爺なら爺を現はしたのは、巡査がどうしたと云ふ事を書いたものではない。爺がどうしたと云ふ事を書いたものではない。只巡査なる人はかう云ふ人であつた、爺なる人はかう云ふ人であつたと云ふ事を書いたに過ぎぬ。其所が面白いのである。巡査なら巡査に就いての觀察を書いたものだからして、前の『運命論者』とは其面白味が違ふ。余の言葉で云ふと、かう云ふものを低徊趣味と云ふ。巡査がどうして、それから斯うしたと云ふやうに、原因結果を書いたものではない。其巡査が明日はどうなつても、明日のことは構はない。只、巡査其者に低徊して居れば好いのである。小さんが醉漢の話をする。聽者は其醉漢の話をも只楽しんで居れば好いのである。其醉漢が明日の朝になつて何うしたとか、かうしたとか云ふことを聞く必要はない。聞かなくても、醉漢其者の所作行爲に楽しむことが出来る。即ち、筋とか結構とか云ふものが面白いのではなくて、一醉漢なるものに低徊して、其醉漢の醉態を見る其事に興味があり、面白味があるのである。それを余は低徊趣味と云ふ。普通の小説は筋とか結構とかで讀ませる。即ち、其次はどうしたとか、かうなつたとか云ふ事に興味を持ち、面白味を持つて讀んで行くのである。然し、低徊趣味の小説には、筋、結構はない。或一人の人の所作行動を見て居れば好いのである。『巡査』は、巡査の運命とか何とか云ふものを書いたのではない。或一人の巡査を捉へて其巡査の動作行動を描き、巡査なる人はかう云ふ人であつたと云ふ、其所が面白い。即ち低徊趣味なる意味に於て、『巡査』を面白く讀んだのである。

余は高濱虚子氏に其話をしたことがある。所が虚子氏は『巡査』は嫌ひだと云ふ。面白くないと云ふ。あの敘述が自然でない、どうも拵へたものゝやうに思ふ、不自然であると云ふ。然し、私の讀んだ時には、別にそんな感じはしなかつた。

『酒中日記』は、人は褒めて居たやうだが、私は餘り感服しない。一口に忌憚なく云つて了へば、要するに不自然な所が多いやうに思はれる。では何所が不自然なのかと問はれ、ば、一々本を繰つて御話しなればならぬが、不自然な所が多い爲に、讀みながら感興が乗らなかつたやうに思ふ。

『竹の木戸』は悪いとは思はぬ。然し、あれが近來出る他の人々の短篇を抽んで、面白いとは思はぬ。殊に獨歩氏の爲に、褒める程のものではない。非難を云ふと、あのお源とか云ふ女が、終りに首をくゝるのは不自然だと思ふ。却つて殺さない方が自然である。若し殺すなら、今少し緊張さして殺した方がよからう。(明治四十一年七月『國木田獨歩』)



## 私の處女作

五〇六

私の處女作——と言へば先づ『猫』だらうが、別に追懐する程のこともないやうだ。たゞ偶然あゝいふものが出来たので、私がさういふ時機に達して居たといふまでである。

といふのが、もとゞ私には何をしなければならぬといふことがなかつた。勿論生きて居るから何かしなければならぬ。する以上は、自己の存在を確實にし、此處に個人があるといふことを他にも知らせねばならぬ位の丁見は、常人と同じ様に持つてゐたかも知れぬ。けれども創作の方面で自己を發揮しようとは、創作をやる前迄も別段考へてゐなかつた。

話が自分の經歷見たやうなものになるが、丁度私が大學を出てから間もなくのこと、或日外山正一氏から一寸來いと言つて來たので、行つて見ると、教師をやつて見てもどうかといふことである。私は別にやつて見たいともやつて見たくないとも思つて居なかつたが、さう言はれて見ると、またやつて見る氣がないでもない。それで兎に角やつて見ようと思つてさういふと、外山さんは私を嘉納さんのところへやつた。嘉納さんは高等師範の校長である。其處へ行つて先づ話を聽いて見ると、嘉納さんは非常に高いことを言ふ。教育の事業はどうとか、教育者はどうしななければならぬとか、逆も我々にはやれさうにもない。今なら話を三分の一に聽いて仕事も三分の一位で済まして置くが、その時分は馬鹿正直だったので、さうは行かなかつた。そこで逆も私には出来ませんと斷ると、嘉納さんが旨い事をいふ。あなたの辭退するのを見て益依頼し度くなつたから、兎に角やれるだけやつてくれとのことであつた。さう言はれて見ると、私の性質として又斷り切れず、とゞ／＼高等師範に勤めることになつた。それが私のライフのスタートであつた。

つた。

茲で一寸話が戻りをするが、私も十五六歳の頃は、漢書や小説などを讀んで、文學といふものを面白く感じ、自分もやつて見ようといふ氣がしたので、それを亡くなつた兄に話して見ると兄は文學は職業にやならない、アツコンブリツシメントに過ぎないものだ云つて、寧ろ私を叱つた。然しよく考へて見ると、自分は何か趣味を持つた職業に従事して見たい、それと同時に其仕事が何か世間に必要なものでなければならぬ。何故といふのに、困つたことには自分はどうも變物である。當時變物の意義はよく知らなかつた。然し變物を以て自ら任じてゐたと見えて、自分は逆も一々此方から世の中に度を合はせて行くことは出来ない、何か己を曲けずして趣味を持つた、世の中に缺くべからざる仕事がありさうなものだと、頻りにそんな事を考へてゐた。するとその時分私の眼に映つたのは、今も駿河臺に病院を持つて居る佐々木博士の養父だとかいふ、佐々木東洋といふ人であつた。あの人は誰もよく知つて居る變人だが、世間はあの必要として居る。然もあの人は己を曲げることなくして立派にやつて行く。それから井上達也といふ眼科の醫者が矢張駿河臺に居たが、其人も丁度東洋さんのやうな變人で、然も世間から必要とせられて居た。そこで私は自分もどうかあんな風にえらくなつてやつて行きたいものだと思つたのである。ところが私は醫者は嫌ひである。どうか醫者でなくて何か好い仕事がありさうなものと考へて日を送つて居るうちに、ふと建築のことに思ひ當つた。建築ならば衣食住の一つで世の中になくて叶はぬのみか、同時に立派な美術である。趣味があると共に必要なものである。で、私はいよくそれにしようと思つた。

ところが丁度その時分（高等學校）の同級生に、米山保三郎といふ友人が居た。それこそ眞性變物で、常に宇宙がどうの人生がかうのと、大きなこと計り言つて居る。ある日此男が訪ねて來て、例の如く色々哲學者の名前を聞かされた揚句の果に君は何になると尋ねるから、實はかう／＼だど話すと、彼は一も二

五〇七



もなくそれを却けてしまつた。其時彼は、日本でどんなに腕を揮つたつて、セント・ポールズの大寺院のやうな建築を天下後世に残すことは出来ないかとか何とか言つて、盛んなる大議論を吐いた。そしてそれよりもまだ文學の方が生命があると云つた。元來自分の考へは此男の説よりも、ずつと實際的である。食べるといふことを基點として出立した考へである。所が米山の説を聞いて見ると、何だか空々漠漠とはしてゐるが、大きい事は大きいに違ひない。衣食問題などは丸で眼中に置いて見ない。自分はこれに敬服した。さう言はれて見ると成程又さうでもあると、其晩即席に自説を撤回して、又文學者になる事に一決した。随分呑氣なものである。

然し漢文科や國文科の方はやりたくない。そこで愈英文科を志望學科と定めた。

然し其時分の志望は實に茫漠極まつたもので、たゞ英語英文に通達して外國語でえらい文學上の述作をやつて、西洋人を驚かせやうといふ希望を抱いてゐた。所が愈大學へ這入つて三年を過ぎ居るうちに、段々其希望がややしくなつて來て、卒業したときには、是でも學士かと思ふ様な馬鹿が出來上つた。それでも點數がよかつたので、人は存外信用してくれた。自分も世間へ對しては多少得意であつた。たゞ自分が自分に對すると甚だ氣の毒であつた。そのうち愚圖々々してゐるうちに、この己に對する氣の毒が凝結し始めて、體のいゝレシグネーションとなつた。わるく云へば立ち腐れを甘んずる様になつた。其癖世間に對しては甚だ氣燄が高い。何の高山の林公杯と思つてゐた。

その中、洋行しないかといふことだつたので、自分なんぞよりもつとどうかした人があるだらうから、そんな人を遣つたらよからうと言ふと、まあそんなに言はなくても行つて見たら可いだらうとのことだつたので、そんなら行つて見ても可いと思つて行つた。然し留學中に段々文學がいやになつた。西洋の詩などのあるものをよむと、全く感じない。それを無理に嬉しがるのは、何だかありもしない翅を生やして飛

んでる人のやうな、金がないのにあるやうな顔して歩いて居る人のやうな氣がしてならなかつた。所へ池田菊苗君が獨乙から來て自分の下宿へ留つた。池田君は理學者だけれども、話して見ると偉い哲學者であつたには驚いた。大分議論をやつて大分やられた事を今に記憶してゐる。倫敦で池田君に逢つたのは、自分には大變な利益であつた。御蔭で幽靈の様な文學をやめて、もつと組織だつたどつしりした研究をやらうと思ひ始めた。それから其方針で少しやつて、全部の計畫は日本でやり上げる積で西洋から歸つて來ると、大學に教へてはどうかといふことだつたので、そんならさうしようと言つて大學に出ることになつた。(是も今云つた自分の研究にはならないから、最初は斷つたのである)。

さて正岡子規とは元からの友人であつたので、私が倫敦に居る時、正岡に下宿で閉口した模様を手紙にかいて送ると、正岡はそれを『ホト、ギス』に載せた。『ホト、ギス』とは元から關係があつたが、それが近因で、私が日本に歸つた時(正岡はもう死んで居た)編輯者の虚子から何か書いて呉れないかと囁まれたので、初めて『吾輩は猫である』といふのを書いた。所が虚子がそれを讀んで、これはいけませんと云ふ。譯を聞いて見ると段々ある。今は丸で忘れて仕舞つたが、兎に角尤だと思つて書き直した。

今度は虚子が大いに賞めて、それを『ホト、ギス』に載せたが、實はそれ一回きりのつもりであつた。ところが虚子が面白いから續きを書けといふので、だん／＼書いて居るうちにあんなに長くなつて了つた。といふやうな譯だから、私はたゞ偶然そんなものを書いたといふだけで、別に當時の文壇に對してどうかうといふ考も何もなかつた。たゞ書きたいから書き、作りたいから作つたまで、つまり言へば、私があいふ時機に達して居たのである。もつとも書き始めた時分と、書き終る時分とは餘程考へが違つて居た。文體なども人を真似るのがいやだつたから、あんな風にやつて見たに過ぎない。

何しろそんな風で今日迄やつて來たのだが、以上を綜合して考へると、私は何事に對しても積極的な



いから、考へて自分でも驚ろいてゐる。文科に入つたのも友人のすゝめだし、教師になつたのも人がさう言つて呉れたからだし、洋行したのも、歸つて來て大學に勤めたのも、『朝日新聞』に入つたのも、小説を書いたのも、皆さうだ。だから私といふ者は、一方から言へば、他が造つて呉れたやうなものである。

(明治四十一年九月『文章世界』)

## 正岡子規

正岡は食意地の張つた男であつた。なんでも僕が松山に居た時分、子規は支那から歸つて來て僕のところへ遣つて來た。自分のうちへ行くのかと思つたら、自分のうちへも行かず親類のうちへも行かず、此處に居るのだといふ。僕が承知もしないうちに、當人一人で極めて居る。御承知の通り僕は上野の裏座敷を借りて居たので、二階と下合はせて四間あつた。上野の人が頻りに止める。正岡さんは肺病ださうだから傳染するといけないおよしなさいと頻りにいふ。僕も多少氣味が悪かつた。けれども斷らんでもいゝと、かまはずに置く。僕は二階に居る、大將は下に居る。其うち松山中の俳句を遣る門下生が集まつて來る。僕が學校から歸つて見ると、毎日のやうに多勢來て居る。僕は本を讀む事もどうすることも出來ん。尤も當時はあまり本を讀む方でもなかつたが、兎に角自分の時間といふものがないのだから、止むを得ず俳句を作つた。夫から大將は晝になると蒲焼を取り寄せて、御承知の通りびちや／＼と音をさせて食ふ。夫も相談もなく自分で勝手に命じて勝手に食ふ。まだ他の御馳走も取り寄せて食つたやうであつたが、僕は蒲焼の事を一番よく覺えて居る。夫から東京へ歸る時分に、君拂つて呉れ給へといつて澄まして歸つて行つた。僕もこれには驚いた。其上まだ金を貸せといふ。何でも十圓かそこら持つて行つたと覺えてゐる。夫から歸りに奈良へ寄つて其處から手紙をよこして、恩借の金子は當地に於て正に遣ひ果たし候とか何とか書いてゐる。恐らく一晩で遣つてしまつたものであらう。

然し其前は始終僕の方が御馳走になつたものだ。其うち覺えてゐる事を一つ二つ話さうか。正岡といふ男は一向學校へ出なかつた男だつた。夫からノートを借りて寫すやうな手數をする男でもなかつた。そこ



で試験前になると僕に来て呉れといふ。僕が行つてノートを大略話してやる。彼奴の事だからい、加減に聞いて、ろくに分つてゐない癖に、よし／＼分つたなど、言つて生吞込にしてしまふ。其時分は常盤會寄宿舍に居たものだから、時刻になると食堂で飯を食ふ。或時又来て呉れといふ。僕が其時返辭をして、行つてもい、けれども又鮭で飯を食はせるから厭だといつた。其時は大いに御馳走をした。鮭を止めて近所の西洋料理屋か何かへ連れて行つた。

或日突然手紙をよこして、大宮公園の中の萬松庵に居るからすぐ来いといふ。行つた。ところがなかなか綺麗なうちで、大將奥座敷に陣取つて威張つてゐる。さうして其處で鶉か何かの焼いたのなどを食はせた。僕は其形勢を見て、正岡は金がある男と思つてゐた。處が實際はさうではなかつた。身代を皆食ひつぶしてゐたのである。其後熊本に居る時分、東京へ出て来た時、神田川へ瓢亭と三人で行つた事もあつた。これはまだ正岡の足の立つてゐた時分である。

正岡の食意地の張つた話といふのは、もうこれ位しか思ひ出せぬ。あの追分の奥井の邸内に居つた時分は、一軒別棟の家を借りてゐたので、下宿から飯を取り寄せて食つてゐた。あの時分は『月の都』といふ小説を書いてゐて、大いに得意で見せる。其時分は冬だつた。大將雪隠へ這入るのに火鉢を持つて這入る。雪隠へ火鉢を持つて行つたつて當たる事が出来ないぢやないかといふと、いや當り前にするときに、隠しが邪魔になつていかぬから、後ろ向きになつて前に火鉢を置いて當たるのぢやといふ。夫で其火鉢で牛肉をぢい／＼煮て食ふのだからたまらない。夫から其『月の都』を露伴に見せたら、眉山、漣の比でないと露伴もいつたとか言つて、自分も非常にえらいもの、やうにいふものだから、其時分何も分らなかつた僕もえらいもの、様に思つてゐた。あの時分から正岡には何時もごまかされてゐた。發句も近來漸く悟つたとかいつて、もう恐ろしい者は無いやうに言つてゐた。相變らず僕は何も分らないのだから、小説同様えらいのだらうと思つてゐた。それから頻りに僕に發句を作れと強ひる。其家の向うに笹藪がある。あれを句にするのだ、え、かとか何とかいふ。こちらは何ともいはないのに、向うで極めてゐる。まあ子分のやうに人を扱ふのだなあ。

又正岡は夫より前漢詩を遣つてゐた。夫から一六風か何かの書體を書いてゐた。其頃僕も詩や漢文を遣つてゐたので、大いに彼の一粲を博した。僕が彼に知られたのはこれが初めてあつた。或時僕が房州に行つた時の紀行文を漢文で書いて其中に下らない詩などを入れて置いた、夫を見せた事がある。處が大將頼みもしないのに跋を書いてよこした。何でも其中に、英書を讀む者は漢籍が出來ず、漢籍の出來るものは英書は讀めん、我兄の如きは千萬人中の一人なりとか何とか書いて居つた。處が其大將の漢文たるや甚だまづいもので、新聞の論説の假名を抜いた様なものであつた。けれども詩になると彼は僕よりも澤山作つて居り平仄も澤山知つて居る。僕のは整はんが、彼のは整つて居る。漢文は僕の方に自信があつたが、詩は彼の方が旨かつた。尤も今から見たらまづい詩ではあらうが、先づ其時分の程度で纏つたものを作つて居つたらしい。たしか内藤さんと一緒に始終やつて居つたと聞いてゐる。

彼は僕などより早熟で、いやに哲學などを振り廻すものだから、僕などは恐れを爲してゐた。僕はさういふ方に少しも發達せず、まるでわからん處へ持つて来て、彼はハルトマンの哲學書か何かを持ち込み、大分振り廻してゐた。尤も厚い獨逸書で、外國にゐる加藤恒忠氏に送つて貰つたもので、ろくに讀めぬものを頻りにひつくりかへしてゐた。幼稚な正岡が夫を振り廻すのに恐れを爲してゐた程、こちらは愈幼稚なものであつた。

妙に氣位の高かつた男で、僕なども一緒に矢張氣位の高い仲間であつた。ところが今から考へると、兩方共それ程えらいものでもなかつた。といつて徒に吹き飛ばすわけではなかつた。當人は事實をいつてゐる



るので、事實えらいと思つてゐたのだ。教員などは滅茶苦茶であつた。同級生なども滅茶苦茶であつた。非常に好き嫌ひのあつた人で、滅多に人と交際などはしなかつた。僕だけどういふものか交際した。一つは僕の方がいゝ、加減に合はして居つたので、夫も苦痛なら止めたのだが、苦痛でもなかつたから、まあ出来てゐた。こちらが無暗に自分を立てようとしたら逆も圓滑な交際の出来る男ではなかつた。例へば發句などを作れといふ。夫を頭からけなしちやいけな。はなしつゝ、作ればよいのだ。策略でするわけでもないのだが、自然とさうなるのであつた。つまり僕の方が人が善かつたのだな。今正岡が元氣でゐたら、餘程二人の關係は違つたらうと思ふ。尤も其他、半分は性質が似た處もあつたし、又半分は趣味の合つてゐた處もあつたらう。も一つは向うの我とこちらの我とが無茶苦茶に衝突をしなかつた爲でもあらう。忘れてゐるが、彼と僕と交際し始めたも一つの原因は、二人で寄席の話をした時、先生大いに寄席通を以て任じて居る、ところが僕も寄席の事を知つてゐたので、話すに足るとでも思つたのであらう。夫から大いに近よつて來た。

彼は僕には大抵な事は話したやうである(其例一二省く)。兎に角正岡は僕と同じ歳なんだが僕は正岡ほど熟さなかつた。或部分は萬事が弟扱ひだつた。従つて僕の敢てし得ない人の悪い事を平氣で遣つてゐた。すれつからしであつた。(悪い意味でいふのではない)。

又彼には政治家的のアムビションがあつた。夫で頻りに演説などをやつた。敢て謹聽するに足る程の能辯でもないのに、よくのさばり出て遣つた。つまらないから僕等聞いてもゐないが、先生得意になつてやる。

何でも大將にならなけりや承知しない男であつた。二人で道を歩いてゐても、きつと自分の思ふ通りに僕をひつぱり廻したものだ。尤も僕がぐうたらであつて、こちらへ行かうと彼がいふと其通りにして居つ

た爲でもあつたらう。

一時正岡が易を立て、やるといつて、これも頼みもしないのに占つてくれた。疊一疊位の長さの巻紙に何か書いて來た。何でも僕は教育家になつて何うとかするといふ事が書いてあつて、外に女の事も何か書いてあつた。これは冷かしかつた。一體正岡は無暗に手紙をよこした男で、夫に對する分量は、こちらからも遣つた。今は残つてゐないが、何れも愚なものであつたに相違ない。(明治四十一年九月「ホト、ギス」)



## ズーデルマンの作品

五一六

○何ですつて? 『虞美人草』ですか。は、ああれに現はれたラヴが近代的で面白いと云ふのですか。別にさう云ふ積りで書いた譯でもありません。格別新しい事もないでせう。さうですね。近頃のものでラヴを書いて好く出来てゐるのは色々あるかも知れないが、私の好きな一つを云へば、ズーデルマンの『カツエンステツヒ』——英譯では女主人公の名を取つて『レギーナ』と云つて居る——の書き方です。あれは大變旨い。レギーナは無學文盲な殆ど貞操とは何んなものかといふ事も知らぬ位の女で、日本で云へば房州あたりの、船頭か何かの娘位なものでせうが、それと、今一人教育ある男とが、ある事情の爲に社會から隔離されて、一つ屋根の下に共棲してゐる。だから全く交際はない。外へ出れば兩人共迫害を受ける位のものです。それで此女がたゞ一人で其男の世話をせねばならぬといふ特別なシチュエーションに置かれてある。勿論身分の懸け離れてゐる事からして、男の方ではシムバシーさへも持ち得ない。女の方ではラヴといふ字義さへ知らない。此兩人の間の出来事である。詳しく云ふと、女は全然野性の儘で、或意味から云ふと動物に近い處がある。それで面白い事には全くインノセントである。と云ふのは操を汚す事などは幾ら遣つても善い事とも思はない代りに、悪い事とも考へない。善悪を超越してゐる。従つて行爲上他人から見れば墮落してゐるが、事實上本人から云へば純潔である。本當の自然のまゝの内に、女はたゞ一つの暖かいハートを有つてゐる。ハートが詰りあらゆる行爲の動機力で、一舉一動之に支配せられて、然も其發動の目的物は此男の外に無い。けれども夫婦にならうといふ成算のあるでもなく又ラヴとも自覺しない、殆ど無

意識に、世話をせねばならぬ男に慰樂を與へたいといふ丈の考で、情愛の強い、人情のある方面に非常に活動してゐる。そこで昔の小説にも好く貴人と平民の戀はある。かのグリセリダの話などもそれであるが、そんな場合に我々の眼には單に身分の懸隔といふ事丈が映する計りで、身分のインフイリオリティーに從つて起る事實上のイグノランスとかブルータリティーとかは全くネグレクトされて居る。些とも書いてない。然しズーデルマンのには是等を悉く有るがまゝに、具はれるがまゝに書いてある。其點が新しい。○そして其書き方——かういふシチュエーションにある二人のラヴの書き方が面白い。男にはシムバシーが無く女にはラヴが無い——或は無意識に活いてゐるかも知れぬが——それが追々に動かされて行くプロセスを旨く書いてある。口で云ふと譯のないやうなもの、書くとなると、困難な面倒なもので、兎角不自然になり易いのは誰も知つてゐる事で、殊に刺戟の強い、殆んどセンセーショナルに近い場ばかり並べたあるにも拘はらず、それが非常にナチュラルで、デヴェロプメントが層々累々とシフトして行く移り具合が大變旨い。詰り私は深さのある小説だと思ふ。メレジコウスキーのトリロデー(ピーター・エンド・アレキシスを除く)などは廣さの小説で、パノラマの如く無暗に廣がつてゐる。エキステンションがある。(委しい意見を述べると、メレジコウスキーはプロットに於て失敗して居るといふ事を説明すべきだが、それは假に可いとして)兎に角廣い。スケールが<sup>グランド</sup>大である。人物も多く場處も廣い。レネイサンスといふやうな一代の傾向を書き表はすのだから當然の事かも知れぬが、一方から云ふとデツプスが無いものとなる。茲に云ふデツプスが無いとは、普通にいふ奥行が無い、内部の意味が無いとの意味でなく、餘り興味がアクセレートせられないといふのである。同じインテレストが加速度を受けて段々とインテンシティーが強くなるのが私の所謂深さで、同じインテレストを以て進んで行くからして統一がある事になる。然しこれは動もすれば單調になり易い。そこで統一もあつて且單調を避けん爲には、同じインテ

五一七



レストを以て各篇を貫くと同時に、エキザクトリーに同じインテレストを各章に繰り返してはならぬといふ事になる。即ち同じ男女の間のラヴ・アツフェーズでも、毎日出逢つてゐるのに同じ戯けた話をして駄目だからして、何等かの變化を與へねばならぬ。然も夫が場所の動かない處であると、何うも單調になる、變化を與へる事が困難だ。然し變化ばかりあつて統一を失つてはいけない。だから統一はあつて、單調にならずに、變化を與へて調子を變へて行く。詰りレベティションをするやうで、段々と新しい所を加へて行くといふ書き方、それが甚だ困難である。

○然しさう書いて行くと、エキステンションは勿論無い。だから興味は統一されるが、云はゞ細い水が一本流れて行くやうなもので、従つてナローになる。けれども同じインテレストでも加速度を以てアクセレレートして層々累々に新味を加へて行くとなると、其處に深さが生ずる。『レギーナ』は此困難な書き方で、餘程深さを表はしてゐる。あれがその、人里離れた處に男と女をたつた二人出しているのだから周圍も變らない、同じ家に住んでゐるからして場所も變らぬ、それでゐてズン／＼變化して行くのが、旨い具合に書いてある。で、一方から云へば、之は決して觀<sup>オブザベーション</sup>察だけで書いたものでない、想<sup>イマジネーション</sup>像の所産に相違ない。只客觀的に存在してゐるものを忠實に寫したものでなく、頭で拵へて頭でデヴェロブさせて行つたもので、其發展のプロセスが大變旨い。長谷川さんの『其面影』などは此書き方に似たもので、矢張男女の間で層々累々と關係が密接になり逼迫して行く風に書いてある。然も同じインテレストを繰り返し／＼してゐるながらあれ丈に飽きないものにしたのは、レベティションでなくてアクセレレートしたからであつて、その點が大變の手際だと思ふ。

○然しかういふ風の書き方が必ずしも佳いといふのではない。又凡ての書き方のうちで一番困難だといふのではない。が、只かう書くとすれば前に述べたやうな點に困難があると云ふ丈である。同じデツプスを

表はす書き方でも、無論是計りではない。何の小説であつたか、男女二人の關係が近づいては離れ、離れては近づくといふ互違ひの形式があつたが、之も面白い書き方で又六づかしい。然し變化がある丈に幾らでも書けるが、離れる一方、近づく一方を書くとなると面倒が起る。やゝともすると同じ事が重なるからして書き難い。殊に離れてゐる者が段々近づく方は猶書き悪い。といふのは冒頭に讀者の興味を惹く刺戟がないからである。其證據には昔の小説は何でも構はず事件のとつ初めから書き出したものである。従つて讀者の興味を釣り込む迄に大分暇が要る。有名な『エスモンド』杯は非常な傑作であるけれども、最初の二三十頁を読み終せる丈の根氣がないと、遂に佳境に入る機會がなくなつて巻を伏せて仕舞ふ様な事になる。だから此書き方は事件から云へば自然な書き方だらうが、作家から云へば寧ろ損な遣口である。此損を悟つて氣の短い現代の讀者を釣り込まうとするには、ある事件が比較的發展して大いなインテレストが賭せられつゝある眞最中から書き始めて、最初から讀者の注意を引きつけるに限る。イブセンは此方法を利用する事の最上手な作家である。(彼の此手段に訴へるのは他にテクニカルの理由のあるのは無論であらうが)。然るにゾーデルマンの『レギーナ』は全く此損な方法を取つてゐる。丸で懸隔した男女を一つ所に置いてそれを段々近づけて行くのだから、好い加減な所から始めるのから見れば随分困難である。それをあれ丈旨く漕ぎ付けてゐるのは、凡手ではとても出来ない事である。(尤も此困難を少くする爲に作家は他の方法を同時に講じてゐるのは勿論である。然しそれは長くなるから述べない。)

○え？『虞美人草』の書き方ですか。格別そんな事を考へたのでもないのです。複雑なラヴ・アツフェーズ其ものを描いたものとしては極幼稚なものでせう。又ラヴ丈を書いたものでないのですからね。ぢや狙つたものは何かといふのですか。——さうですね。ラヴも書いてちや居ますがね。ラヴ丈を描く積りならもう少し遣り方もあつたでせう。つまりあれはね、ラヴといふものを唯一のインテレストとして貫いたも



のぢやないから、戀愛事件の發展として見ると中々不完全です。夫なら何處が完全かと云はれると益弱る譯だが、つまり二つか三つかのインテレストの關係が互に消長して、夫が仕舞に一所に出逢つて爆發するといふ所を書いたのです。書いたのぢやない、書いた積りなのです。

○やはりゾーデルマンの『アンダイイング・バスト』になると餘程妙なラヴですね。勿論ラヴの關係は前のは異つてゐるが、矢張り層々累々の書き方を用ゐてゐる。之は女が男を追つかけるのだが、其女のフエリシタスといふのには夫がある、有夫姦になるので男の方で始終逃げようとする。それを——フイジカリーに追つかけるのではないが——追つかけ／＼してキャブテイエートする仕方が如何にも巧妙に、何うしてあゝいふ風に想像がつくかと驚かれる位に書いてある。誰もあんなデヴェロブメントをクリエートする事は出来ない。さうして此女が非常にサツトルなデリケートな性質でね。私は此女を評して「無意識な偽善家」——偽善家と譯しては悪いが——と云つた事がある。その巧言令色が、努めてするのではなく、殆ど無意識に天性の發露のまゝで男を擒にする所、勿論善とか悪とかの道德的觀念も、無いで遣つてゐるかと思はれるやうなものです。こんな性質をあれ程に書いたものは外に何かありませんか。——恐らく無いと思つてゐる。其代り、之は獨逸の或批評家に云はせると、センセーショナルだと非難してゐる。そして其男は一方に『フラウ・ゾルゲ』を褒めてゐる。が、私の考へではさうでない。『フラウ・ゾルゲ』は只一能才の努力に成つたものとしか思へぬ。(あれが九十版にもなつた作とすれば、版を重ねるのは單に流俗の所爲だと斷言して憚からぬ位です)。然し今云つた小説の方は何うしても天才のクリエートしたものである。

○『三四郎』は長くなるかといふのですか。さうですね、長く續かせるのですね。さあ何を書くかと云はれると又困りますがね。——實は今御話をした其フエリシタスですね、是を餘程前に見て面白いと思つてゐるところが、宅に居た森田白楊が今頻りに小説を書いてゐるので、そんなら僕は例の「無意識なる偽善者」を書いて見ようと、冗談半分に云ふと、森田が書いて御覽なさいと云ふので、森田に對してはさう云ふ女を書いて見せる義務があるのですが、外の人に公言した譯でもないから、どんな女が出来ても構はないだらうと思つてゐます。實際どんな女になるかも自分で判らない。且今御話した層々累々の敘述文で進むのではなくエキステンションも這入つてくるんだから、女は何うなつても構はない、と云ふと無責任ですが、出来損なつてもゾーデルマン杯を引合に出して冷かしちやいけません。

○成程——層々累々の書き方と私の云ふ低徊趣味が似てゐるといふのですか。意味の取方にも依るが大きく云へばある程度迄は何うしても似て来る。若し小説を離れて寫生文となると、面白味はエキステンションに在る、平面的の興味云はゞ空間的の特質がある。小説の面白味は寧ろ推移的だから直線をたどる様なものでせう(勿論エキステンションも混つてはゐるが)。と云ふ意味は、即ちコーザリティーを以て貫くと云ふ事なので、其線の行く先を述付けて讀者は興味を發見する。だから其極端をいふと、丸でエキステンションのない筋書だけの小説になる。だから又一方には寫生文だけの面白味があつて、小説にならぬものが存在する理由も判るでせう。然し寫生文はパノラマ的エキステンションが主でコーザリティーから出る興味は主ではない。従つて散漫になり易い。だから寫生文をパノラマとすれば小説は活動寫眞——といつたやうなものだらう。

○それで又本流に全く關係の無いエキステンションはダレて了つて散漫に陥る弊がある。メレジコウスキーの小説を悪いと云つたのは即ち此點に在るので、無暗に延長する爲にデイフューズになつて本流を失つて了ふ。其代り大きい所はあるが、刺戟が無い。又一方の直線ばかりになると肉も血もない筋書になる。その呼吸が中々六づかしい。エキステンションが一方の妨害をせぬ様に、着々と筋を運んで行か



なければならぬ。そこで私の徧興趣の講釋を始めると随分長くなるかも知れないから、まあ好い加減にざつと言ひますが、徧興趣の特色はエキステンションの方に屬するので、直線を述付けて變化を面白がる方ではないのです。けれども自然人事ともに常に活動してゐるものだから、決してエキステンション文で間に合ふものは少い。まあどんなものを見ても、どんな事を聞いても、移つて行くとしなければならぬ。だから徧興趣も理想的にエキステンション文で満足してゐる譯にも行かない。だからかう説明したら好いでせう。今甲と云ふ事相が乙に移るとすると、直線的の興味は甲を去つて乙になる所が主だから、乙が注意の對象になる。之に反して徧興趣の方は事相其ものに執着するのだからして、興味を中心が却つて甲にある。即ち乙に移りたくないといふ姿がある。だから此二つの趣味はどうせ相俟つて行かなければ完全な趣味の起る譯はない。早く甲が乙に變じて呉れ、ば可いと思ふ様では、甲自身が厭きられてゐるのだから、作物としてはそこに缺陷がある。と同時に、いつ迄も甲に徧するとすると、いつ迄立つても埒は明かない事になつて仕舞ふ。だから甲にも興味があると同時に甲が乙に移る所にも興味を持つと云ふ風でなければなるまいと思ふ。純粹の寫生文や純粹の筋書的小説は此一方丈を代表したもので、雙方共改善の餘地のあるものと考へられる。

○かう説明をして置いて、あと戻りをして、あなたの先の質問に答へたら善く分るでせう。あなたが前述の層々累々の敘述は徧興趣ではないかと聞かれた時、私は幾分か徧興趣に違ひないと答へたが、どこが徧興趣だか大抵は見當がつく事となつた。即ち今こゝに男女の關係を層々と重ねて描いて行くとする、各章毎に舊い分子と新しい分子が混つて來る事になる。全然新しければ漸次の發展でも何でも無い。又全然舊ければ前章の繰り返しに過ぎない。だから各章ともに前章のあるものを繰り返すと同時に、前章にないあるものを附加しつゝ、進まなければならぬ。さうなると其二要素のうちで、新しい所は前章から

脱化した變化であるから直線的に推移の傾向を満足せしめるし、又舊い方は前章を其儘重複するのだから、いつ迄も一所に定住して、徧趣的に味はひたいと云ふ傾向をも満足させる。従つて此かき方はエキステンションと直線とを合併したもので、外の言葉でいふと、徧興趣と推移趣味の一致したものに相違ないでせう。此場合に於けるエキステンションは無暗に新事相を附加するのでなくて、舊事相の重複なのだからインテレストの統一上最便宜なものである。それから此場合に於ける直線推移は一道のコーザリティーで發展するから、是亦インテレストの統一を破る憂はない。だから此書き方は深さを生ずる書き方だと云つたのです。

○纏らぬ話ですが、これ位にして置きませう。(明治四十一年十月『早稻田文學』)



## 讀書と創作

五二四

どうも閑がなくて、讀書がされなくて困つてゐる。新聞社の小説を書いてゐる間は、忙しくて勿論讀んで居られず、それを漸つと書いて了ふと、今度は、それまで更に手を着けずに放擲つて置いた西洋の雜誌三四種に、日本の雜誌もあり、その他外國に注文して置いた書物も來てゐるから、それも讀んで見たいと思ふし、その間には若い人達が書いたものを持つて來て、これを讀んで呉れとか批評して呉れとか言ふし、書信の往復もしなければならず、且來客への應對もあり、それは随分忙しい。

人は、あゝして家に計り閉ぢ籠つてゐるのだから、定めし閑だらうと思ふかも知れないが、如何してそんな譯ではない。私は、學校に出てゐる時の方が、今より來客も少し、餘程閑であつた。

兎に角こんな風で、仕方がないから、その間々の暇を利用して讀書するやうにはしてゐるが、實際餘り讀めなくつて困つてゐる。

それで、近頃讀んでゐる物は、無論西洋物計りであるが、それも小説のみに限らず、一體私は何種の書物でも讀むといふことは好きであるから、倫理、心理、社會學、哲學、繪畫に關する書物なども、好んで讀むやうにはしてゐるが、何れかと云へば、私は朝は遅し、夜は早く床に就く方であるから、丁度來客もなく、讀書するに最都合の好い——そんな夜は、今度は自分の身體が許さぬといふやうなわけで、無論横になれば、直ぐ眠つて了ふから、床の中で本を見るといふやうなことも更になく、まあ私は讀書する暇は僅かしかない。

創作の方は、書かなければならぬといふ義務があれば、筆を執る氣にもなるが、筆をとれば多少の感興

も湧いて來ると云ふ丈で、非常に興味も感じなければ又特に非常な苦しみも感じない。

書き始めると、筆は早くもなし、遅くもなし、先づ普通といふところであらう。原稿は一度書いたまゝ、で後にテニテハの訂正をする位のもの、時間は、夜でも朝でも晝でも、別に制限はないが、何時にしても、筆を執つてゐる間は、相應な苦しみはある。然し私は、書き始めると、殊更勿體をつけて、態と筆を遅らすと云ふやうなことは斷じてない。「うっし」



## 文藝は男子一生の事業とするに足らざる乎

五二六

文藝が果して男子一生の事業とするに足るか何うかと云ふことに答へる前に、先づ文藝とは如何なるものであるかと云ふことを明らかにしなければならぬ。文藝も見様に依つて色々に見られるから、足るか足らぬかと争ふ前に、先づ相互の間に文藝とはかくの如きものであると定めてかゝらねばなるまい。自分の云ふ文藝とはかう云ふものである、貴方の云ふ文藝とはさう云ふものか、では男子一生の事業とするに足るとか足らないとか論すべきであつて、若し相互の間に文藝とはかう云ふものであると云ふことを定めてかゝらない以上、其論は何時まで経つても終ることはない。それでは文藝とは如何なるものぞ、と文藝の定義を下すと云ふことは、又ちよつと難かしい事で、とてもおいそれとそんな手早く出来ることではない。兎に角かう云ふ問題は答へるにちよつと答へ難い。文藝其物を明らかにしてから言はねばならぬ。それなら、私は明らかであるか何うかと云へば、私はかう答へる。何人も満足せしめ得る程に明らかに自分は考へて居ないかも知れない、けれども自分を満足せしむる丈には相當の考へを持つてゐる積りである。其考へに依つて此問題を判断すると何うかと云ふと、例の如く面倒くさくなる。かうくかうであるからして私は文藝を以て男子一生の事業とするに足る、と其理由を一々擧げて來なければならんから、ちよつと手軽には話されない。中々難かしくなる。然し其理由は抜きにして結論だけ言へると云ふなら、譯なく言へる。自分の文藝に對する考へに基づいて文藝と云ふ其職業を判断して見ると、世間に存在してゐる如何なる立派なる職業を持つて來て比較して見ても、夫に劣るとは云へない。優るとは云へないかも知れないが、劣るとは決して云へない。文藝も一種の職業であつて見れば、文藝が男子一生の事業とするに足らなくて政

治が男子一生の事業とするに足るとか、宗教が男子一生の事業でなくて豆腐屋が男子一生の事業であるとか、第一職業の優劣といふことが何う云ふ標準を以て附けられるか、甚だ漠然たるもので、其標準を一つに限らない以上は、御互に或標準を打ち立てた上でなければ、優劣はつくものではない。一般から標準を立てないで職業と職業とを比較するならば、凡ての職業は皆同じで、其間に決して優劣はない。職業といふことは、夫を手段として生活の目的を得ると云ふことである。世の中に存在するあらゆる職業は、其職業によつて其職業の主が食つて行かれると云ふことを證明してゐる。即ち、食つて行かれないものなら、それは職業として存在し得られない。食つて行ければこそ、世の中に職業として存在してゐるのである。食つて行き得る職業ならば、其職業は職業としての目的を達し得たものと認めなければならぬ。で、職業としての目的を達し得た點に於て、あらゆる職業は平等で、優劣などのある道理はない。さう云ふ意味で云へば、車夫も大工も同じく優劣はない譯である。その如く大工と文學者にも又同じく優劣はない。又文學者も政治家も優劣はない。だから、若し文學者の職業が男子一生の事業とするに足らぬと云ふならば、政治家の職業も亦男子一生の事業とするに足らないとも云へるし、軍人の職業も亦男子一生の事業とするに足らぬとも云へる。それを逆にして、若し文學者の職業を男子一生の事業とするに足ると云ふならば、大工も豆腐屋も下駄の齒入屋も男子一生の事業とするに足ると云つても差支ない。けれども、或標準を立てると、其間に直ぐ優劣はついて來る。そして優劣を定める標準は千差萬別で、幾らでも出来る。例へば最徳義に適つたものが最好い職業であると、かう云ふ標準も出来る。其徳義と云ふものは、何う云ふ傾向を持つたものが徳義だとか、何う云ふ時代には何う云ふ傾向を持つたものが徳義だとか、唯徳義と云ふものを割つた丈でも幾らでも出来るし、其他幾らでもある。又健康と云ふことを標準にして、身體に合つたものが好い職業であるとも云へる。それならば勞働者の方が文學者より偉い。最

五二七



危険に近いものが高尚な職業であると云ふ標準を立てるならば、軍人とか探險家とか云ふものが一番偉くなる譯である。或は最多い報酬を得る者が一番好い職業だと云ふ標準も立つ。さうすれば實業家が一番偉い職業になつて仕舞ふ。或は金以外評判と云ふものが得られるのが一番好い職業だとも言へる。すると藝人とか藝者とか相撲取とか云ふものが一番好い職業である。其他其通りのことを列挙すれば、幾らでも出て来る。際限のない話である。従つて文學は男子一生の事業とするに足るとか足らないとか云ふ問題も、要するに標準の立て方一つで、古今未曾有無類飛切上等の職業ともなるし、天下最下等の愚劣な馬鹿氣た職業となるかも知れない。だから標準の取り方でもつて何うにでもなる。では貴方の標準は何處にあるかと云はれると、大體の標準は定まつてゐるにした處で、時と場合によつて其標準が變り得る。例へば大晦日が来て金が一文もなく最痛切に金の入用を感じる場合に、金の収入の少い文學者を職業としてゐれば、文學者ほど愚劣な職業はないと思ふかも知れない。或は私が身體の健康を害して、坐つて居ては何うしても健全になれない。そして私が非常に健康と云ふことに重きを置く場合に遭遇する。さうすると何うしても坐つて居らなければならぬ文學者といふものほど詰らない稼業はなくなつて仕舞ふ。さう云ふ風に標準は始終變つてゐるが、それではもつと大きな大體の標準を何處に置くかと云ふことを話すことになる。前に云つたやうに、文學の定義を定めてかゝらねばならず、又文學とライフとの交渉を研究しライフの意味や價值を定めた上で、他の複雑した事業と比較して話さねばならぬ。それでは中々難かしくなつて来るから、其處の處は云ひ得ない。結論だけを云ふならば、それは極簡單で、只、吾々が生涯從事し得る立派な職業であると私は考へてゐるのである。

何だか逃げ腰のやうな、ふは／＼した答辯で、中までづんと突き入つてゐないので、何となく物足りない感じがあるかも知れない。それは中へ入つて急所を突いた答も、すれば出来ないではないが、それでは却つて局部々々を擧げて論ずることになつて不本意であるから、かう云ふ全體を掩ふたやうな答をして置く。

で、今迄云つたやうな譯だから、文學は男子一生の事業とするに足らぬと云ふ人が出て來ても、ちつとも驚くことはない。又文學は無類飛切の好い職業で、人生にとつて是程意味あり價值ある職業はないと云ふ人があつても、又決して喜ぶには當らない。文學に大きな價值があるとかないとか、深い意味があるとかないとか、兩方で争つて見た處で、それは要するに水掛論たるに過ぎない。本當に意味あり根柢のある論争ではない。各の標準の立て方で、何方にも異つた根據によつての議論であるから、何時果てる時はない。是は一見矛盾の如くにして實は矛盾でも何でもないのである。例へば一方は箸の先を見て箸は細いと云ひ、一方は箸の眞中を見て箸は太いと云つて居ると同じことで、矛盾のやうで實は矛盾ではない。どちらにも根據はある。先づそれを争ふ前に、二人共箸の眞中を見て、太い細いを論ずるのが本當の議論である。

今日の文學の價值に關しての議論が、其邊の微細なる點まで極められた上での議論であるかどうか、或はまだ好加減に價值があるとかないとか云つてゐて、兩方とも矛盾してゐないやうな氣で、箸の眞中と尖端の邊りを彷徨して居るのか、夫はちよつと考へて見なければならぬ問題である。恐らく後者であらう。

(明治四十一年十一月「新潮」)



## 私の學生時代

五三〇

私の學生時代を回顧して見ると、殆ど勉強と云ふ勉強はせず過ぎた方である。従つてこれに關して讀者諸君を益するやうな斬新な勉強法もなければ面白い材料も持たぬが、自身の教訓の爲、つまりこんな不勉強者は、かういふ結果になるといふ戒を、思ひ出すまゝ述べて見よう。

私は東京で生れ東京で育てられた、謂はゞ純粹の江戸ツ子である。明瞭記憶して居らぬが、何でも十一二の頃小學校の門（八級制度の頃）を卒へて、それから今の東京府立第一中學——其頃一ツ橋に在つた——に入つたのであるが、何時も遊ぶ方が主になつて、勉強と云ふ勉強はしなかつた。尤も此學校に通つてゐたのは僅か二三年に止り、感ずるところがあつて自ら退いて了つたが、それには曰くがある。

此中學といふのは、今の完備した中學などゝは全然異つてゐて、その制度も正則と變則との二つに分かれてゐたのである。

正則といふのは日本語計りで普通學の總てを教授されたものであるが、その代り英語は更にやらなかつた。變則の方はこれと異つて、たゞ英語のみを教へるといふに止つてゐた。それで私は何れに居たかと云へば、此正則の方であつたから、英語は些しも習はなかつたのである。英語を修めてゐぬから、當時の豫備門に入ることが六ヶ敷い。これではつまらぬ、今まで自分の抱いてゐた志望が達せられぬことになるから、是非廢さうといふ考を起したのであるが、中々親が承知して呉れぬ。そこで據なく毎日々々辨當を吊して家が出るが、學校には往かずに、その儘途中で道草を食つて遊んで居た。その内に、親にも私が學校を退きたいといふ考が解つたのだらう、間もなく正則の方は退くことになつたといふわけである。

既に中學が前いふ如く、正則、變則の二科に分かれて居り、正則の方を修めた者には更に語學の力がないから、豫備門の試験に應じられない。是等の者はそれが爲、大抵は、或私塾などへ入つて入學試験の準備をしてゐたものである。

その頃私の知つてゐる塾舎には、共立學舎、成立學舎などゝいふのがあつた。これ等の塾舎は随分汚ないものであつたが、授くるところの數學、歴史、地理などいふものは、皆原書を用ひてゐた位であるから、なかく素養のない者には、非常に骨が折れたものである。私は正則の方を廢してから、暫く約一年許りも麴町の二松學舎に通つて、漢學計り専門に習つてゐたが、英語の必要——英語を修めなければ癡としてゐられぬといふ必要が、日一日と迫つて來た。そこで前記の成立學舎に入ることにした。

この成立學舎と云ふのは、駿河臺の、今の曾我祐準さんの隣に在つたもので、校舎と云ふのは、それは、随分不潔な殺風景極まるものであつた。窓には戸がないから、冬の日などは寒い風がヒユウ／＼と吹き曝し、教場へは下駄を履いたまゝ、上がるといふ風で、教師などは大抵大學生が學資を得るために内職として勤めてゐるのが多かつた。

でも當時此塾舎に學生として居た者で、目今有要な地位を得てゐる者が少くない。一寸例を擧げて云つて見ると、前の長崎高等商業學校長をしてゐた隈本有尙、故人の日高眞實、實業家の植村俊平、それから新渡戸博士諸氏などで、此外にも未だあるだらう。隈本氏は其頃、教師と生徒との中間位のところ居たやうに思ふ。又新渡戸博士は、既に札幌農學校を濟して、大學選科に通ひながら、その間に來てゐたやうに覺えて居る。何でも私と新渡戸氏とは隣り合つた席に居たもので、その頃から私は同氏を知つてゐたが、先方では氣が付かなかつたものと見え、つひ此頃のことである。同氏に會つた折



「僕は今日初めて君に會つたのだ」と初對面の挨拶を交はされたから、私は笑つて、「いや、私は貴君を昔成立塾に居た頃からよく知つてゐます」と云ふと、「あ、さうでしたかね」と、先方でも笑ひ出されたやうなことがある。

英語に就いては、その前私の兄がやつてゐたので、それについて少し許り習つたこともあるが、どうも六ヶ敷くつて解らないから、暫くで廢して了つた。其後少しも英語といふものは學ばずゐる者が、兎に角成立學舎へ入ると、前いふ通り大抵の物は原書のみを使つてゐるといふ風だから、教はるといふものゝ、もとゝ素養のない頭には、なかゝ容易に解らない。従つて非常に骨を折つたものであるが、規則立つての勉強も、特殊な記憶法も採つたわけではない。

又、英語はかういふ風にやつたらよからうといふ自覺もなし、唯早く、一日も早く、どんな書物を見て、それに何が書いてあるかといふことが知りたくて堪らなかつた。それで謂はゞ矢鱈に読んで見た方であるが、それとて矢張り一定の時期が來なければ、幾ら何と思つても、解らぬものは解る道理がない。又、今のやうに比較的書物が完備してゐたわけでないから、多く讀むと云つても、自然と書物が限られてゐる。先づ自分で苦勞して、讀み得るだけの力を養ふ外ないと思つて、何でも矢鱈に讀んだやうであるが、その讀んだものも重にどういふものか、今判然と覺えてゐない。さうかうしてゐる中に豫科三年位から段々解るやうになつて來たのである。

私は又數學に就いても非常に苦しめられたもので、數學の時間にはボードの前に引き出されて、その儘一時間位立往生したやうなことがよくあつた。

これは大學豫備門の入學試験に應じた時のことであるが、確か數學だけは隣の人に見せて貰つたのか、

それともこつそり見たのか、まあそんなことをして試験は漸つと濟したが、可笑しいのは此時のこと、私は無事に入學を許されたにも關はらず、その見せて呉れた方の男は、可哀相にも不首尾に終つて了つた。

成立學舎へは、凡そ一年程も通つたが、其翌年大學豫備門の入學試験を受けて見ると、前云つたやうにうまく及第した。丁度それが十七歳頃であつたと思ふ。

一寸こゝで、此頃の豫備門に就いて話して置くが、初め豫備門の方の年数が四ヶ年、大學の方が四ヶ年、都合大學を出るまでには八年間を要することになつてゐたが、私の入學する前後はその規定が變つて、大學三年、豫備門五年と云ふことになつた。結局總體の年数から云へば前と聊か變りはないが、豫備門丈でいふと、一年年数が殖えたことになり、其豫備門五年をも亦二つに分ち、豫科三年、本科二年といふ順序であつた。

それで、豫科三年修了者と、其頃の中學卒業生とを比べて見ると、實際は豫科の方が同じ普通學でも遙かに進んでゐるやうに思はれた。即ち豫科の方では動物、植物、其他のものでも大抵原書でやつてゐた位であるが其時の豫科修了者は、中學卒業生と同程度といふことに見做されることになつた。だから中學卒業生は、英語専修科といふのに一年入ると、直ぐ豫備門本科に入學することが出來たのである。規則改正の結果つまりかういふことになつたので、豫科を経て行く者より、中學を卒業して入つた者の方が二年だけ得をすることになる。

私などは中學を途中で廢して、二松學舎、成立學舎などに通ひ、それから豫科に入つたのであるから、非常に廻り路をしたことになる。そんな事ならむしろ其儘中學を卒へて豫備門へ入つた方が、年数の上から云つても利益であつたが、私ばかりではない。私と同じやうな徑路を執つて進んだ人が外にも澤山あつ



た。その人達は先づ損をした方の組である。

で、私は此豫備門に居る頃も殆ど勉強はしなかつた。此當時は家から通はずに、神田猿樂町の或下宿屋に、今南滿鐵道の副總裁をして居る中村是公といふ男と一所に下宿してゐたものであるが、朝は學校の始業時間が定つて居るので、仕方なく一定の時間には起床したが、夜睡眠の時間などは千差萬別で、殆ど一定しなかつた。

矢張り此頃も、學科に就いて格別得意といふものはなかつた。中にも數學、英語と來ては最苦しめられた方であるが、と云つて勉強もせずに、毎日々々自由な方針で遊び暮してゐた。従つて學校の成績は次第に悪くなるばかりで、豫科入學當時は、今の芳賀矢一氏など、同じ位のところで、かなり一所にゐたものであるが、私の方は不勉強の爲め、下へ下へと下つてゆく計り。其外當時の同級生には今の美術學校長正木直彦、専門學務局長の福原鏡二郎、外國語學校の水野繁太郎などの諸氏があつて、是等の人はなかく出来る方であつたが、私達遊び仲間の連中は總て不成績で、漸次、是等の諸氏と席の方が遠ざかるばかりであつた。

不勉強位であつたから、どちらかと云へば運動は比較的好きの方であつたが、その運動も身體が虚弱であつた爲め、規則正しい運動を努めてやつたといふのではない。唯遊んだといふ方に過ぎないが、端艇競漕などは先づ好んでやつた方であらう。前の中村是公などは、中々運動は上手の方で、何時もボートはチャンピオンになつてゐた位であるが、私は好きでやつたと云つても、チャンピオンなどには如何してもなれなかつた。

其他運動と云つても、當時は未だベース・ボールもなく、庭球テニスもなかつたから、普通體操位のもので、

兵式體操はやらなかつた。要するに運動といふより氣儘勝手に遊び暮したといふ方で、よく春の休みなどになると、机を悉皆取り片附けて了つて、足押、腕押などいふ詰らぬ運動——遊びをしては騒いでゐたものである。試験になつてもさう心配はしない。「我豈に試験の點數に關せんや」と云つたやうな考へで、全く勉強といふ勉強はせずに居たから、頭腦は發達せず、成績はますます悪くなるばかり。一體私は頭の悪い方で——今でもさうだが——夫に不勉強の方であつたから、學校での信用も次第に無くなり、遂に豫科二年の時落第といふ運命に立ち至つた。

落第して見ると誰も同じことで、さすがに可い氣持はせぬ。それから前と違つて、眞面目に勉強もするやうになつたが、矢張り人普通のことをやつたまで、特別に嚴しい勉強を續けたといふのではない。教場へ出てゐても、前と違つてたゞ非常に注意して教師の云ふ事を聞くやうにしたと云ふ位のものであつた。眞面目に勉強し、學校に出て眞面目に教師のいふことを注意して聞くやうにすれば、さう矢鱈に苦しまなくとも、普通ならやつてゆかれること、思ふ。だから、私は假令眞面目な勉強をするやうになつた後でも、試験の前々から決して苦しむやうなことはせず、試験の其前夜になつて、初めて調べて置くといふやうな方法を探つてゐた位である。

丁度豫科の三年の時、十九歳頃の事であつたが、私の家は素より豊かな方ではなかつたので、一つには家から學資を仰がずに遣つて見ようといふ考へから、月五圓の月給で中村是公と一所に私塾の教師をしながら豫科の方へ通つてゐたことがある。

これが私の教師となつた初めで、其私塾は江東義塾と云つて本所に在つた。或有志の人達が協同して設けたものであるが、校舎はやはり今考へて見ると随分不潔な方の部類であつた。



一ヶ月五圓と云ふと誠に少額ではあるが、其頃はそれで不足なくやつて行けた。塾の寄宿舎に入つてゐるから、舎費即ち食糧費としては月二圓で済み、豫備門の授業料といへば月僅に二十五錢（尤も一學期分宛前納することにはなつてゐたが）それに書物は太抵學校で貸し與へたから、格別その方には金も要らなかつた。先づ此中から湯錢の少しも引き去れば、後の殘部は大抵小遣になつたので、五圓の金を貰ふと、直ぐその殘部丈を中村是公の分と合はせて置いて、一所に歩出は、多く食ふ方へ費して了つたものである。

時間も、江東義塾の方は午後二時間丈であつたから、豫備門から歸つて來て教へることになつてゐた。だから、夜などは無論落ち着いて、自由に自分の勉強をすることも出來たので、何の苦痛も感ぜず、約一年許りもかうしてやつてゐたが、此土地は非常に濕氣が多い爲め、つひ急性のトラホームを患つた。それが爲め、今も私の眼は丈夫ではない。親は其トラホームを非常に心配して、「兎に角そんな所に無理に勤めてゐる必要もなからう」といふので、塾の方は退き、豫備門へは家から通ふことにしたが、間もなく其江東義塾は解散になつて了つたのである。

夫から後の學資は、いふまでもなく再び家から仰いでゐたが、大學へ進むやうになつてからは、特に文部省から貸費を受けることとなり、一方では又東京専門學校の講師を勤めつゝ、夫程苦しみもなく大學を卒へたやうな次第で、要するに何の益するところもなく、私は學生時代を回顧して、寧ろ讀者諸君のために戒とならんことを望むものである。（明治四十二年一月『中學世界』）

## 文壇の趨勢

近頃は大方方々の雑誌から談話をしろくと責められて、頭がらん堂になつたから、當分品切れの看板でも懸けたい位に思つてゐます。現に今日も一軒断りました。向後日本の文壇はどう變化するかなど、いふ大問題は、なか／＼分りにくい。況や二三日前迄『文學評論』の訂正をしてゐて、頭が痺れた様に疲れてゐるから、早速に分別も浮びませんが、夫に、似寄つた事を先達てごく簡略に『秀才文壇』の人に話して仕舞つたから、生憎此方面も種切れですが、まあ、折角だから——いつ御出になつても、私の談話が御役に立つた試しがない様だから、詰らん事でも責任逃れに話させよう。

私が小説を書き出したのは何年前からか、確と覚えてゐるないが、決して古くはない。見方によれば極近頃であると云つてもよろしい。然るに我文壇の潮流は非常に急なもので、私よりあとから小説家として世にあらはれ、又一般から作家として認められたものが大分ある。今も續々出つゝある様に思はれる。私は多忙な身體だから、外の人の作を一々通讀する暇がない。立て込んで來ると、つい讀み損つて、夫限りにする事もあるが、出來る丈は參考の爲め、研究の爲め、或は興味の爲め、目を通して見る。所が年一年と日を経るに従つて、みんな面白い。段々老熟の手腕が短篇のうちに行き渡つて來た様に思はれる。妙な比較をする様だけでも、近來日本の雑誌に出る創作物の價値は、英國の通俗雜誌に掲載せられる短篇ものよりも、すつと程度の高いものと自分は信じてゐる。だから日本の文壇は前途多望、大いに樂觀すべき現象に充ちてゐると思ふ。

そこで今云つた通り、新參の私のあとから既に四五人の新進作家が出る位だから、其あとからも亦出て



來るに違ひない。現に出でつゝあるんだらう。又未來に出でようとして待ち構へてゐる人も定めて多い事だらうと思ふ。して見ると是等の四五の新進作家は——必ずしも是等の人に限る必要はないが——又新しい競争者を得らるゝ事と信ずる。

此競争者の出かたである。出かたに二通りある。一つは自分の繩張うちへ這入つて來て、似寄つた武器と同種の兵法劍術で競争をやる。元來競争となると大抵の場合は同種同類に限る様です。同種同類でないとは本當の比較が出来ないからでもあるし、ひとつあいつを乗り越してやらうと云ふ時は、裏道があつても却つて氣が付かないで、矢つ張り當の敵の向うに見える本街道をあとを慕つて駈け出すのが、心理的に普通な状態であります。——すると同圏内で競争が起る。此競争の刺激によつて、作物が段々深さを増して來る。種類が同じだから深さ以外に競争のしやうがないのである。

今一つの競争は圏外に新手が出る事でありませう。是から新たに文壇に顔を出さうと機を覘つてゐる人、もしくは既に打つて出た人のうちで、今迄のものとは徑路を同じうする事を好まない人がないとも限らない。是は今迄の作物に飽き足らぬか、もしくは、おれはおれだから是非一派を立て、見せると自己の特色に自信を置くか、または世間の注意を惹くには何か異様な武者振りを見せないと効力が少いとか、色々の動機から起るのだらうが、要するに模擬者でもなければ、同圏内の競争者でもない。即ち圏外の敵である。此種の競争者が出て來ると、文壇の刺激は種類の間に起る。種類が多ければ多い程文壇は多趣多様になつて、互に競り合が始まる譯である。

もし此二種類の競争、即ち圏の内外に互に競争が同時に起るとすると、向後吾人の受くる作物は此兩個の刺激からして、在來のは益在來の方向で深く發達したもの、新興のは新興の領分で出來得る限りを開拓して變化を添へる様なものになる。尤も圏外の競争が烈しくなると、圏内の競争は比較的穩かになる。又

圏内の競争が烈しい時は、比較的圏外が平和である。

圏内の競争が烈しくなるか圏外の競争が烈しくなるか、どちらに傾くかは、讀書界の傾向で大部分極められる問題であります。もし讀書界が把住性が強くつて、在來の作物から猶或物を豫期しつゝある間は、圏内の競争が烈しい。又讀書界が推移性に支配されつゝあつて、何か新發展を希望する場合には、圏外に優勢なものがあらはれ勝になる。もし讀書界が兩分されて半々になるときは、圏内圏外共に相應の競争があつて、相應の讀者を有する譯になります。私は實際の作物にあつて、兎角の評をする事をしない。従つて向後の讀書界がどう云ふ作物をどう歡迎するかは云へない。たゞ形式ばかりの話で甚だつまらないが、各自此形式を實地にあてはめて見たら、色々な鑑定が出來るだらうと思ふ。

競争は到底免れない。又競争がなければ作物は進歩しない。今日の作物が是迄進歩したのは、作家の天分にもよるだらうけれども、大部分は競争の賜物だらうと考へます。英國の政黨は立憲政治の始まつた時から二派に分かれてゐる。あれは偶然の様な必然の様な歴史を有してゐるが、相互に相互を研究し啓發すると云ふ大原則を、政治上にうまく應用したものであります。尤も是は圏外の競争の意味である。さうして、日本の作物が輒近四五年間に大變進歩したのは、全く此圏外の競争の結果ではなからうかと思はれる。圏外の競争は一方に於て反撥を意味してゐる。けれども其反撥の裏面には、同化の芽を含んでゐる。反撥すると云ふ事が、既に對者を知らねば出來ない事になる。對者を知る爲には一種の研究をしなければならぬ。其研究をして反撥し合つてゐるうちに、對者の立場やら長所やらを自然と認めなければならぬ。其時にある程度の同化はどうしても起るべき筈である。文壇が此期に達した時には混戦の状態に陥る。混戦の状態に陥ると一騎打の競争より外になつて仕舞ふ。日本の文壇が既に混戦時代に達したか、あるひは達せんとしつゝあるかは、讀者の判斷に任せて置きます。



所謂文明社會に住む人の特色は何だと纏めて云つて御覽なさい。私にはかう見える。所謂文明社會に住む人は誰を捉まへても大抵同じである。教育の程度、知識の範圍、其他色々の資格に於て、略似通つてゐる。だから誰かれの差別はない。皆同じである。が、同時に一方から見ると、文明社會に住む人程個人主義なものはない。どこ迄も我は我で通してゐる。人の威歴やら束縛を決して肯はない。信仰の點に於ても、趣味の點に於ても、あらゆる意見に於ても、かつて雷同附和の必要を認めない。又阿諛迎合の必要を認めない。して見ると所謂文明社會に生息してゐる人間程平等的なるものはなく、又個人的なるものはない。既に平等的である以上は、圈を畫して圈内圈外の別を説く必要はない。英國の二大政黨の如きは、單に採決に便宜なる約束的の團體と見做して差支ない。既に又個人的である以上は、どこ迄も自己の特色を自己の特色として保存する必要がある。

文壇の諸公を所謂文明社會に住む人と見做せば、勢ひ此性質を具して居るものと認めなければならぬ。人間として此性質を帯びてゐる以上は、作物の上にも早晚此性質を發揮するが、天下の趨勢である。所謂混戦時代が始まつて、彼我相通じ、しかも彼我相守り、自己の特色を失はざると共に、同圈異圈の臭味を帯びざる様になつた曉が、わが文壇の歴史に一段落を告げる時ではなからうかと思ひます。

(明治四十二年一月「趣味」)

## 小説に用ふる天然

天然を小説の背景に用ふるのは、作者の心持、手心一つでせう。天然を作中に入れて引き立つ場合もあれば、入れなくても濟む場合もある。私はどちらとも言ひかねます。

現にゼーン・オーステン女史の如きは、其作中に天然を用ゐたところがない様に記憶してゐます。全く人間ばかりを描いて居たかと思はれる。トマス・ハーデー氏の如きは、天然を背景に用ゐて居るが、夫はウエツセツクス附近の光景に限つたもので、其地方的特色がハッキリと浮び出て居る。同氏の小説は一名ウエツセツクス小説と言はれて居る位で、其背景に用ゐた天然が、巧みに作中にある人物の活動や事件の發展を助けて居るやうです。だから此人の作からは殆ど天然を切り離す事が出来かねる位です。スチブソン氏も亦其作中に天然を用ふる側の人で、背景の趣が如何にも繪畫的に鮮明に見えます。而して其天然は靜的よりも動的の方面が多く、又夫に深い興味を持つて居るやうです。即ち風の吹きすさむ有様や、雨の降りしきる光景を、さながらに寫し出すことが上手である。而して其觀察力は頗る神經的に鋭敏で、細かいところも遁さぬ爲に、いき／＼した感じを與へます。全體を通じて其潑刺たる才氣と、眼の好惡の極めて鋭い處を現はして居るやうです。

コンラッド氏になると、其小説の中に天然を描くことが、人一倍好きな所が見えます。而して、其背景に多く海を用ふるのは、氏が若い時から船に乗つて朝晩海上の光景に親しんだ影響にも依るのでせうか。其作中には、舟火事、難船、航海、暴風雨などを細かく寫したところに一種獨特の筆致が見えるし、作物の上に多少の色彩を加味するやうにも思へるが、天然の活動を描く方に氣を取られ過ぎて、ともすると主



客観倒の現象を呈する事があります。

メレヂス氏の場合には、其戀物語などの背景として、それに相應しい詩的な光景を描くことがあります。一口に言ふと、氏の書き方は曲つたねぢくれた書き方ですが、自然に對する強烈な感じを色や匂ひなどの微妙な點に現はして、詩的な戀物語めいた小説の背景に相應しいやうに出來上つて居る。且氏は、普通の物象を普通以上に鋭く濃かに描いて、強い印象を與へんとして居るやうです。之を概括すると、ゼーン・オーステン女史は作中に天然を用ゐないでも巧みに纏まつた作を出して居りますが、コンラッド氏に至ると天然に耽るの結果、背景に取り入れた天然の爲に、却つて一篇の作意を打壞はして居る事があるやうです。他の三氏は此中間を行つて、天然を背景に用ゐる適當の調和を得て居るのみならず、其作意をも助け居る點があります。して見ると、天然を作中にとり入れるについては、善いとも悪いとも言へない。畢竟は其時と場合と事柄とを考へて、適宜に用ふるの外はありますまい。(明治四十二年一月十二日『國民新聞』)

## 余の描かんと欲する作品

如何なるものを描かんと欲するかとの御質問であるが、私は、如何なるものもかきたいと思ふ。自分の能力の許す限りは、色々種類の變化したものを書きたい。自分の性情に適したものは、なるべく多方面に互つて書きたい。然し、私のやうな人間であるから、それは單に希望丈で、其希望通りに書くことは出來ないかも知れぬ。で、御質問に對して漠然とした御答ではあるが、大抵以上に盡きて居る。私は、或主義主張があつて、其主義主張を創作に依つて世に示して居るのではない。であるから、かう云ふものを書いてかうしたいと云ふ、局部的な考へは別にない。従つて、社會一般に及ぼす影響とか感化とか云ふけれども、夫も作物の種類性質によつて自ら生じて來るものであるから、かう云ふ方面の人をかう云ふ風にかう云ふ點で影響しようと思ふのは、茲に判然と具象的に出來上つたものに就いて云ふことで、夫を、作物の未だ出來上つて居ない未來のことに就いて、今茲に判然と云ふことは出來ない。

では過去の作物に就いて話せと云ふのですか。では貴方の方で質問を提出して下さい。それに就いて御答へすることにします。『虞美人草』の藤尾の性格は、我儘に育つた私の強い所から來たのか、自意識の強いモダンな所から來たのかと云ふのですか。夫は兩方に跨つて居る。單に自意識の強いモダンな所を見せようと云ふ、それを目的として書いたなら、あゝは書かなかつたであらう。然し一面に於てはそれも含んで居る。従順な女と私の強い女を、藤尾と糸子に依つて對照させ、そして、さうした性格の異なる二個の女性の運命を書いて見せたのかと云ふのですか。別にそんな考へはない。必ずしも自意識の強い女はあゝ云ふ風に終るもので、糸子のやうに順良な女はあゝ云ふ結果になると極つたものではない。従つてあ



の作に異つた性格を有する二個の女性の運命が書いてあるからと云つて、直にあの作に依つて世間全體のあゝした性格の女性を説明し盡したと思はれては困る。兩方ともあゝ云ふ性格の女はあゝなると極つては居ない。唯バテイクユラー・ケースがあゝなると云ふ丈で、全體があゝ云ふ運命になると云ふことは含んで居ない。

で、あゝした二個の女性を描き、あの事件を發展させ、そしてあゝした終りになつたのは、何か教訓的意味を含んでゐるのではないかと御尋ねであるが、一體教訓と云へば、所謂昔流の小説に於て、道徳上の制裁を讀者も作者も豫期して居た時代に、人の云々した世の中の教訓に合はして拵へたのかと御聞きになるのなら、さうぢやないと御答する。夫は、作家として茲に一種の教訓的の考へを頭に置いて、其考へに都合の好いやうに人物を造り事件を發展させて作物を捏ね上げたと云ふことは、自分で作家の資格を削り取ると同じことではあるまいか。けれども、一種の作品が出来て、其作品が作品として出来る——即ち作品として外のモチブに支配を受けないと云ふ意味、更に言葉を換へて詳しく云ふならば、自分の利害關係の爲に作品を拵へ上げたとか、或は私憤を洩らす爲に書き上げたとか、すべて目的が他にある所の作品は、私は作品として出来上つたとは云はない。作品として出来上つたと云ふ意味は、何物の支配も命令も拘束も受けずに、作品其物を作り上げることを目的として作られた作品のことである。——で、作品として出来上つた所の其作品が、何かの教訓を讀者に與へるならば、夫は敢て作家の辭する所でない。一向差支へないのである。だから讀者が『虞美人草』を読んで、此作はかう云ふ教訓を書くために、それに合はせるやうに殊更に作家が筆を曲けて書いたのだと云ふことを感じるならば、私は、其作に殊更故意に書き上げた作爲の痕跡が見える丈、それ丈多く作品としては失敗したものを書いたのであると云はねばならぬ。

けれども、作品としては自然と出来上つたもので、故意とらしく教訓を狙つて書いたものではないが、自然と出来上つた其作品の中に於て、自分は如上の教訓を認め得たと云ふならば、私は作家として満足である。其作物に於て是非共現はさなければならぬといふ作家の一種の哲學に捉へられて、そして、事件の發展なり性格の活動なりを其自分の目的に都合の可いやうに按排して、作家の私が、殊更にあゝ云ふ結果を齎したと云はれては、假令其現はさんとした哲學なり教訓なりを現はす目的を如何に能く達しても、作家としての私の面目は潰れる譯になる。

イブセンを能く引合ひに出すやうであるが、イブセンのものを讀むと、彼は一種の哲學に依つて其作品を作り上げて居るけれども、然し其作品を讀んで、作家が一種の哲學に捉へられて描いた作品であるとは思はれない。描き出されて居る人間が動いて居て、シチュエーションが自然に、殊更筆を曲けたやうな痕跡なく、あすこまで煎じ詰められて來て居るのであるから、吾々はイブセンを讀んで、彼は一種の哲學を發表する爲に、殊更な非藝術な作品を作つたとは思はない。イブセンの作に曲ぐべからざる生命のあるのは其故だらうと思ふ。所がバーナード・ショウになると、私は餘り多くは讀んで居ないが、兎に角自分の讀んだだけの範圍で云ふと、茲に一種の哲學なら哲學があつて、夫を現はす爲に殊更な劇を組み立てたやうに思はれる。即ち、其哲學に何處までも因はれて居る。哲學に壓迫された劇である。だから其處にイブセンとショウとの間に大なる差違があるやうに思ふ。即ち同じく哲學を持ち乍ら、其哲學の爲に作り上げる作品が累ひされて、直にそれが讀者の眼に見え透るか、或は自然に作り上げられた作品の中へ其哲學が疊み込まれるかの別れる處は、ほんの僅かな一線で、其處が呼吸ものだと思ふ。私の『虞美人草』などは問題になるまいが、兎に角其極く幽かな一線の別れ方に依つて、作品として失敗する人と成功する人とに別れるのである。



教訓的意味を藝術的作品に依つて得る必要はないと云ふが、それは教訓の爲に作品の價値を枉けてはいけないので、自然な作品の中から自ら教訓が浮いて來るなら、一向差支ないと思はれる。で、總ての文藝上の作品は、或意味に於て、必ず一種の教訓を持ち來すものである、と私は信じてゐる。その教訓の意味とか、何う云ふ譯で教訓になるとか云ふことに就いて述べたいが、今は時間がないから略する。尤もこれは今度出版する『文學評論』の中に詳しく書いて置いた。(明治四十二年二月『新潮』)

## メレデイスの訃

ジョージ・メレデイスが死んだと云ふ外國電報を見て、夏目漱石先生を訪ねて聞いた話、問は自分、答は先生。五月十九日。野上白川記。

問 先生はメレデイスの小説を読みましたか。

答 大抵皆讀んだ。而して大變エライと思つてゐる。

問 それでは批評して下さい。

答 批評は急に出來ない。其譯は纏つた批評の出來る程頭の準備が出來て居ないからである。纏つた批評をしようと思ふと、皆讀み直さなければならぬ。

問 それは如何いふ譯です。

答 第一、小説の筋も大抵忘れてしまつたし、其構造も覚えてゐない。たゞ在るものは、是等が變形して自分の頭腦の何物になつてゐるもの丈である。既に變形して自分の組織になつてゐる物を自己以外の或物として出せと云つたつて、どこから出してよいか分らぬ。

問 それでもメレデイスの感化を受けてゐるでせう。

答 無論受けてゐる。今日まで讀んだ本で感化を受けぬ本は殆ど無い。然し感化を受けるのと其本を覺えるのとは別物である。例へば物を食つたり飲んだりするやうなもので、食つたもの、批評も出來ず、味も忘れて仕舞つても、其實質丈は胃の腑から身體へ廻つて、たしかに血肉となつて何時迄も存在してゐる。讀書も批評を目的とするのと、又其筋を記憶することを主とするのと、又批評や筋はどうでも構はない、實際讀んだものが消化れて無形のあるものとなつて頭腦のなかに有意無意の間に存在すれば結構だとする



ものと、この三通りに區別する事が出来る。

問 さうすれば、先生のメレデイスは其第三種に屬するのですか。

答 まあさうだね。例へば僕が人の謠を聞く。それを批評する爲でもなく、また其通りを真似る爲でもないとしても、其謠が何時となしに感化を與へて此方の謠が變つて來る場合もあるだらう。本を讀むのも其通りで、別に批評する氣でもなく、又梗概を知る爲でもなく、たゞ無責任に讀んで筋などは大抵忘れて居て、しかも、その實質が何時か自分の組織の一部分となつてゐる場合も少くはないだらう。

問 或本にメレデイスは心理解剖の上に於てジョージ・エリオットの後繼者と云ふべき人だとありましたが、さうでせうか。

答 エリオットは全く違ふ。大體の上から云ふと、メレデイスの小説はユニークなものである。あんな小説はメレデイスに始まつてメレデイスに終ると云つたらよいだらう。真似たつて出來ず、又真似る氣にもなるまい。ことにかのシェーヴィング・オブ・シャグバットなどは他に全く類例の無い物である。嚴格に云つたら小説と云ふ可き物ではないかも知れぬが、よくあんなに盛んな想像力が續けられるものだと思ふ。

問 誰の小説の特長は何だ、と云ふ様な事をよく云ふが、メレデイスにもさう云ふ事が云へませうか。

答 夫がつまんで話せる位なら、立派に批評が出来る事になるぢやないか。

問 メレデイスには警句がありますね。

答 メレデイスにはアフォリズム、警句と云ふ物が多い。あの警句は誰にも真似の出來るものぢやない。オスカー・ワイルドの使ふアフォリズムがよくあれに似てゐるのがある。然しオスカー・ワイルドのは哲學ではない、氣の利いたウキットのやうなものだ。メレデイスのは夫が哲學である。

問 メレデイスが物を書く態度はどんな風ですか。

答 物を見てもたゞ見た通りに書く人ではない。或は又見た時の感じ丈を書く人でもない。メレデイスは物を見て物を感じて、さうしてそれを作家として批評的に書く人である。それもイムプリシットリーではなく、エクスプリシットリーに、遠慮なく敘事の間判断をしたり講釋をしたりする。其判断なり講釋なりには、彼の人間として批評家としてのえらい所が現はれてゐる。且他人に望み得べからざる面白い所が現はれてゐる。元來ならこれが邪魔になつて興味を殺ぐ筈であるが、其邪魔をする文句がメレデイスにあつては身上になるのである。

問 其代り一種の弊に囚はれはしないでせうか。

答 是等の講釋は動もすると平凡とか陳腐とかに陥り易いものであるが、メレデイスには、そんな弊はない。只時としては厭味に陥る事がある。英語で讀んで居ると夫程までも感じないけれども、もし之を日本語に譯して讀んで見たらばと思ふ事が、屢ある。妙な所の間投詞が出て來たり變な擬人法を用ゐたり、をかした事が多くあるやうである。例を擧げるのが一番分り易いけれども、長くなるから仕方がない。

問 それはメレデイスと云ふ人間とメレデイスの此遣り方に伴ふ短所でせうか。

答 短所には違ひないが、夫を没して了へば従つて長所も亦なくなる譯である。真にメレデイスを味ふ人でなければ、長所さへも面倒で、贅疣のやうで、讀むに堪へぬだらうと思ふ。今日の日本の多くの小説家の遣り口を正しいものとして見れば、メレデイスは全く駄目である。筋を運んで行く間に作者自身の感想やら意見やらが續々紛出して半分以上は入らぬ物になつて仕舞ふ。

問 メレデイスは随分理窟っぽい小説家ですね。

答 一面では理窟を述べると同時に、一面では極めて詩的な事を書く人である。同じ美くしい所を書い



ても、ダンヌンチオなどの様な芝居の背景じみた美しくしきとは大分趣を異にして居る。描かれる自然のうちには、一種の陽炎の如き感情が断えずちらつて居る。鏝でベト／＼と塗り附けたのではなく、感じて描くから、情景が躍動して居る。例へば女が月の夜に森の中で堅琴を弾じて居る所がサンドラ・ペロニにある。それからリチャード・フエヴァレルの初めにルーシーと云ふ女が男と逢ふ所が描いてある。其他エニスの水にゴンドラを浮べて橋の上から見下ろす男と應對をしたり、月の夜に馬を飛ばして戀人に逢つたり、或は廣い海の中で男と女が海豚の如く泳ぎ廻つたり、色々な場面があるが、悉く一種の詩趣を帯びて居る。しかも決して糊細工の様な浪漫的の臭氣を帯びて居ないから面白い。

問 英國人の書いた物を見ると、皆メレデイスを褒めて居るが、實際そんなに廣く賞翫されて居るのでせうか。

答 メレデイスは決してポピュラーな作家ではない。メレデイスの本には第一、二三十錢のチープ・エデイションが一つもない程である。それにも拘はらず雑誌などで、メレデイス程悪口を云はれぬ人はない。まるで國寶か何かの様に考へて居ると見えて、英國では皆んなが第一流と認めて尊敬を拂つて居るらしい。藝術としての小説を論ずる時などは、いつでもメレデイスかハーデーを引合に出す。例へばホール・ケーンの悪口を云ふ爲には其反對の例として、メレデイスを引合に出すと云ふやうな事が多い。然し一方でこんなに尊敬を拂つて居る人も、其實どの位の程度までメレデイスを讀んで居るかは疑問である。

問 メレデイスは最初から評判のよい作家だつたのでせうか。

答 さうぢやない。初めは頗る評判の悪い小説家だつた。シエーヴィング・オブ・シヤグバットの出たのが一八五六年で、それから二年程後れてリチャード・フエヴァレルが出た。少數の人は認めて居るが、一般の評判は此頃からよくなかつた。其後凡そ五十年しても——一九〇四年頃の話であるが——メレデイス

スがまだこんな事を云つて居る。イギリスの人間は自分の事は何も知つて居ない。彼等と自分との間には相容れぬ處があると見える。書物が出る度にいつも悪口計り云はれて居る。初めの一二度は氣にした事もあるが、夫以來は自分は自分の氣に入る爲に書いて居る。——此言葉を見てもメレデイスは自ら普通の英人氣質を以て任じて居ない事が分る。

問 メレデイスは普通の英人ぢやなくつてケルトの血が混つて居るのでせうか。

答 アイリツシとウエルシの混合ださうだ。(明治四十二年『國民新聞』)



## テニソンに就いて

五五二

テニソンに就いての談話といつて何も無い。が、一つある。

詩は御承知の通り散文でないから特別の構造を持つてゐる。是は無論の話であるが、其特別な構造が、讀んで直ぐ耳に響くのでなければ、詩としての面白味の半分以上はなくなつてしまふ。其讀んで直ぐ耳に響く點、即ち調子の面白味と云ふものは、外國人に取つては大變に困難な事である。ところが日本の外國文學を遣る人が、詩を研究して其面白味を頻りに説く處を見ると、自然其口調の面白味も其人々にはよく呑込めて居るとしきやあ見えないが、夫が自分には頗る不思議である。今日迄外國文學を遣る人で、特に其難かしさを後進に教へた人もなく、自白した人もない。だからさういふ人には判つてゐるのかも知れないが、自分は自分の經驗から考へて、只驚く計りである。

西洋の人がミュージックがあると云つて讚める句が、自分にはちつとも徹へない事がある。例へばコルリツヂの『クブラ・カーン』といふ詩は非常に有名なもので、非常に調子がいゝといふのであるが、自分は少しも感じない。(私が英吉利で大學の講義を傍聴に行つた時、プロフェッサのケーアといふ人が文學の講義をしてゐたが、講義としては初學者に遣るやうな講義であつたが、其時序であつたか或は其事の講義であつたか忘れたが、『クブラ・カーン』の事が出て來た。さうして初めの二行程を暗誦した。其時私は大變感心して面白く聴いた。かういふ經驗はある。) 却つて外國人の讚めぬものゝ方に、自分の耳へ調子としてよく響くのである。

私は不束ながら此年迄文學を専門にやつた男であつて、自分の發音も他の日本人に比べて下位に居る

方ではない。又日本、支那、西洋等の文章の調子に無頓着な方ではない。それで居て判らない。他の人が其困難を今日迄稱へないのは不思議でたまらない。

西洋でもメトリックスといふものがあつて、メトリシャンに色々の派があり、或人は科學的に研究するといふ人があれば、或人は直覺的に行くといふ人があり、種々に分かれて議論をしてゐる。現にミルトンのプロソディを専門に書いた人もある。さういふものをひつpegせば研究は出来る。けれども耳の養成には少しもならぬ。さういふものを研究して詩の調子の面白味を知らうとするのは、文法を研究して旨い文章を作らうとしたり、フォネチックスを研究して旨い發音を遣らうとしたり、或は謠のゴマ節を研究して旨く謠を謠はうといふのと同じ事で、殆ど役に立たぬ。私は現今は外國文學の研究を怠つてゐるが、假令五六十になる迄遣つても、恐らく判るまいと思ふ。此困難を認められた人は、私一人ぢやない。外國にもある。バイロンは歐羅巴中に響き渡つた人で、非常に尊敬を受け有名であつた。ところが肝腎の英國人は、大家とはするが夫程には買つてゐない。夫をゴスといふ人はかう説明して居る。バイロンの詩は調子の整つてゐない處が大變ある。夫故耳の肥えた人には不向きな處が多い。夫が外の歐洲人には全く通じない。中の意味の方の面白味は通じて、其缺點が通じない。——是も一つの解釋で、聽て困難といふ證據になる。似通つてゐる外國人間にすら此困難がある。

所が私に一つの取り除けがある。といふのは、テニソンの詩の調子のミュージックだけはよく判る(尤も程度問題ではあるが)。滑かて旨い具合に音が出て來るといふ事が明らかに判る。尤もテニソン以外でも、斷片としては、詩の構造の種類に由つては、日本人によく判るのがある。けれども、我々によく判るのは非常に單純な奴で、ひねくれた込み入つた物になつたら判らない。ブラウニングは難しい詩を作る。同時代では人氣はテニソンに及ばなかつたが、専門の學者になると無論テニソンより上に見る。ブラウニ

五五三



ングの詩は特別に研究もしないが、中に書いてある事、人間の腹がよく出てゐるとか人間がよく現はれてゐるとかいふ點は旨いと思ふ事もあるが、調子になると判らん。(向うの人は評してラゲッドといふが私にもさう思はれる。) 一二は面白いと思つたものがあつたが、概して判らん。

詩計りでなく、散文でも調子は解しにくいけれども、散文の方が私には解しやすい。十九世紀以後の文章家としてはド・クインシー、ウォルター・ベーター、スチーヴンソン、キップリング等は主なるものである。其他にも此間死んだハーンさんとか、ラスキンとか、其他散文の大家として有名な人は幾らでもあるが、四人に就いての私の経験を話すと、私にはド・クインシーとスチーヴンソンとラスキンとの調子はよく判る。面白い。けれどもウォルター・ベーターは判らん。ウォルターのは餘程骨折つて一つの句を作り上げたもので、殊にフレーズのポジションを大變骨折つて組み立て、夫が一つの句になり、夫を其順序で讀むと一種の響が出る、とかういふ事であるが、夫が私には徹しない。

散文ですら斯の如くである。詩に至つては愈むづかしい。其中に在つてテニソンの詩だけよく判るのは、私に取つて著しく面白い事實である。私は日本人であるから、私によく判るテニソンの詩のミュージックの面白味は、恐らく外の日本人にもよく判るだらうと思ふ。固よりテニソンも特に其點に意を用ひたものらしく、言葉の繪畫的といふのが其詩の一つの要素、又音樂的といふのが其他の一つの要素になつてゐる事は、已に世に定論がある。——是等は私に對しての特別な點がなければ殊更御話する必要もないのであるが、夫があるから、御話するのである。(明治四十一年八月六日『國民新聞』)

## 語學力養成に就いて

語學の力の有つた原因 一般に學生の語學の力が減じたこと云ふことは、餘程久しい前から聞いて居るが、私も亦實際教へて見てさう感じた事がある。果してさうだとすれば、それは何う云ふ原因から起つたか。その原因を調べなければ學習の方針も教授の方針も立つものでないが、専門的にそれを調べるには、その道の人が幾らもある。私は別に纏まつた考がある譯ではないが、氣附いた事だけを極ざつと話して、一般の教育者と學生の参考にしようと思ふ。——私の思ふ所に由ると、英語の力の衰へた一原因は、日本の教育が正當な順序で發達した結果で、一方から云ふと當然の事である。何故かと云ふに、吾々の學問をした時代は、總ての普通學は皆英語で遣らせられ、地理、歴史、數學、動植物、その他如何なる學科も皆外國語の教科書で學んだが、吾々より少し以前の人に成ると、答案まで英語で書いたものが多い。吾々の時代になつても、日本人の教師が英語で數學を教へた例がある。恁る時代には伊達に——金時計をぶら下げたり、洋服を着たり、髻を生したりするやうに——英語を使つて、日本語を用ひる場合にも、英語を用ひると云ふのが一種の流行でもあつたが、同時に日本の教育を日本語でやる丈の餘裕と設備とが整はなかつたからでもある。従つて、單に英語を何時間教はると云ふよりも、英語で總ての學問を習ふと云つた方が事實に近い位であつた。即ち英語の時間以外に、大きな意味に於ての英語の時間が非常に澤山あつたから、讀み、書き、話す力が、比較的に自然と出來ねばならぬ譯である。

語學の力の衰へた原因 處が「日本」と云ふ頭を持つて、獨立した國家といふ點から考へると、かゝる教育は一種の屈辱で、丁度、英國の屬國印度と云つたやうな感じが起る。日本の nationality は誰が見て



も大切である。英語の知識位と交換の出来る筈のものではない。従つて國家生存の基礎が堅固になるにつれて、以上の様な教育は自然勢ひを失ふべきが至當で、又事實として漸々其地歩を奪はれたのである。實際あらゆる學問を英語の教科書でやるのは、日本では學問をした人がないから已むを得ないと云ふ事に歸着する。學問は普遍的なものだから、日本に學者さへあれば、必ずしも外國製の書物を用ゐないでも、日本人の頭と日本の言語で教へられぬと云ふ筈はない。又學問普及といふ點から考へると、(或局部は英語で教授してもよいが)矢張り生れてから使ひ慣れてゐる日本語を用ゐるに越した事はない。たとひ翻譯でも西洋語その儘よりはよいに極つてゐる。

是が自然の大勢であるが、余の見るところでは、過去の日本に於て最著しく人爲的に英語の力を衰へしめた原因がある。それは確か故井上毅氏が文相時代の事であつたと思ふが、英語の教授以外には、出来る丈日本語を用ゐて、日本の *Language* に重きを置かしむると同時に、國語漢文を復興せしめた事がある。故井上氏は、教育の大勢より見た前述の意味で教授上の用語の刷新を圖つたものか、或はた、「日本」に對する一種の愛國心から遣つたものか、その邊は何れとも分らないけれども、要するにこの人爲的に外國語を抑壓したことが、現今の語學の力の減退に與つて力ある事は余の親しく目撃した所である。

**改良の效果如何** 以上の理由と事實で、學生の語學の力が前より衰へて來たのは誠に正當な現象で、毫も不思議がる譯はないのであるし、又同時にそれは日本の教育の進んだ證據でもある。従つて最初當局者がかう云ふ教育方法を採る時には、既に將來語學の力の衰へることを豫想すべきは當然である。然るに井上氏死後何年か後の今日に至つて、その結果が漸く現はれて、誰も彼も語學の出來ぬことを自覺し始めると、今更のやうに苦情が出て、色々な心配をする。色々な調査をする。或は教へ方が悪いのだとか、或は時間が足らぬのだとか云ひ出すのは可笑しな事である。要するに語學力の衰へた眞因は、日本國體の發展

と、前述の教育方法の變化に在るのだから、何等の犠牲も拂はずに、日本が日本的の教育を施す方法の案出されない以上は、今更英語の力が足りないといつて騒ぐ譯には行かない。けれどもこの結果は、必然にもせよ、當然にもせよ、良くないと云ふことは事實で、良くない爲に教育上の或方面では、非常な苦痛を感ずる以上は、出来る程度では是非何等かの改良をしなければならぬ。改良すれば無理が出来る。無理をしなければ改良は出來ぬ。どちらも良いと云ふことはない。私は昨今、中學教育が如何なる程度まで改良せられ、又如何なる方法で施されて居るかは知らぬが、要するに何う奮發しても、非常な無理をしなければ、英語教授の上に目醒しい効果のありやう筈はないと思ふ。

**改良の三要點** 暫く立ち入つてもう少し具體的に、何故に改良の效果がないかと考へるに、つまり普通教育などで、かう云ふ風の改良をするには、時間、教授法、教師の三つ以外には改良すべき方法がないからである。所がいくら喧しく時間の改良と云つた處で、本末を轉倒して外國語に多數の時間を與ふる事が出來ぬのみならず、普通教育の程度以上では、第二外國語をやる必要があるから、逆も時間の繰り合はせがつかない。又教授法は随分肝腎なものであるが、いくら細目が立派に出來てゐた所で、教授法自身が活動して呉れる譯でないから、よくそれを體得した教師が充分の活用をして呉れなければ、効果が擧がるものではない。教授法とは畢竟、適當な教師が周圍の事情を見計らつて、これが最良だと思つて實行しつつある教授を概括して、條項に書き並べたものに過ぎない。故に適當な教師が居なければ、如何に條項が完備してゐても、到底其運用が出来るものでない。同時に適當な教師さへあれば、教授法などか制定せられなくても、その行ふ所が自然教授法の規定した細目に合ふ譯である。夫故大家が教授法をこしらへて、汎く一般の教師に遣らさうとしても、空な望に歸してしひはせぬか。最後に教師の事を考へて見ると、今の中學の英語教師の大半は、大方故井上氏の方針で頓挫を來した語學教育の中に育つて來た人々である。



語學と云へば簡單であるけれど、區分すれば、話すこと、書くこと、讀むこと、譯することなど色々あるが、夫等の各方面に渡つて一通り力のある人でなければ、總てのことが一通り出来る生徒を養成することが出来ない。若し教師が或點は非常によく出来ても、或點は全く出来ないと言ふ風に、その力が偏寄つてゐるならば、その生徒は矢張り偏寄つたものと成る譯だ。現今の教師中には英語を日本語に譯することの巧い人が多い——今日の日本では、かう云ふ人が一番必要かも知れないが——同時に生徒も比較的英語の意味を取ることが上手である。然し是で満足する譯には行かぬ。何も彼も一通りは出来なければならぬとしたならば、そんな教師は果して幾人あるだらうか、甚だ覺束ない次第である。

**教師の養成** かう三つ共駄目だとすれば、いくら藻掻いたとて効果の擧がる筈がない。然るに茲處に一つの道がある。それは新たに教師を作る事である。私は曾て大學と第一高等學校に關係を有つてゐる時に次のやうな事を考へた。——文科大學は素と學者を作る所であるが、現在の狀況から云へば、其卒業生は大方教師に成る。殊に外國文學を修める者は教師になるのが多いやうである。學者であるべきものが、教師が出来ぬといふ事はないが、教師として不適當でも學者にはなれるのだから、事實を云ふと純文學科にあつては、事實上、大學は、學者よりも教師——もつと切實に云へば、不適當な教師を作つてゐるのである。従つて國家は *Distribution* から、非常な損害をして居る。此損害を免れる爲に、私は適當な教師を作る案を立てた。即ち英文科に入るものを、今の様に、各高等學校に散在せしめず、悉く是を第一高等學校に集めて一組として、在學中は他と混同せしめず、一年から三年まで特別の教育をする。即ち三年間特に英語に重きを置いた一種の教育を施して、然る後に之を大學に送ることにする。無論その卒業生は、學者に成るも教師に成るも、當人の勝手次第であるが、かくすれば萬遍なく語學の力を有つた人が得られるに相違ない。——余は之を大學から適當な語學教師（英語）を出す唯一の方法と信じた。今でもさう信

じてゐる。大學に入つてからの課目や教授法も、現在とは變へる必要もあらうが、夫は第二の事で、肝腎の根本は何うしても斯うしても養成しなければいけないと思ふ。英文科の志望者を一高等學校に集めるといふ事は、特別の教授をやる上に於て必要なのみならず、其道に適當な教師を得て其下に學ばしむる方針から云つても、かうした方がよいのである。

**教師の試験** 今一つは從來の教師を如何にして改良するかといふ事である。事實行はれ難い事であるかも知れぬが、私は全國の中學の英語教師の試験を、時々文部省でしてやつたら好からうと思ふ。教師の精勤其他は校長にも分るが、教師達が平生どれ丈自己の修養に努めてゐるかは、こんな方法でも講じなければ分り様がない。無論其試験は隨意でよい。申し出るもの丈に施してもよい。兎に角二年に一度位づ、成績を取つて置いて、これを校長の報告と比較し、色々考へ合はして、昇級増俸の道を講じてやる。さうしなければ、中學の教師をして、勉強しよう抔といふ氣は、丸でなくなつて仕舞ふ。生徒も不幸である。本人も氣の毒である。尤も是丈の仕事をする爲には、文部省にエキザミナーを澤山傭はねばならない。従つて不經濟ではあるが、此試験官は平生他の方面に利用することが出来るから、決して損には成らない。即ち試験をしない時の彼等は、始終中學の英語教師と氣脈を通じて、修養上其忠告者となるのである。たとへば語學に關した新著新刊の様なもの、月二三回づ、印刷して各中學へ送つてやる。時間が許すなら、其内容やら體裁やらを報知してやる。又教師の方でも教授上不審の事や、同僚間で疑義の決せぬ折は、書翰で試験官に問合せ。すると試験官の方でも一々丁寧とその返事を出すといふ風に、萬事教師の便宜を計つてやる。かうすれば一方では獎勵になり、一方では改良になつて、教師も當局者も共に便宜を得る事だらうと思ふ。

### 教科書の問題

教科書は大いに考ふべき問題である。今の中學生は色々な書物を讀んで、知らないでも



よいやうな字を覺える代り、必要な字を覺えてゐない。誠に馬鹿々々しい話である。普通英吉利人はどれ程の單語を知つてゐるか云ふに、極めて僅少のものである。日本の中學生は彼等の知らぬ字を却つて知つてゐる。必竟教科書がよく整理されてゐないからである。そこで文部省では中學の英語教科書を作る必要がある。其教科書は一年から五年に通じて、普通の英國人が分る文字と事項とを、萬遍なく割り振つて排列する様にする。即ち彼等の一般に知つてゐる文字と事柄には、五年中何處かで出逢ふが、其代り六つかしいジョンソンの『ラセラス』に出て来る様な字は全く省いて、生徒に無用な腦力を費させない様にしてやる。さう云ふ教科書を作るには、何うしたら好いかと云ふに、私は外國の新聞を基礎にするのが一番好いやうに思ふ。『ロンドン・タイムス』でも『デイリー・メール』でも、一月一日から十二月三十一日まで通讀すれば、如何なる文字と如何なる事柄が如何に多く繰り返されて社會に起るか、好く分る。それで大體の統計を取れば、どの字と、どの事柄と、どの句が比較的一番必要であるか、分る。分つた處を組織立て、教科書に編入する。中には三百六十五日の中、何百遍となく繰り返されるものもあるに相違ないから、そんなものには重きを置いて、教科書中にも幾度も繰り返して置くと同時に、年に一遍とか半年に一度位しか見當たらぬものは、全く省く事にする。さうすると二三年立つうちにはかなり經濟的に英語を短い時間内で教へる事の出来る教科書が、科學的な、秩序立つた系統の下に編成される譯である。かうして拵へた教科書を其儘に放り出して置かずに、猶外國新聞を基礎として、時勢の變化に伴つて起る言語文字の推移に注意して、十年に一度位宛改版する積りで永久事業としたら、生徒は大變な利益を得る事であらう。無論此事業は前に云つた試験官の平生の仕事の一とするのである。顧問として適當な西洋人を備ふのも一法である。

時間の利用　かくして教師が出来、教科書が出来れば、此度は時間の問題であるが、時間は出来る丈や

る。即ち時間の許す限りやる。細かい教授法、例へば文法何時間、會話何時間と云ふやうな事は、詳しく論ずれば意見もないではないが、かゝる事は臨機應變にやればよい。たゞ目下の如く、各を獨立せる科目の如くに取扱ふのはよくない。有機的統一のある言語を、種々の科目に分けて教へるのは、丁度區劃しがたき迄一氣に活躍せる肉體を切り離して、神經の専門家、胃腸の専門家、呼吸器の専門家を作るやうなもので、研究の爲にはよいが、大體の知識のない生徒から云ふと、會話とか、文法とか、譯讀とか云ふ風に、教師が専門的に分かれて截然區別のある様に取扱つて居るのはよくない。どうしても各自が互に連絡のつくやうに教へ込んで行かなければならぬ。吾々日本人は御覽の通り自由自在に日本語を操るが、生れてから今日迄に會て文法を習つたことはない。文法を習はないでも差支なく日本語は話せるのである。英語もその通りで、吾々が子供の時から絶えず日本語を使つて、自然とその文法に通ずるやうに、日々反覆して練習すれば夫で澤山なのである。然し一週間に何時間と時間を限られては、日本に生れた人でも、かく日本語に上達する譯には行かぬから、今の中學でたゞ練習の結果自然と英語を學ぶのは困難である。已を得ず先づ規則を知つてそれを骨とし、それに肉を着せて互の意志を疏通するやうに話し書く外はない。(少時間の練習では、逆もべちやく喋舌り散らす域に進むことは出来ないから。) 然し根本的に云ふと、文法は何時迄經つても丁度幾何の theorem のやうなもの、譯讀は其活用問題のやうなものであるから、文法を離れて譯はなく、譯を離れて文法はないものと合點しなければならぬ。高等學校へ入つて來る中學卒業生などを見ると、shall, will の事柄は喧しく云ふが、實際譯讀をさせると妙な誤りをやる。彼等の頭の中には両者は全く獨立して居る如く私には見える事があつた。これは大弊害である。文法と譯讀は單に例として引いた迄だが、其他の科目、作文、會話、讀方、皆同じ事である。有機的統一と云ふ事を考へて、互に融通の利くやうな親切な教へ方をしなければならぬ。その爲には一つの組を一人で持つて、總



ての時間を好い加減に使ひこなす方が便利になつて来る。さうすれば時間も經濟になつて、効果も大いに擧がることであらう。然しこれはほんの餘談である。要するに目下の必要は教科書編成と教員の養成及び改良である。それに就いて今まで述べた以外に、言ふべきことも澤山あるが、此處では言はぬことにする。——話が教へる方の側ばかりになつて、つい教はる生徒の方に及ばなかつたのは遺憾であるが、餘り長くなるから是で止める。(明治四十四年一月、二月『學生』)

## 博士問題

何故學位を辭退したか其理由を話せと云ふんですか。さう几帳面に聞かれると困ります。實は私も朝日の社員ですし、社員の一人が學位を貰ふとか貰はぬとか云ふ事ですから、辭退する前に一應池邊君に相談しようかと思ひましたが、夫程社の利害と關係のある大事件でもないと思ひましたから、差控へて置きました。實は博士會が五六の人を文學博士に推薦すると云ふ事は、新聞の雜報で一寸見た計りで、眞偽も分らず、一兩日を過ぎました。すると突然明日午前十時に學位を授與するから文部省へ出頭しろと言ふ通知が、留守宅へ夜遅く來たのださうです。左様、家のものは慥か夜の十時頃とか云つてゐましたが、大方其時下女が夜中郵便函でも開けて取り出したのでせう。それで其翌日の朝電話で、本人は病氣で出られなると云ふ事を文部省へ斷つたさうです。其日の午後妻が病院へ來て通知書を見せたので、私は初めて學位授與の事を承知したのです。さうです、無論代理は出しませんでした。

私は其夕方すぐに福原君に學位を辭退したいからといふ手紙を出しました。すると私の辭退の手紙と行違に、其晩文部省から——エ、と證書と云ひますか、何と云ひますか——學位を授與すると云ふ證書を、小使——家のものは小使と云ひましたが、私は實際誰が持つて來たか知らない——に持たせて宅の方へ届けて呉れたのです。夫は早速福原さんの手許迄返させました。辭退の出來るものと思つて辭退したのは勿論の事です。私は法律家でないから、法律上の事は知りません。たゞ私に學位が欲しくないと云ふ事實があつた事です。學位令が勅令だから辭退が出來ないと云ふのですか。そんな法律の事は少しも知りません。然し勅令だから學位令を變更するのが六づかしいと云ふなら、私にも解るが、博士を辭退出來ないと云ふ



のは、何んなものでせう。何しろ文部省から通知して来て文部大臣が呉れるから、唯文部省丈の事と思つてゐました。文部省の人々に御面倒な御手数を懸けるのは好くないとは思ひましたが、已を得ませんでした。

貰つて置いて善いものか悪いものか、そんな理窟に關係した問題は、大分議論が八釜しく成りますし、今必要ありませんから、個々の批評に一任するとして、茲に——私は實に面白いものだと思つて「看護婦に通知状を出させて」居るものがあります。文部省邊の人には當然かも知れませんがね、此通知状を御覽なさい。文句無しに打突け書きで突然「二十一日午前十時同省に於て學位授與相成候條同刻までに通常服云々」。是を見ると、前以て文部省が私に學位を呉れるとか、私が學位を貰ふとか云ふ相談があつて、既に交渉済になつて、私が承知し切つて居る事を、愈明日執行するからと知らせて來た様に聞えるでせう。それに此終の但し書に、差支があつたら代理を出せとあるでせう。然し果して此通知状を私が受取つてから、午前十時までに相當の代理者が頼めるものか頼めぬものか、よく分りませんものね。や、實は社の方計りでなく此方「病院」へもかう祝ひの手紙が飛び込んで來るんで弱つてゐます。まさか私は博士ではありません、と新聞へ書くのも可笑しいと思つて差控へて居ります。(明治四十四年二月二十四日「東京朝日新聞」)

\* 拜啓昨二十日夜十時頃私留守宅へ(私は目下表記の處に入院中)本日午前十時學位を授與するから出頭しろと云ふ御通知が参つたさうであります。留守宅のものは今朝電話で主人は病氣で出頭しかねる旨を御答へして置いたと申して参りました。

學位授與と申すと二三日前の新聞で承知した通り博士會で小生を博士に推薦されたに就て、右博士の稱號を小生に授與になる事かと存じます。然る處小生は今日迄たゞの夏目ながしとして世を

渡つて参りました。是から先も矢張りたゞの夏目ながしで暮したい希望を持つて居ります。従つて私は博士の學位を頂きたくないのであります。此際御迷惑を掛けたり御面倒を願つたりするのは不本意であります。右の次第故學位授與の儀は御辭退致したいと思ひます。宜敷御取計を願ひます。敬具

二月二十一日夜

夏目金之助

専門學務局長福原鏡次郎殿



## 博士問題の成行

五六六

博士事件に就いて其後の成行はどうなつたと仰しやるのですか。實はそれぎり何うもならないのです。福原君にも會ひません。芳賀君杯から懇談を受けた事ありません。文部大臣は學位令によつて學位を私に授與したにはしたが、もし辭退した時には何うすると云ふ明文が同令に書いてないから、其場合には辭退を許す權能を有してゐないのだと云ふのが、當局者としての福原君の意見なのです。成程さうも云はれるのでせう。然しそれでは恰も學位令に博士は辭する事を得ずと明記したと同様の結果になる様ですが、實際學位令には辭する事を得ずとも又辭する事を得ずとも何方とも書いてないのぢやないですか。(甚だ不行届ですがまだ學位令を調べてゐません。然し慥かさう云ふ風に聞いてゐます。) 諸何方とも書いてない以上は、辭し得るとも辭し得ないとも自分に都合のよい様に取る餘地のあるものと解釋しても可くはないでせうか。すると當局者が自己の威信と云ふ事に重きを置いて「辭する事を得ず」と主張すれば、私の方では自己の意志を楯として「辭する事を得」と判斷しても構はない事になりはしませんか。

又夫程重大なものならば、萬一を慮つて(表向き學位令に書いてある通りを執行する前に)、一應學位を授與せられる本人の意志を確かめる方が、親切でもあり、又御互の便宜であつた様に思はれます。兎に角當局者が榮譽と認めた學位を授與する位の本人ならば、其本人の意志と云ふものも學位同様に重んじてよさうに考へます。

私は當局者と争ふ氣も何もない。當局者も亦私を壓迫する簡は更でない事と信じてゐます。此際直接福原君の立場としては甚だ困られるだらうとは思ふけれども、明治も既に五十年近くになつて見れば、政府で人工的に拵へた學位が、さう何時迄も學者に勿體なからなければ政府の威信に關すると云ふ様な考へは、當局者だつてさう銳角的に維持する必要もないでせう。實は先例があるとかないとか云はれては、少し迷惑するので、私は博士のうちに親友もありますし、又敬愛してゐる人も少くはないのですが、然し必ずしも夫等の諸君の轍を追ふて生活の行路を行かねばならぬと迄は考へてゐないのであります。先例の通りに學位を受けると云はれるのは、前の電車と同じ様に、あとの電車も喰付いて行かなければならない様で、丸で機械として人から取扱はれる様な氣がします。博士を辭する私は、先例に照らして見たら變人かも知れませんが、段々個人々々の自覺が日増に發展する人文の趨勢から察すると、是から先も私と同様に學位を斷る人が大分出て來るだらうと思ひます。私が當局者に迷惑を掛けるのは甚だ御氣の毒に思つてゐるが、當局者も亦是等未來の學者の迷惑を諒として、成るべくは其人々の自由意志通り便宜な取計ひをされたものと考へます。猶又學位令に明記がない爲に、今回の様な面倒が起るのならば、此面倒が再び起らない様に、どうか御工夫を煩はしたいと思ひます。學位令のうちには學位褫奪の個條があるさうですが、授與と褫奪が定められて居ながら、辭退に就いて一言もないのはちと變だと思はれます。夫ぢや學位をやらず、へい、學位を取上げるぞ、へい、と云ふ丈で、此方は丸で玩具同様に見做されてゐるかの觀があります。褫奪と云ふ表面上不名譽を含んだものを、是非共頂かなければ濟まんとすると、何時火事になるか分らない油と薪を脊負はされた様なものになります。大臣が認めて不名譽の行爲となすものが必ずしも私の認めて不名譽となすものと一致せぬ限りは、いつ何時どんな不名譽な行爲(大臣のしか認める)を敢てして褫奪の不面目を來たさないとも限らないからです。(明治四十四年三月七日『東京朝日新聞』)

五六七



私が巨萬の富を蓄へたとか、立派な家を建てたとか、土地家屋を賣買して金を儲けて居るとか、種々な噂が世間にあるやうだが、皆嘘である。

巨萬の富を蓄へたなら、第一こんな穢い家に入つて居はしない。土地家屋などはどんな手続きで買うものか、それさへ知らない。此家だつて自分の家ではない、借家である。月々家賃を拂つて居るのである。世間の噂と云ふものは無責任なものだと思ふ。

先づ私の収入から考へて貰ひたい。私にどうして巨萬の富の出来やう筈があるか——と云ふと、ではあなたの収入は？と訊かれるかも知れぬが、定収入といつては朝日新聞から貰つて居る月給である。月給がいくらか、それは私から云つて善いものやら悪いものやら、私にはわからぬ。聞きたければ社の方で聞いて貰ひたい。それからあとの収入は著書だ。著書は十五六種あるが、皆印税になつて居る。すると又印税は何割だと云ふだらうが、私のは外の人のよりは少し高いのださうだ。これを云つて了つては本屋が困るかも知れぬ。一番賣れたのは『吾輩は猫である』で、従来の菊判の本の外に此頃縮刷したのが出来て居る。此兩方合はせて三十五版、部数は初版が二千部で、二版以上は大抵千部である。尤も此の三十五版と云ふのは上巻で、中巻や下巻はもつと版数が少い。幾割の印税を取つた處が、著書で金を儲けて行くと云ふ事は知れたものである。

一體書物を書いて賣るといふ事は、私は出来るならしたくないと思ふ。賣るとなると、多小慾が出て来て、評判を良くしたいとか、人氣を取りたいとか云ふ考へが、知らず／＼に出て来る。品性が、それから

書物の品位が、幾らか卑しくなり勝ちである。理想的に云へば、自費で出版して、同好者に只で頒つと一番良いのだが、私は貧乏だからそれが出来ぬ。

衣食住に對する執着は、私だつてない事はない。い、着物を着て、美味しい物を食べて、立派な家に住む度いと思はぬ事はないが、唯それが出来ぬから、こんな處で甘んじて居る。

美服は好きである。敢て流行を趁ふ考へもないし、もう年を取つたからしやれても仕方がないと思つて居るので、妻の御仕着せを黙つて着て居るが、女などがい、着物を着たのを見ると、成程い、と思ふ。

食物は酒を飲む人のやうに淡泊な物は私には食へない。私は濃厚な物がいい。支那料理、西洋料理が結構である。日本料理などは食べたいとは思はぬ。尤も此支那料理、西洋料理も或食通と云ふ人のやうに、何屋の何でなくてはならぬと云ふ程に、味覺が發達しては居ない。幼稚な味覺で、油っこい物を好くと云ふ丈である。酒は飲まぬ。日本酒一杯位は美味いと思ふが、二三杯でもう飲めなくなる。

其代り菓子食ふ。これとてもあれば食ふと云ふ位で、態買つて食ひたいと云ふ程ではない。煎茶も美味いと思つて飲むが、自分で茶の湯を立てる事は知らぬ。烟草は吸つて居る。一時廢した事もあつたが、烟草を吸はぬ事が別に自慢にもならぬと思つたから、又吸ひ出した。餘り吸つて舌が荒れたり胃が悪くなつたりすれば、一寸止すが、癒れば又吸ふ。常に家に居て吸つて居るのは朝日である。値段は幾らだか知らぬが、安いのであらうが、妻がこれ計り買つて置くから、これを吸つて居る。外に出て買ふ時に限つて敷島を吸ふのは、十錢銀貨一つ投り出せば、釣銭が要らずに便利だからである。朝日より美味いか如何か、私には解らぬ。

家に對する趣味は人並に持つて居る。此間も麻布へ骨董屋をひやかしに出掛けた歸りに、人の家をひやかして來た。一寸眼に附く家を軒毎に覗き込んで、一々點數をつけて見た。私は家を建てる事が一生の目



的でも何でもないが、やがて金でも出来たら、家を作つて見たいと思つて居る。然し近い將來に出来さうもないから、如何云ふ家を作るか、別に設計をして見た事はない。

此家は七間ばかりあるが、私は二間使つて居るし、子供が六人もあるから、狭い。家賃は三十五圓である。家主は外との釣合があるから四十圓だと云つて呉れと云つて居るが、別に嘘を云ふ事もないと思つて、人には正直に三十五圓だと云つて居る。家主が怒るかも知れぬ。地坪は三百坪あるから、庭は狭い方ではない。然し植木は皆自分で入れたのである。こんな庭の附いてゐる家としたら、三十五圓や四十圓では借りられないだらう。植木屋と云ふものは勝手なもので、一度手入をさせたら、こつちで呼ばないのに、時若い者を連れて仕事にやつて来る。物の一月餘りもこち／＼其處等をいぢつて居る事がある。別に斷るのも妙だと思つて、何とも云はずに居るが、中々金がかかる。

私はもつと明るい家が好きだ。もつと綺麗な家にも住みたい。私の書齋の壁は落ちてゐるし、天井は雨洩りのシミがあつて、随分穢ないが、別に天井を見て行つて呉れる人もないから、此儘にして置く。何しろ疊のない板敷である。板の間から風が吹き込んで、冬などは堪らぬ。光線の具合も悪い。此上に坐つて讀んだり書いたりするのは辛い、氣にし出すと切りがないから、關はずに置く。此間或人が来て、天井を張る紙を上げませうと云つて呉れたが、御免を蒙つた。別に私はこんな家に、こんな暗い穢い家に、好きで住んで居るのではない。餘儀なくされて居るまでである。

娛樂と云ふやうな物には別に要求もない。玉突は知らぬし、圍碁も將棊も何も知らぬ。芝居は此頃何かの行掛り上から、少し見た事は見たが、自然と頭の下がるやうな心持で見られる芝居は一つもなかつた。面白いとは勿論思はぬ。音楽も同様である。西洋音楽のいゝのを聞いたら如何か知らぬが、私は今までさう云ふ西洋音楽を聞いた事のない爲か、未だ一度も良い書畫を見る位の心持さへ起した事はない。日本音

樂などは尙更詰らぬものだと思ふ。只謠曲丈はやつて居る。足掛六七年になるが、これも怠けて居るから、どれ程の上達もして居ない。下がりの實生で、先生は實生新氏である。尤も私は藝術のつもりでやつて居るのではなく、半分運動のつもりで唸るまでの事である。

書畫だけには多少の自信はある。敢て造詣が深いといふのではないが、いゝ書畫を見た時計りは、自然と頭が下がるやうな心持がする。人に頼まれて書を書く事もあるが、自己流で、別に手習ひをした事はない。本當の恥を書くのである。骨董も好きであるが、所謂骨董いぢりではない。第一金が許さぬ。自分の懐都合のいゝ物を集めるので、智識は皆無である。どこの産だとか、時價はどの位だとか、そんな事は一切知らぬ。然し自分の氣に入らぬ物なら、何萬圓の高價な物でも御免を蒙る。

明窓淨机。これが私の趣味であらう。閑適を愛するのである。

小さくなつて懷手をして暮したい。明るいのが良い。暖いのが良い。性質は神経過敏の方である。物事に對して激しく感動するので困る。さうかと思ふと、又神経遲鈍な處もある。意志が強く押さへる力のある爲と云ふのではなからう。全く神経の感じの鈍い處が何處かにあるらしい。

物事に對する愛憎は多い方である。手廻りの道具でも氣に入つたの嫌ひなのが多いし、人でも言葉つき、態度、仕事の遣り口などで、好きな人と嫌ひな人がある。どんなのが好きで、どんなのが嫌ひかと云ふ事は、何れ又記す機會があらうと思ふ。

朝は七時過ぎ起床。夜は十一時前後に寐るのが普通である。晝食後一時間位、轉寐をする事があるが、これをする時頭の具合が大變よいやうに思ふ。出不精の方で餘り出掛けぬが、時々散歩はする。俗用で外出を已むなくされる事も、偶にはないではない。人を訪問に出る事はあるが、年始とか盆とかの廻禮など



は絶対にしない。又する必要はないと考へて居る。

執筆する時間は別にきまりがない。朝の事もあるし、午後や晩の事もある。新聞の小説は毎日一回づ、書く。書き溜めて置くと、どうもよく出来ぬ。矢張一日一回で筆を止めて、後は明日まで頭を休めて置いた方が、よく出来さうに思ふ。一氣呵成と云ふやうな書方はしない。一回書くのに大抵三四時間もかゝる。然し時に依ると、朝から夜までかゝつて、それでも一回の出来上がらぬ事もある。時間が十分にあると思ふと、矢張長時間かゝる。午前中きり時間がないと思つてかゝる時には、又其切り詰めた時間で出来る。障子に日影の射した處で書くのが一番いゝが、此家ではそんな事が出来ぬから、時々日の當たる縁側に机を持ち出して、頭から日光を浴びながら筆を執る事もある。餘り暑くなると、麥藁帽子を被つて書くやうな事もある。かうして書くと、よく出来るやうである。凡て明るい處がよい。

原稿紙は十九字詰十行の洋罫紙で、輪廓は橋口五葉君に描いて貰つたのを春陽堂に頼んで刷らせて居る。十九字詰にしたのは、此原稿紙を拵へた時に、新聞が十九字詰であつたからである。用筆は最初Gの金ペンをを用ひた。五六年も用ひたらう。其後萬年筆にした。今用ひて居る萬年筆は二代目のオノトである。別にこれがいゝと思つて使つて居るのでも何でも無い。丸善の内田魯庵君に貰つたから、使つて居るまでである。筆で原稿を書いた事は、未だ一度もない。(大正三年三月二十二日『大阪毎日新聞』)

## 釣鐘の好きな人

長塚節君と私とを結び付けたものは、『ホト、ギス』に出た君の佐渡の紀行文であつた。私はそれを見て面白いと思つた。それで私が朝日の文藝方面を擔任して居た際、君に長篇小説の寄稿を頼んだ。其私の注文に應じて出来たのが『土』であつた。あれは書き方が少し堅くなり過ぎたと思ふ。あの材料を『佐渡ヶ島』のやうな筆つきで書いたら、更に一層面白いものになつたらうと思ふ。あれは本當の事を書いたのかと訊いたら、皆本當ですと云つた。あの火事の所も本當かと訊いたら、あすこだけウソですと云つた。

短篇ものは以前に五六種も發表して居た。『土』を書いたあとで、郷里の茨城や栃木は著しく殺人犯の行はれる所だから、其犯人を細かに書いて見たい、其準備として監獄をよく知りた、どうか自分で實際罪を犯して入獄することは出来ぬから、看守か押丁を勤めて見る積りだと云つて居たが、病氣の爲に其準備にも着手し得なかつた。『土』の續篇も書きたいと云つて居たが、これも遂げず了了ひであつた。

長塚君は旅行好きでよく紀行文を書いた。病氣が段々重くなつて來てから、紀行文だけでも纏めて置きたいといふ希望が、頻りに起つたらしかつた。君は又アラ、ギ派の歌人で、柔かい言葉でよく田園の自然を詠んで居た。

死んだ伊藤左千夫が親友であつた。誰を崇拜して居たかよく知らないが、緑雨が大變好きだつた。美術の方面では釣鐘に非常に趣味をもつて居た。

長塚君はカラツとした、氣安い、そして眞摯な、美しい人であつた。一體人と對座して話をして居る時には、對して居る人の形がハッキリと前に見えて居るのが、ひどく話をする邪魔になるといふ事が多い。



長塚君は僕と話をする際に、いつも相對して居る僕の形を忘れた。其忘れて居ることが僕によく解つた。向うが此方を忘れるので、こちらも向うを忘れた。尤も僕もいつも長塚君の形を忘れたから、此方が向うを忘れるから向うが此方を忘れるのか、向うが此方を忘れるから此方が向うを忘れるのか、どちらが先だか、そこは判然しない。かういふ事は外の人にもだつたか、或は僕にだけだつたか、それも知らない。ともかく長塚君は僕に大變好意を持つて居て呉れた。夏目さんには非常に御厄介になつたからゾンザイな手紙を出してはならんと云つて居たさうである。先達て弟から手紙が來たが、どうも大變に丁寧な手紙だつた。これも長塚君が注意をしたのだらう。

此間愈々篤だといふ事を聞いたものだから、早速病院へ電報で御回復を祈ると云つてやつた。ところが直きに返電が來た。さては死んだのかと思つて、見ると、大變によくやつたとの報知だつた。不思議だと思つて居たが、やはりそれは一時的の事で、到頭駄目でした。(大正四年三月「俳味」)

## 文壇のこのごろ

○文壇にあらはれる諸家の作物は、努めて讀むやうにして居るが、此頃讀んだもの、中に徳田秋聲氏の『あらくれ』がある。『あらくれ』はどこをつかまへても嘘らしくない。この嘘らしくないのは此人を通じての特色だらうと思ふが、世の中は苦しいとか、穢らほしいとか——穢らほしいでは當らないかも知れない。女學生杯の用ひる言葉に「随分ね」と云ふのがある。私はその言葉をこゝに借用するが、つまり世の中は随分なものだと云ふやうな意味で、何處から何處まで嘘がない。

○尤も他の意味で「まこと」の書いてある意味とは違ふ。従つて讀んで了ふと、「御尤です」と云ふ様な言葉はすぐ出るが、「御蔭様で」と云ふ言葉は出ない。「御蔭様で」と云ふ言葉は普通「御蔭様で有りがたうございました」とか「御蔭様で利益を得ました」とか「御蔭様で面白うございました」とか云ふ場合に多く用ひられるやうである。私のこゝで云ふ「御蔭様で」も矢張同じ様な意味であることは斷るまでもないであらう。

○どうも徳田氏の作物を讀むと、いつも現實味はこれかと思はせられるが、只夫丈で、難有味が出ない。讀んだ後で、感激を受けるとか、高尚な向上の道に向はせられるとか、何か或慰藉を與へられるとか、悲しい中に一種のレリーフを感じるとか、只の壓迫でなく、壓迫に對する反動を感じる様な、悲しみに對する喜びといふ様な、心持を得させられない。「人生はなる程こんなだらうと思ひます。あなたはよく人生を觀察し得て、描寫し盡しましたね。その點に於てあなたのものは極度迄行つて居る。これより先に、誰が書いても書く事は出來ますまい」。かうは言へるが、然し只それだけである。つまり「御尤です」で止



つて居て、それ以上に踏み出さない。

○まして、人生が果してそこに盡きて居るだらうか、と云ふ疑が起る。讀んで見ると、一應は盡きて居る様に思はれながら、どうもそれだけでは濟まない様な氣もする。こゝに一つの不滿がある。徳田氏のやうに、嘘一點もない様に書いてゐても、何處かに物足りない處が出て来るのは、此爲である。

○他の諸家——徳田氏程深く人生を見て居ない人々の方に、却つて徳田氏の作物の中に見出し得ない程の満足をして、徳田氏以上の感動を讀者に與へるものがある様に思はれる。

○つまり徳田氏の作物は現實其儘を書いてゐるが、其裏にフィロソフィーがない。尤も現實其物がフィロソフィーなら、それまであるが、目の前に見せられた材料を壓搾する時は、かう云ふフィロソフィーになるといふ様な點は認めることが出来ぬ。フィロソフィーがあるとすると、それは極めて散漫である。然し、私はフィロソフィーがなければ小説でないと云ふのではない。又徳田氏自身はさう云ふフィロソフィーを嫌つて居るのかも知れないが、さういふアイデアが氏の作物には缺けて居る事は事實である。初めから或アイデアがあつて、それに當て篋めて行く様な書き方では、不自然のものとならうが、事實其儘を書いて、それが或アイデアに自然に歸着して行くと云ふ様なものが、所謂深さのある作物であると考へる。徳田氏には是がない。

○徳田氏の作物が、『あらくれ』のみには限らぬが、どうも書きつばなしのやうに思はれるのは、此爲であらう。其點に行くと、武者小路氏の方が意味のあるものを書いて居る。武者小路氏は若い人で、世間に對しては智識も乏しいし、自然に書けば狭い範圍より出ないし、擴げれば不自然になるかも知れぬが、然し徳田氏に見る事の出来ぬ様な、或意味を書いて居る。尤もそれは手際の問題ではない。作風の問題である。○手際から云へば、徳田氏の作物は、眞面目で、落ちつきがあつて、無駄がなくて、老練である。どんな

物を書いて出来損ひがない。然し徳田氏に類似した作風の人は今頃の文壇にめづらしくはない。

○志賀直哉氏の『范の犯罪』は外の人には書けぬものである。先頃東京朝日に小説を頼んだ時、五十回ばかり書いてよこして呉れたが、自分はどうしても主觀と客觀の間に立つて迷つて居る。どちらかに突き抜けなければ書けなくなつたと云つて、止めて了つた。徳義上は別として、藝術上には忠實である。自信のある作物でなければ公にしないと云ふ信念がある爲であらう。其點に行くと長田幹彦氏などは、頗る達筆家である。三宅雪嶺博士が此頃よく演説の頼み手があると、何處へでもすぐ出掛けて行つて演説する。長田氏の精力的な點も、丁度雪嶺博士と同じ様なものである。

○有島生馬氏は特色のある作家である。『蝙蝠の如く』などは私の愛讀した一つである。此作などは、誰でも書けると云ふ様な種類のものではない。有島氏でなくては出来ぬものである。

○太陽に出た北村清六と名乗る人の『少年の死』も、矢張特色のあるもので、ありふれたものではない。今日迄始終繰り返へされて来た様な種類の物ではない。然し作物の價値としては、特に取立て、賞讃する程のものだとは思はない。

○森鷗外氏の此頃の作物、例へば『栗山大膳』とか『堺事件』とか云ふ様な、昔の歴史を取扱つたものを、世間では高等講談など、云つて悪く云ふが、私は面白いものだと思へる。物その物が面白いのみならず、目先が替つて居るだけでも面白い。高等講談など、云つて、一笑に附すべきものではない。尤も高等の文字がついて居るから、必ずしも冷笑の意味ではないと云ふなら、それでもよい。



## 文體の一長一短

五七八

一  
私には、なか／＼斯うした問題に就いて意見を述べる事が難しい。責任を感じてと言ふよりも、適當な言ひ現はし方がないからと、いろ／＼な理由からとである。殊に、文體の統一など、いふ豫言者めいたことも、そのいづれが便利であるかと云ふ事すらも言ひ得ないのである。

私は小説をかく爲に柔かい文體を用ゐる事が多い。言文一致と云ふが、兎も角結びの文句は其式になつて居る。文體はどれが宜いと云ふ事は、其人の智識の程度に従ふ事として置くのが、最無事であらう。また從來それでやつて來たのである。私は文章體、漢字假名交りの文體、漢文脈をひいて居る文章を好む。然し乍ら、夫は言文一致體などに多く觸れて居てたまに是を讀むのであつて、文章體そのものを特によいと認めて讀むと云ふ意味でもない。

言文一致體はかなりに擴がつて居る。其擴がつて行く力はかなりに盛んなやうである。こゝ數年來の傾向として、官廳の布告などにも、此文體を採用して來た様である。郵便局、鐵道院などの注意書などを見るとよく分る。是等をもつとも、文章文でなしに、言葉なり態度なりの變化と並行して來て居る様である。

### 二

言文一致が如何に便利であると云つても、どの場合にも之を使ふと云ふ譯には行かぬ。莊重なる文辭を

尙ぶところの勅語に於て、「であります」とか「さうなさい」と云ふが如き文字を用ゐられたとしたら、果してどう受け取られるであらうか。時にもよる、場合にもよる。

外國の巡查、倫敦の巡查などは、市民との關係が甚だしつくりとして居る。恰も友人關係である。物を問ふにも教へるにも、甚だ丁寧で役人面をしない。日本の巡查も此節はコラ／＼をモシ／＼にかへた様に、人民に對する言葉づかひなど非常に丁寧になつて來た様だ。然し、それは一部分に就いての傾向であつて、稅務署員よりも、郵便局員よりも、何が威張るつて、巡查の様に威張るものはあるまい。

然し、その威張るには相當の理由もありさうである。人民保護、悪人を調べたりなどするには此コラコラ調子でないといけないのかも知れぬ。又あまり人民と親しくなると、其處に一種の弊害があるかもしれぬ。此傳で、勅語なども矢張堅苦しいと云へば堅苦しいが、日常の生活と隔たり過ぎて居ても、此堅苦しい文句を使つた方が難有く思はれるのである。

其特長は何ものにも認める。其長所を利用し、特長を活かして行く事は、今後も續いて行きさうに思はれる。

### 三

私は今小説をかいて居る。午前中をその爲に用ゐるのである。一日の仕事、義務としては一回の小説をかきあげればそれでよいのである。然し、新聞小説は自ら約束があつて、私の如き最初は、なか／＼其約束に背きさうで困つた。或長さをきめて書いても、往々に豫定よりはみ出すものや、足りない處が出来る。それを處分するのは中々困難な業である。雜誌などの小説なら／＼先へ行つてもいいのだが、その約束の爲相當に頭を悩ます。約束とは適當な分量と、文句の段落が不自然でない様にする努力である。一回

五七九



一回のヤマではない。

私は、小説でない文章にしても、一時間に新聞の一段六十五六行をかき上げるのがやつとである。雑作もない様に人も思ふし自分も考へるが、やつて見るとなかく容易でない。殊に此頃は一層以前より筆が遅くなつた。以前の方が達者であつたのかも知れぬ。『猫』などは自分自身の興の浮ぶまゝに勝手なものを出してドン／＼書いて行つたので骨は折れなかつた。新聞の小説は骨が折れるものである。今も十二三回丈送つてある。一つはいつ病氣で臥床しても困ると思つたからである。然らば元氣のよい時に二回分もかいて置けばよいのだが、それも出来ない。

経験によれば、一日一回なら一回と定めたものには、矢張それ丈力が籠もる様で、二回かいて仕舞ふと、一回分の力が二回分に分割された様で、なかく自分を満足させると云ふ譯にはゆかない。

#### 四

私は愛讀書の問題に到着した。是などは質問の内最困るもの、一種である。私は愛讀書と云つて特になのだが、ないと云つて断るのも變である。さりとて之を擧げるは弊害がある。若干の書を限つて之を提出すれば、私はそのみを愛讀して居るかと思はれると困るのである。書齋に積まれたる全部の英書を以て愛讀書としたら、その方が公平かもしれぬ。英書計りでなく、希臘語の書も拉典語の書も佛獨の書も、色々ある。其中から好きなものを選つたら大變なものになる。と同時に、私は貴下は誰の影響を受けたか、問はれても困る。鹿兒島の人が西郷南洲翁の影響を受けたと云ふ事を聲明するのは甚だ容易の業であらうが、私は誰からも明言し得ぬ。私の智識を育てたのは、私の周圍に積まれた書からであるから、さう自白する事が最適當であると思ふ。(大正五年九月二十日『日本及日本人』)

### 第十五卷補遺

明治三十五年

「小羊物語」に題す 十句

一

I have full cause of weeping, but this heart  
Shall break into a hundred thousand flaws  
Or ere I'll weep. O fool! I shall go mad.

— King Lear II. vi.

雨ともならず唯風の吹き募る

二

Most sore, the Goddess  
On whom these airs attend! Vouchsafe my drayer  
May know if you remain upon this island;



見るからに涼しき島に住むからに  
— *The Tempest I. ii.*

三

That skull had a tongue in it, and could sing once;

— *Hamlet V. i.*

骸骨を叩いて見たる董かな

四

Lady, by yonder blessed moon I swear,  
That tips with silver all these fruit-tree tops.

— *Romeo and Juliet II. ii.*

罪もうれし二人にかゝる朧月

五

Methought I heard a voice cry 'Sleep no more!  
Macbeth does murder sleep.'

— *Macbeth II. i.*

小夜時雨眠るなかれと鐘を撞く

六

She never told her love,  
But let concealment like a worm in the bud,  
Feed on her damask-cheek;

— *Twelfth Night II. iv.*

伏す萩の風情にそれと覺りてよ

七

Yet I'll not shed her blood;  
Nor sear that whiter skin of hers than snow  
And smooth as monumental alabaster.

— *Othello V. ii.*

白菊にしばし透巡ふ缺かな

八

No, by my honour, madam, by my soul,  
No woman had it, but a civil doctor,  
Which did refuse three thousand ducats of me,



And begg'd the ring.

— *Merchant of Venice* V. i.

女郎花を男郎花とや思ひけん

九

Music, awake her; strike!

'Tis time; descend; be stone no more; approach;

Strike all that look upon with marvel.

— *The Winter's Tale* V. iii.

人形の獨りと動く日永かな

十

I could find in my heart to disgrace my man's apparel

And to cry lik a woman;

— *As You Like It* II. iii.

世を忍ぶ男姿や花吹雪



新撰會席卓袱趣向帳

亮 壽 子

明和八年  
須原屋直兵衛梓

神宮文庫圖書目錄  
(館友會雜誌第十五號附錄)

明治四十年  
皇學館館友會

從 吾 所 好

內 田 魯 庵 撰

明治四十四年  
玉曆會限定出版

鼻 科 學

久保猪之吉著

明治四十二、三年  
博文館  
二册



命印色本  
胃腸の養生法  
新胃腸病學  
今 (秋之卷) 樣  
衣裳色あはせ  
日本六法全書  
日本眞初新志 (卷一、卷二)  
日本歲時記  
明治寶生流小謠集  
東京帝國大學一覽  
茶人花押藪  
增補地錦抄  
地錦抄附錄  
流 行  
學士會會員氏名錄  
第一高等學校一覽  
包結圖說  
謠 と 能  
(日用百科全書第四十五編)  
簿樣色目  
農事試驗場特別報告  
本邦産穀夜蛾並科ニ關スル研究成績(第二十七號)

京都大半色本  
長與稱吉補  
杉本東造述  
菅稻吉記  
井上善次郎閣  
佐々木四方志著

國 明治四十二年 社  
光  
吐 明治四十三年 店  
鳳堂書  
松 明治三十九年 店  
屋吳服  
素 明治四十一年 堂  
綯  
清 明治四十二年 店  
水書  
風 明治十四年 會  
詠 二册  
雅陽 貞享五年 梓  
日新堂 六册  
江 明治二十八年 衛  
島伊兵衛  
東 明治三十九年 學  
京帝國大  
延享三年 板  
大阪荒木佐兵衛  
須原茂兵衛開板  
寶永七年 板  
七册(第四卷缺)  
須原屋茂兵衛開板  
享保十八年 板  
三册  
白 明治四十一年四月 屋  
木 二册  
學 大正四年 會  
士  
第 明治三十九年 校  
一高等學  
京都 天保十一年 梓  
靜幽堂藏 二册  
博 明治三十三年 館  
文  
須原屋佐助  
文政九年  
須原屋佐助  
明治四十四年  
農商務省農事試驗場

農事試驗場特別報告  
柿ノ品種ニ關スル調査  
(第二十八號)  
增補華布便覽  
文談花談  
永代雜書  
盆繪本三十六景  
(櫻山全集卷六)  
(光眞三十六景)  
園藝文庫  
(自一卷至十二卷)  
花間笑話  
(國藝文庫別卷)  
草木栽培全書  
(國藝文庫別卷)  
京洛中洛外艸  
嶽新流行  
新色見本  
別好都の面影  
京築  
早引紋帳大全  
伊呂波引定紋大全  
下掛寶生流謠本  
(内百番二十卷)  
(外八十番十六卷)  
下掛寶生流謠本  
(内百番二十卷)  
(外八十番十六卷)  
下懸内旅本謠  
掌中醫範  
神經衰弱の豫防法  
神經衰弱自療法

三宅恒方述  
久須美孫左衛門編輯  
野柳都太郎著  
加藤正治著  
前田曙山著  
磯川九華著  
千山萬水著  
若葉亭尙山輯  
神阪吉隆著畫  
綾部乙松編  
寶生新校訂  
大石原孝吉共編  
狩野謙吾著  
狩野謙吾著

明治四十五年  
農商務省農事試驗場  
明治十六年求版  
大阪文昌堂  
明治四十年  
春陽堂  
天保十三年  
須原屋等發行  
天保十四年  
手寫本  
明治三十六、七年  
春陽堂  
十二册  
明治三十六年  
春陽堂  
明治三十八年  
春陽堂  
明治二十三年  
京都文求堂  
弘化三年  
明治三十年  
盛花堂  
稽古本  
三十六册  
明治四十四、大正六年  
江島伊兵衛  
三十六册  
貞享四年  
京都荒川源兵衛  
二册  
明治四十年  
吐鳳堂  
明治三十九年  
新橋堂  
明治四十三年  
新橋堂



歷史地理

四國四岩屋寺摺物  
十五番

巖島土產

巖島彌山緣起小輯

印度西域佛蹟寫真帖

日本名家人名詳傳  
附諸名家肖像及落款印譜

東海道分間繪圖

東海兩道中懷寶圖鑑  
木曾

新東西年表

官幣大社 香椎宮之圖

韓國鐵道線路案内

統監府通信事業第二回報告

太宰府神社御略傳

官幣中社 太宰府神社境内之圖

豐前國 羅漢寺之真景

官幣大社 宇佐神宮全景

乃木大將寫真帖

松島鹽釜真景全圖

滿洲紀要  
(前編)

滿洲歷史地理

南滿洲寫真大觀

島村武助編輯

大谷光瑞編

優美館主人編  
樋口徳翁

遠近道印作畫  
藤川吉兵衛

井上頼國合撰  
大槻如電

西高辻信嚴著

渡邊銀太郎著

黒田甲子郎講述

箭内互撰  
稻松葉井

金澤求也著

四葉

明治二十八年  
廣島以文社

明治二十八年  
廣島川上吉右衛門

明治二十七年  
大阪優美館  
二册

元祿三年  
七郎兵衛板  
五帖

天明六年  
須原屋茂兵衛

明治三十一年  
吉川半七

明治二十二年  
博多木下美重

明治四十一年  
統監府鐵道管理局

明治四十一年  
統監府通信管理局

明治十九年  
太宰府神社社務所

明治二十八年  
太宰府神社社務所

二枚

明治二十五年  
宇佐神宮事務所

大正元年  
新橋堂

明治二十七年  
仙臺盛光堂

明治四十二年  
南滿洲鐵道株式會社

大正二年  
南滿洲鐵道株式會社  
二册

明治四十四年  
滿洲日日新聞社

御即位禮畫報  
(自第一卷至第四卷)

朝鮮歷史地理

朝鮮寫真帖

官幣中社 阿蘇神社全圖

安重根事件公判速記録

佐久間海軍大尉遺書

特製山水隨緣記

京の水  
(麟之卷、鳳之卷)

京都名勝記

九州鐵道旅客便覽

陸前金華山明細全圖

義士肖像贊詞

明治大年表

野州鹽原溫泉全圖

夏わすれ  
(鹽原溫泉紀勝)

國幣中社 鹽釜神社明細全圖

稿本 肥後先哲遺蹟

西山遺事

世界寫真圖說  
(露之卷)

津田左右吉著

徳富蘇峰著

湘夕編

黒田讓編

六花菴編纂

小川多一郎編

南城漫史著

武藤殿男編

志賀重昂著

大正三年  
御即位記念協會發行  
四册

大正二年  
南滿洲鐵道株式會社  
二册

明治四十三年  
滿洲日日新聞社

明治四十三年  
水交社

大正三年  
民友社限定出版

京都吉野屋仁兵衛等  
二册

明治三十六年  
京都五車樓書店  
三册

明治二十七年  
福岡森岡書店

明治二十七年  
仙臺盛光堂

嘉永三年  
櫻園吟社藏版

大正三年  
吉川弘文館

明治二十六年  
京都宮觀光堂

明治二十六年  
仙臺盛光堂

明治二十七年  
普及會

三册

寬政九年  
東知之手寫  
二册

明治四十四年  
地理調查會

雜書